明治三十二年一月二十五日發兌

女鑑

第百七十三號

東京國光社

女鑑第百七拾三號
目録

飯尾傳右衛門が妾



敬慕すべき人物

長閑なる春ながの日ぐらしには、さまざまの遊びもあるべけれど、ものしづかにして興あるべきは、思ふどち、隔てなく一つむしろにまとゐして、わが日ごろ尊びなつかしく思ふ古の人の上などを、かたみにしめやかに語りあふ事なめり。あはれ、大かたの孃たちよ、古の文を讀みたまへば、必ずやわけても尊くおぼえ、殊更になつかしくこひしくおぼゆる古の人こそあらめ。いかならん人をや、孃たちは、さるたぐひにしぬびたまふ。おのれは、さるきはの古の人もいと多きが中に、一しほゆかしく尊く敬慕の念にたへざるは、南朝の忠臣楠正行公のおん上なり。

公が四條畷にむけて出陣したまはむとて、吉野の皇居に參內し、最期のおん暇乞を申されたる詞に、

父正成尫弱の身を以て、大敵の威を碎き、先朝の震襟を休め進らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國よりせめ上り候間、危きを見て命を致す所、兼ねて思ひ定め候ひける歟に依りて、遂に攝州湊川にして、討死仕り候ひ畢んぬ。其の時、正行十三歳に罷り成り候ひしを、合戰の塲へは伴はで、河內へ歸し、死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即け進らせよと申し置きて死んで候。然るに、正行、正時已に壯年に及び候ひぬ。此の度我れと手を碎き合戰仕り候はずば、且つは、亡父の申しゝ遺言に違ひ、且つは、武略の云ひ甲斐なき誇りに落つべしと覺ゑ候。有待の身思ふにまかせぬ習ひにて、病に犯され早世仕る事候ひなば、只君のれん爲には不忠の身と成り、父の爲には不孝の子と成るべきにて候間、今度師直師泰に懸け合ひ、身命を盡し合戰仕りて、彼等が首を正行が手にかけて取り候か、正行正時が首を、彼等に取られ候か、其の二つの中に、戰ひの雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に參內仕つて候と申しもあへず、淚を鎧の袖にかけて、義心其の氣色に顯はれければ、

傳奏未だ奏せざる先に、先づ直衣の袖をぞぬらされける。（大平記）

有待の身思ふにまかせぬ習ひ、若し病ひに犯され早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身と成り、父の爲には不孝の子となるべき故に死をきはめての出陣。あはれ、其の言の悲しく切なる。我實に此の一言によりて、公を敬慕す。此の一言によりて、公が悲しく切なる忠孝の念の、限りなく忍ばるればなり。公は病身なり、されば、何時むなしく病ひの床にふして、いたづらにならんも慮られず。若し王事に非ずして仆れんには、忠心つくさず孝情達せず、此の身を如何せむ。されば、早く生あらむ中に、敵と一大決戰してやまむとの志し、病ひを恐れたる忠臣孝子の情、何ぞ其の忠心の悲しく切なる、何ぞ其の孝情の悲しくやさしき。我は實に涙を以て公が此の言をきく、我實に泣いて公が此の情を慕ふ。

世人、或は、公が四條畷の擧を以て、はやりすぎたる矢竹心と誹るあり。或は病は天なり、よしや病床に果つる事あらむも、忠孝の道に何かあらむ、さるに、病を恐れて決死の合戰に出で立ちたるは、反りて馬鹿正直にすぎて、其の功なかりしよと

笑ふ人あり。かゝらむ人は、實に公が忠孝の至情を知らぬ人なり。否、誠のやまとの民草が忠孝の至誠を知らぬ人なり。やまとの民にあらず、否、人にあらずといふべし。公が此の矢竹心、公が此の馬鹿正直、これ、實に眞誠の忠心なり眞誠の孝情なり。我は實に公が此の矢竹心、公が此の馬鹿正直を敬慕す。これ誠にやまとの民の有つべき至情なればなり。而して、此の至誠の情、此の至誠の公は、いかならむわたりにか養はれたる。元弘元年の湊川原、散るやめでたき橘、勤王のかをりゆかしき父がゆかりをうけたるは、もとよりなれど、若木の花を櫻井にとゞめたる良人の志を、かねて知り、歎きに亂れたる公が刀の手を取りて戒めたる母が家庭の力に養はれたるならずやは。孃たちよ、わが敬慕するは、公の至誠なり。孃たちよ、わが尊ぶ所は、公の家庭なり。孃たちよ、わが願ふ所は、斯の如き家庭をつくるにありかくの如き人をつくるにあり。

論説



女子の普通教育と英語

高津鍬三郎

鳳暦茲に改りて、明治三十二年とはなりぬ。新年の所感は、時勢の變遷に應じて、年毎に同じからざれど、今年の如きは、特に例に異なるものあるなり。如何となれば、我政府が、幾度か着手して幾度か成効せざりし條約改正も、漸く成就して、内地雜居の期も、半年の後にあらんとすればなり。是の時に際し、余は女子の教育に關して、聊か所感を述べんとす。

回顧すれば、明治十八九年の頃なりき。我國には、西洋主義最も勢力を逞くして、男女同權の論、家庭改良の説など、大に世間に唱へられ、都下にては、男女交際、舞踏會など、切りに催されしが、女子教育の、一時隆盛なりしも、また此時代にして、女學校の學科の中、特に重んぜられたるものは、英語なりき。されど、其女生徒の風儀の如きも、一に西洋風を摸して、たゞその及ばざらんことを恐れたるが如くなりき。然るに、か

くの如き敎育を受けたる女子は、從來の家庭に適せず、また、國民普通の生活程度にも適せざりしかば、忽ちその反動を來して、世間にては、一時女子の敎育を躊躇し、或は之を無用視する者あるに至りぬ。これ實に、女子敎育は西洋主義の爲に、犧牲に供せられたるものといふべし。畢竟、此の如き敎育法の行はれたるは、全く時勢の影響にして、止むことを得ざりしが如くなれども、當局者の用意周到ならざりし責は、蓋し免るゝこと能はざるべし。今や、漸くにして、世人も女子敎育の必要あることを覺り、高等女學校の如きも、續々各地に設立せらるゝに至れり。是の際あに前日の過を再びすべけんや。女子敎育の目的は、良妻賢母を養成するにあること、今更いふまでもなけれど、能くその目的を達すると然らざるとは、一にその方法の宜しきを得ると、得ざるとにあり。而して、その方法は、古今一定せるものにあらず、時勢により、境遇に應じて、多少の斟酌を要するものなれば、苟も女子敎育の任に當れる者は、常に深くこゝに留意せざるべからず。今や、高等女學校の設立、漸く各地に多くなりしは、全く世人が女子敎育の必要を認めたる結果に外ならざるべけれど、今日の形勢より考ふれば、その敎授科目の中に英語を加へ、且つ之を重んずる學校も、蓋し少からざるべし。吾人がこの豫想は、當るにもせよ、當らぬにもせよ、今後の高等女學校の科目に、英語を加ふることの利害得

失、また之を加ふるにしても、その程度の輕重、時間の多少の如きは、女子の教育上、今日大に考究すべき問題なるべし。

抑も、我國が、維新以來、僅々三十餘年にして、今日の如き文化の發達を致し、歐米の文明諸國に恥ぢざるに至りしは、固より、我國民の素養ありしに因るとはいへ、外國語の媒介によりて、その文物制度學術技藝を、傳來したる結果に外ならざるなり。而して、今後といへども、我國の文化を進めんには、外國の所長をとりて、我短所を補ふべきこと、蓋し少からざるべく、また列國の間にありて、獨立の體面を維持し、國威の發揚を期せんには、世界の大勢を知悉せざるべからず。この目的に向ては、益々外國語の講習を盛んにせざるべからず。方今、尋常中學校に於て、英語を重んじ、之が爲に多くの時間を費せるは、その生徒をして、卒業の後、博く智識を世界に求め、國家の爲に盡くすことを得しめんが爲なり。然れども、女子は元來その心身の能力、男子と異なるが上に、その本分は、人の妻となりて、一家を治むることを主とすべきものなれど、その力を伸ぶべき境遇も、男子と同じからず。故に、男子の教育には、極めて必要なる學科にても、女子の教育には、格別必要ならざるものあり。また、男子には通常全く不必要にして、女子には特別に必要なる學科も少からざるなり。而して、外國語の如きは、我國語と全

くその性質を異にするが故に、之を學習すること極めて困難なり。故に、生徒をして、之によりて新智識を得しめんとするには、少くとも毎週六時間を費して、三年以上の學習を積まざるべからず。これ從來の經驗に徵して明かなるところなり。されば、女子をして、外國語を學ばしめ、その効果を得しめんとするには、他の學科を學習すべき時間を減殺せざるべからず。かくの如くにして、外國語を學び得たりとするも、我國今日の社會の形勢にては、その實用果して如何ぞや。家庭百般の事に關しては、外國語の媒介に依らざるも、大抵その智識を得るに苦しむことなし。而して、女子の必修すべき學科には、裁縫、割烹、育兒、看護、作法等の如き、實際に缺くべからざるもの少からず。また、その嗜好を高尙にし。その品格を養成するに必要なる、音樂圖書の如きも、優美を旨とせる女子の敎育には、男子よりも必要の度更に大なりとす。すべて、これらの科目の智識を得るに非れば、女子の本分を完うすること能はざるなり。また、これらの科目の外に、國語數學の如きは、苟も敎育を受けたる者の、充分に講習せざるべからざる者なることは勿論なれども、國語の如きは、頗る複雜なるが故に、生徒をして普通の讀み書きを自由ならしむるには、容易の事に非ず。また、女子は極めて迷信の深きものなるが故に、理化學の大意を授け、普通の理化學的現象を知らしめざるべからず。また、女

子は男子よりも各地に旅行する機會の乏しくして、見聞を廣むること困難なるが故に、地理の如き學科も忽にすべからず。また、歴史の如きは、日本國民たる性格を養ふに必要なること、男子に異ならざるなり。故にもし女子をして、充分に外國語の講習を爲さしめんとせども、女子に必要なる、他の諸學科の智識を、幾分か犠牲に供せざるを得ざるべし。もし幸にして、此の如きことなしとするも、生徒が過度の勉強の結果は、その身體の發達を妨ぐる恐れなきにあらず。之を要するに、今日もし高等女學校にて、外國語を重んずることあらんには、蓋しその結果は得るところ少くして、失ふところ多かるべし。さはいへども、今の我國は、開國の主義をとりて、將に外人の雜居をも許るし、競爭の自由を與へんとする程なれども、女子といへども、全く舊時の如く、引込主義のみをとるべからず。世間に出でゝは、外國婦人に對しても、一歩を讓らざるの覺悟なかるべからず。今日の女子をして、此の如き性格を得しめんとするには、前にも述べたるが如く、第一に日本婦人たるに必要なる學科を授けざるべからず。苟も教育を受けたる者にして、その國語によりて、自由にその思想を現はすこと能はざらんには、外國人に對しても、あに大なる不名譽にあらずや。日本人にして、日本語を能くせざる者は恥辱なれども、外國語を知らざるは、いさゝか不名譽たることなし。但し、充分に自國語の教育を受けた

る上にて、尙ほ外國語にも通ずるは、非常なる便利なれば、勉めて學ぶべきなり。高等女學校等にても、今後は多少英語等を敎ふるの必要あるべし。然れども、國語は本にして、外國語は末なり。その本を固めて、而して後に、外國語に及ぼさざるべからず。またこれが爲に、我國從來の慣習により、女子に必要なる諸學科の講習を怠るべからず。然らざれば、女子敎育の上に於て、また前日の失敗を、再びするの恐れあらん。世の女子敎育に從事する諸君、以て如何となす。

女子の父母に對する道

岸田松二郎

能く思慮し能く行動して、聊かも不自由を覺えざる我が身は、是父母の親切懇到なる鞠育の賜なり。蓋嬰兒の蠢爾として襁褓の裏にあるや、飢寒其の身に迫ると雖、自ら之を防ぐ能はず。苦痛其の身を苦しむると雖、亦、自ら之を救ふ能はず。心意の欲する處ありと雖、亦、之を訴ふるの術を知らず。然るに、父母は、其の身の艱難痛苦を忘れて、子のために心思を勞し、其の身體を苦しめて以て、其の子の生長を計る。兒子の啼泣するあれば即ち其の容色擧動を察し、飢うるの狀を視れば則ち之に乳汁を與へ、凍ゆるの色あれば則ち之を懷にし、疾むことの容あれば則ち醫を迎へて之を診せしめ、常に禍害の

兒子に及ばんことを恐れて、寤寐瞬時も決して其の念頭に離るゝことなし。特に其の疾病の時に當りては、己の寢食を忘れ、又己の命と財產とを忘れて其の安全を祈り、快復を希ふの情は、父母自身の容色を變ぜしむるを見ても知らるべし。又嬰兒の無邪氣にして、其の愛憐なる笑色を視ば、如何に苦痛の間にありと雖、父母の心情を慰むるもの、他に之に優るものあらず。斯く輭弱なる小兒の運命を保護し、又其の一顰一笑を以て己の喜憂となし、敢て嫌色なきものは、是父母の子に對する至情なり。其の少しく成長して、言語動作の稍自由なるや、己の顏前にあらざる時は、或は水火の難あらんか、或は危險に身を投ぜざるや等を以て憂となし。又其の兒子の求むる所あれば、己は身に襤褸を纒ひ、口に糲餐を甞むると雖、只兒子を滿足せしめ、其の愉色を見るを以て無上の快樂となすは、是父母の至恩なり。猶成長して既に學ぶべきの時機に達すれば、其の兒子の身體上に心を勞するのみならず、其の學業の上達せんことを希ひ、朋友伴侶の品評を撿し、又世間に對する道を敎へ、其の既に人と成るや、男子には將來過活の道を與へて之に財產及家名を相續せしめ、女子には將來の幸福を慮りて婚嫁を求め、茲に始めて父母の第一期の務を全うするなり。其の既に女子を嫁せしむるや、父母は決して之を以て滿足せず、猶進んで、其の女子の夫に對し、舅姑に對して能く婦たるの道を全うするや否や、又

其の懷胎するを聞くや、只管其の分娩の安からんことを祈り、其の相見ざること久しければ、愈久しきを加ふるに隨ひて其の心を惱ましめ、一たび相逢ふか、或は其の音信を得るや、父母の愉快之に過ぐるものなし。殊に母の念頭に存するものを最然りとなす。故に其の女子の幸福繁昌を聞くや、父母は直ちに已の受くる幸福の如く喜び、又其の女子の不幸薄命を聞くや、是亦已の身に於けるが如く悲しみ、甚しきに至りては、身を以て之に代らんことを願ふに至るもの往々之あり。故に不幸にして其の女子の夭折を聞き、之が爲に其の生命を短からしむるもの、世間往々に見る所なり。就中老衰に及びては、元氣既に衰耗して身體意の如くならざるを以て、喜怒哀樂の感覺殊に強く、其の發する毎に涙を揮ふこと、蓋老人の常とする所なり。

夫、壯年鬼神を挫ぐの頃より、鬢髮既に霜を戴き、死期の既に迫るをも忘れて、瞬時も其の子の安寧福祉を希ふの切實なる、終に其の身を忘るゝに至るもの、豈他人に之を望むべけんや。父母の斯く多年間、渝らず怠らず其の心身を勞して敢て辭せざるものは、已の利益を計るが爲に爾するにあらざるなり。又已の安寧を欲するが爲にもあらざるなり。假令已の安寧のためにし、或は已の利益のためにするもの、往々之なきにあらずと雖、是其の眞實の心にあらざるなり。其の眞正の心は、唯純然たる愛情の充滿せるよりする所

の天賦の行爲にして、威武も屈する能はず、富貴も移す能はざるものなり。若夫利益の爲なりとせむ、寧牛羊鷄豚を畜ふの愈れりとするに若かざるなり。然るに豚犬の兒子と雖、猶益、之を鍾愛して以て其の魯鈍たるを知らざるものは、寔に其の心の此にあらずして彼にあるを知るべきなり。若人ありて曰く、汝の兒子を殺して其の肉を與へむ、汝の幸福限なかるべしと云はんに、其の父母たるもの、其の子を以て已が幸福の犧牲に供せんことは、父母の惻心豈之を忍ぶを得んや。寧、已の身を殺して、以て其の子の幸福の犧牲に供せんことを希ふは、世間普通の常狀なり。然れども、人文未だ開けず、蒙昧蠻夷の風俗にありては、親子の至情淡然として、却て禽獸に其の歩を讓ること迥に數等なるものなきにあらず。彼の亞弗利加土人が其の子を江河に投じて幸福の犧牲に供し、又其の子を車轍に轢死せしめて以て冥福を祈るが如きは、豈常人の聞くを欲する所ならんや、蓋人文の開くるに從ひ、愈禽獸の行爲を脫して天然の性情を全うするは、古今東西に通じて誤まらざるなり。然れども、父母の子に對する至情の切なるは天理自然に合するものにして、人の付託已の福利を以ての故にあらざるなり。父母の子に對する自然の情此の如くにして、又其の天職を盡すに務むること斯の如し、焉ぞ之に報ゆる所なからんや。他人の我に盡すに赤誠を以てせむ、豈之に報ゆる所なからんや。矧や親子の至情に

於てをや。家畜も猶且其の主の恩遇を知りて之に報ゆることを知る、況や親子の至恩に於てをや。然らば人の子たるもの其の親の恩に報ゆるに、何れの日か之に報いん。韓史外傳に曰く、樹靜まらんとすれども風止まず、子養はんとすれども親俟たずと。蓋人は父母の存在する間に於て、己が心を盡して遺憾なき迄に至るものは、千百人中一人あるなかるべし。世人多くは其の身の榮達して、父母の存養を全うし得るに至れば、父母既に天外に在りとの歎を發するもの、多く聞く所なり。人は生涯の中、父母に報ゆるの時を得ること甚だ難くして、又其の定れる時あることなし。只其の父母の恩に酬いんことも、瞬時も其の念頭を離るゝなくんば、時々刻々皆其の時なり。故に人は男女の別なく、父母の恩を體して之に報いんことを思はざるべからず、殊に女子に在ては最も心を致さざるべからず。

（以下次號）

女子の言語と其の責任

白松園主人

言語の重んずべきは、いふまでもなき事ながら、特に我國語の研究は、人種の由來を證明し、國體の尊嚴を發揮するに、離る可からざる、重大の關係ありて、外國々には、かけても見るべからず、あるべからざるふしの多かるは、げに亂れたる千歳の下にも、靈

おはふ神の守り給へるにやと、れむかしき限りなるを、いや開け行く今の御代にも、なほ斯學の世にうとまれて、(大に發達せりと、世人は思ふらめど、他の學科に比すれば、寧ろうさまろさいふの、適當なるを、おぼゆるなり、)夏のすびつ、いとすさまじく、なむありける。あはれ、彼の政事法律の學に、いたづく徒が、腐敗せる主義志操のあさましさ、吾人が見る處にては、古來嘗つてなきまでの、汚濁なる暗潮、社會の下層に滿ち〳〵て、今や漸く、上層にはのめきぬるに至りたるも、畢竟先入主たる者の、我歷史に非ずして、彼れにあれむなりけり。既にかく歷史に疎きもの、言語にれいて何かあらん。言語は實に、歷史研究の大要素なる者を、みだりに〳〵て、少しも顧みる處なく、動もすれむ皇國語の系統を脫して、鴃舌人種に化せんとするは、杞憂も亦甚しきにあらずや。而してこの杞憂は、獨り男子に止まらず、近來漸く、女子部內にも胚胎せんとするを見る。豈苦々しといはんよりも、寧ろ恐るべきの事にあらずや。かゝる者はすべて、彼の輕跳者流の、毫も見識なきものゝみなれむ、さむかり、顧慮するには及ぶまじと、いふ人もあらめむ、等しくこれ大和民族なるものを、全胞のつとめとして、拯はでやは、悟さでやは。況んや相率ゐて、害毒を流すに於いてをや。既にいへる如く、世に先入主といふ者ほむ、恐ろしき者はなけれむ、宜しく之れに着眼して內外の辨を誤まらざるやう、ものすべき事になん。大方國家的觀念てふものゝ、起るは、また

く、幼童の教育に基くに疑ひなけれど、此の大任を擧げて、家庭の教育に當る女子の責に歸せざるを得ず。

元來、我國女子の言語は、優美にして圭角なきを尊ぶ。そは彼の男文字と、女文字とを、區別したるが如く、中古の物語文を讀み見よ、いかに生硬なる漢語を慊ひたるか。顯證をケサウ、裝束をサウゾク、欝しをウンジ、修理助をスリノスケ、式部丞をシキブノザウ、など其他多くの漢語を、悉く音便によみて、つとめてなよやかに、物したるにても知るべし。清少納言が枕草紙に、

文ことを、なめき人こそ、いとゞにくけれ。……さるまじき人のもとに、あまり、かしこまりたるも、げにわろきことぞ。されど、わが得たらんは、ことわり、人のもとなるさへ、にくゝこそあれ。大かた、さしむかひても、なめきは、などかくいふらんと、かたはらいたし。まして、よき人などを、さ申ものは、さるは、をこにて、いとにくし。をとこ、しうなど、わろくいふ、いとわろし。我がつかふものなど、おはする、の給ふなど、いひたる、いとにくし。……

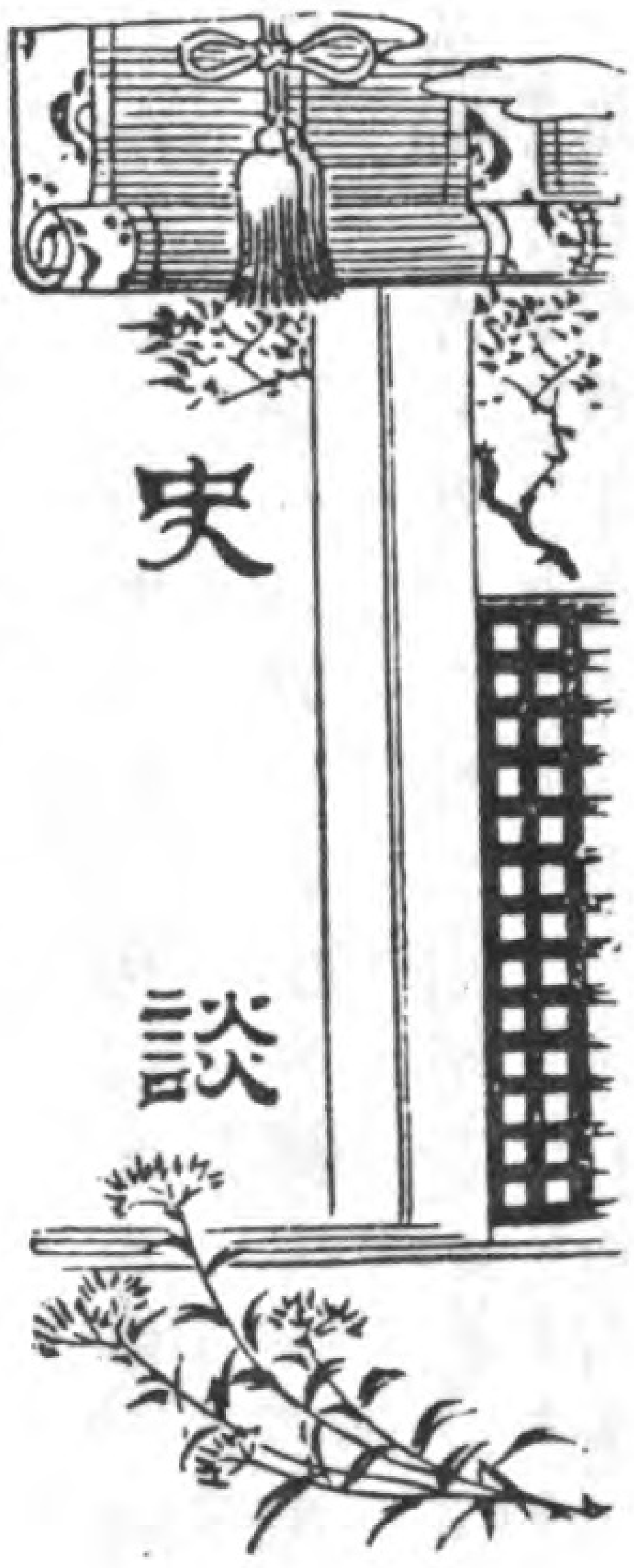
文字の上にてだに、圭角あるを忌むなるに、況して言語にあらはれては、美はしく、やさしきを要するは、論なき事にして、其の美はしくやさしきとは、漢語にあらず、洋語

にあらず、所謂我國語の粋をいふなり。上世は言文一致なりしも、世漸く降りて、言文二途に分れ、口のいふ處と、手の書く處と、相矛盾するに至りぬ。されど猶、語源いたく亂れずして、優なる言語多かりしが、矛盾いと久しきに及びて、雅言は日に失せて、今や俚言のみ繁くなれるは、うれたき事なれども、猶地方によりては、雅言の存する者少からず。今日の東京語は、多くは、諸國の調和的言語より、成れるにて、江戸訛は少きが如し。皇都の事とて、さすがに、をかしく、みやびかなる言なきにあらねども、撥音促音甚だ多くして、我言語の系統より云へど、卑しき方をれはしとす。余の初めて東京に來りし時、先づ異様の思ひをなしゝは、女子がすべて、「デス」といふ尾辭を、用ゐるなりき。こは余が郷里、山口地方にて、「左様デゴザリマス」といふ、ゴザリマの四字を、省きたるにて、聞き慣れぬ耳には、いと〳〵横着に聞ゆるなり。されども境隔たれど、すべてかく、俚言の異なる末世にては、そを咎めんやうもなけれど、茲に普く女子たちに警告して、注意を望む言語あり。

抑〻我國體上、君臣尊卑の言語、畫然として、上古より區別ある事にして、若し此區別を破らんか、到底、我が國人の交際場裡に、立つべからざるは、從來の歴史に徴して、多言を要せざるべし。これ我が國體の、殊絶なるを表する次第にて、世に敬語はど、重き

はなきなり。特に女子の如きは、尤も敬語を謹み重んずべきにて、苟くも之れを過また
んか、女子としての、面目を保つことは能はざるは、我が國体上明かなる事なるに、近來
吾人は、此の敬語法の、頗る紊れたるをればゆるは、實に慨くべきことならずや。
もと敬語は、重長なるをもて、最敬語とし、稍や畧短するをもて、通敬語とす。長きを
うるさしとして、短きを好むは、雅言を遠かりて、俚言に近づくものなれど、平坦を去
つて、荊棘に投ずると、何ぞ撰むん。されど彼の東京語の、デスなどは、決して感ずべ
き語とは、云ひがたし。猶東京語にては、先生長者に對しても、「先生が今サウ云タデハ
アリマセヌカ」「アナタガ今シヤマシタ」などの語は、屢々聞く處にして、實に玉冠を戴き
て、草鞋を穿てるに等しき語といふべし。されど東京語にも、優なる語なしとせず、即
ち「サウデゴザイマスハ」「サウデゴザイマスヨ」などハヨの歎辭を附けたるは、頗る雅
致ありて、地方にも稀れなる言なりとす。敬稱名詞は更にも云はず、敬稱尾辭など一般
の敬語につきて、古人がいかばかり心を用ゐたるかは、吾人が物語文をよみて、常に見
る處なり。「主上は成られればします」この成られといふは、室町時代前後の言なれど、さ
すがに優なる言なり。又上の權力に屬するといふ心より、「聞ゐおぐ」「召しおぐ」上より
拜領する言の、賜ふといふを、自身に受くる意にて、「たまふる」と、下二段に活かし、「れ

もひたまふる」「見たまふる」など云へる、用意の程、思ひやらる。彼の東京語なる、「ゴザイマス」は「ゴザリマス」の轉ぜるにて、よくもなき言なるを、近頃地方に傳播して、殆んど普通語と、ならんずる勢あり、「ゴザル」はもと、「ゴザアル」にて、足利時代の訛言なるを、復た訛るにおいては、彌よわろし。今や中流以上の人、各地に赴任などして、地方語を攪亂すなれど、勢如何ともする能はず。そはともあれ、おのれが今云はんとするは、女子の言語にして、特に敬語は、尤も女子の品位に、關する事なれど、敬稱と賤稱との區別を、よく識別して、日本婦人が、言語上に於ける、最重の位置を、百世に維持煥發せられんことを、希望に堪へざるなり。



飯尾傳右衛門が妾

鹽井ふく子

士や介、昔武士は偏にいさぎよきを貴びて、果敢なきたはぶれ口論より、むなしく散るを、犬櫻いたづらに大和心としてをしまぬが多かり。されど、道灌山中に、爭ひの杉とて、むかし武士二人伴れ立ちて、山中を通りけるが、遙かに一本の樹さして、一人は杉と云ひ、一人は松と云ひ、互に爭ひ、はては、負けたる方何れにても切らむ、切らるべしと約束して、近より見しに、其の樹杉なりけれど、杉ぞと云ひし人、用捨もなく松な

りと云ひし人を切りはたしたり。はかなき言の葉より、親しき友を切り、かへらぬ影を見て、大に悔い、遂に己れ腹を屠り、其場に仆れ、同じ刄の銹と消ゑたりとぞ。其の杉今に殘りて、其下には小さき祠さへに立てり。あまりに介に過ぎ怪たる行ひ少なからず、殊に圍碁將棋等にては命を棄つるためしいと多く、三馬が百馬鹿の中にものしたるも、うがち得てをかし。

むかし、松平相模守光仲の士に坂田源右衛門、飯尾傳右衛門と云ふ者ありて、伯耆國倉吉にさし置かれたり。總て倉吉、米子、兩所には因州鳥取の士を分け遣はし置かるゝことと僅かむかりの人數在番する事なれど、何れも內外懇を通じける中に、飯尾、坂田は年頃も同じほどにて、心もあひければ、取別けてむつまじく、同胞の如くなりけり。

ある年京都より路風と云ふ俳諧師倉吉に來りけるに、折節、是を弄ぶ風流男ども打ち寄り、今日は誰の所、明日は誰が所と會合して、宗匠を饗應し、連歌俳諧の會をぞ催しける。荒尾文右衛門なる者の宅へ、或夜宗匠を招き宵より俳諧を催し、かつ其道を好まぬ者は碁を圍みて何れも慰み興じたり、其夜飯尾も來れり、坂田もまじれり、日來よきどち、殊に碁も相碁にて、いつも勝負を論じ、石上りにするを以て、碁賭としてうちけり。下手碁の習ひ、飯尾勝つ時は、坂田に三四五目、石置かせ悅ぶことあれど、坂田打ち返して數石をれかする時もあり。其夜も例の相碁なれど、勝負を迫合ひ、人ませもせず、二人碁盤を一つ受取て打ち居たるが、飯尾其夜は得方にや迎ひけむ、勝ち込みて、坂田三石までれきたり。飯尾はよろこび顏にあらはるれど、坂田は不興眞面目になりて、之を取りかへさむとす。飯尾は興がり、やは、何れも御覽候へ、坂田はやうやく三つ子になられたり、面體は子供とも見ゑず長者ぞや。あれ見られよ、三つ子の機嫌が損ずるは、顏をおかめて物も云はず、怒る類、我は興を催すぞや、やがて三つ子が四方に釣手をつけ、蚊屋つりもせず居給ふぞ、御

目に懸んといつもの戯ぶれ、笑ひ呼はれど、坂田はます〳〵不興げ、更に莞爾ともせず、眞面目にまた打ちけるが、怒る兵は負く、せくゆゑにや、又其碁も負けたり。飯尾は、益〻興がり、はては立ちあがり、嬉しや、鳴は瀧水、三つ子は四つ子に成長して、四方に蚊屋をつられたりと扇子を開らきて舞ひ踊りたり。互ひ腹立て、腹立たする常にたゑざる二人の中、一座興がりて、笑ひどよみ居たりしに、坂田は大に怒り、つと飛びしさり、脇指をつ取り腰に指し、押し立て丶、是れ飯尾、如何に座興にもせよ戯むれにも事こそあれ。常の寄り合の如き朋輩どかりは、何と云はんも苦しからず、此の座にはたまさかに、路風と云ふ都人の來り居らる丶中にて、我負けて赤面する空虚顔を、如何面白かれどとて、扇を以て舞ひ囃すはあまりなる仕方ぞかし、如何に都人の心中に、片田舎の者と云ひながら、士共の寄合に不似合、不法至極と思はれんと、我は耻ぢ入りたり、嗜みめされよと荒々敷言葉に、一座驚き、興を覺ましける。飯尾もまけじ心、眉をひそめ、これ坂田、怒りのあまりに申されむなれども、戯むれの言を事がましく云ふものかな。圍碁、雙六、相手をせかするたはぶれは、都も鄙も隔てやある。何ぞ路風のをかしからん、さやうに戯れを信にして、怒り立つ、赤面の體をこそ狂人とも思はれ、都にも鄙にも稀なる馬鹿者かなと笑はれめとの返答に、坂田はいよ〳〵怒り立ち、はや堪忍はなり難しと刀を拔きすでに打ち果さんとしけれど、座中大に驚き、中に隔たり間に入り、如何なる事ぞ、他處人も居る座と云ひ、元よりたはぶれのことより、云ひ上り、さりとも大人げなしと、人々取鎭めしに、坂田何思ひ返しけむ俄かに怒りの色を變じて、言葉柔らかに、誠に大人げなき忿怒、常ならぬ席にて、いと心なき事をなし、人々の興をさまさせし皆我誤りより發で候事、れゆるしあれ、飯尾どのも靜り給はれと言葉柔らかに云ひけれど、飯尾も元より、我が云ひ分はあるべきやうもなしとて、そのま丶靜まれ

で、一座も思ひしより安く取鎮めて、大悦び、持ち出る酒肴に舌をならし、腹をうち、兩人とも常より美はしう、各、歸宅せり。荒尾をはじめ、人々兩人が、打ちとけし樣子は見屆けたれど、歸宅の道覺束なし迚、跡を慕ひけれども、飯尾も坂田も心よく暇乞して立ち別れ事もなく歸宅したりしに人々安堵して各其宅へと歸りぬ。

此の飯尾は父が家督を得て、未だ妻も子もなく母一人ある身なり。内所をば母に住まはせて、己は奥の居間に居れるが。歸りても母とは心よく語り、母をして臥床に入れ、己居間へ入り、さて今宵のこと思ひ案ずるに、今夕坂田の怒り常ならず、一座の者に取しづめられ、早速怒りを押へて其儘平常の體にもてなしたる志の程を推し量るに、かれ、決定、以後打ち果さんとおもひ、態と心をしづめ、一座を靜めたると覺ゆる。彼の男、思ひ詰めては、ひるがへさぬ者なり。今夜明るを待たずして來るべし。先きんずれば人を制すと、ひとり心に用意して待ちもうけたる折り戸、小夜深く叩く音す。さはこそ來れと思ひつゝ、刀を取て出でゝ書院の庭に下り、路次の口を開き、誰ぞと密かに尋ぬれば、我なるぞと坂田の聲に答へけるに、我儘を申す將軍樣の御來臨か我もさあるべしといねずして待ちたりとて、門を明けて打ち通し、互に椽に腰をかけ、坂田申すやう、此の夕べの大恥辱實に心骨に轍したり。其の場に打果すべきを暫時堪へ忍びたるは、大勢の中、如何に働くとも本望を遂げざるべしと思ひ、わざと顏色をときて歸りたれど、解けぬは心、如何に、飯尾氏、常の朋輩計りの中にもあれ、あゝやうに惡口に及びては、其儘には打捨べき事にあらず、況んや都人もさ思はるべし。打ちはたし恥を雪ぐより外はあらじ、如何思はるゝと云ふに、げに御身が言葉至極せり、我も御身必ず堪忍すまじき事を思ひて、かく待ち居たり、此の上は相手になるべくさはあれ、坂田氏此の期に臨んで俄かなる無心をかしく思はれむが、所望申したきこ

とあり、聞て給はれ、貴殿には昔より金蘭の好みある故、折り入りて申すは、我命を一年相まつて給はれ、それは如何にとなれば君も知らるゝ如く、我父の遺跡をつぎて、未能何の奉公をもせず、此處に在番し、其身はじめ家内を養育しながら、君恩をもかへさで數年をすぐせしに、來春は初江戸在番仰せ付られ、身の喜び是に過ぎず、さるに茲に、今君と我の遺恨をもてうち果てなば、數年の大恩空しく、いつの時か君に報いん、不忠の罪を思へば思へば、今更に身の愼みなきより出でたる禍ひ身骨に徹して悔ゆるなり。武士が採る梓弓ひかぬ心はさる事にて、我も遅れんとは思はねど、貴殿が了簡もてたゞ一年の命を借し給へ、武士がひくもくるしきねぎ言も、君にたゞ一年たりとも親しく仕へてむと思ふ本望達せさせ給ふも貴殿が心一つのみ腐れはてし玉の緒を惜しみて時を延ばすにあらず、此の事貴殿が心を得ば、隨分身を守り全うして歸り御本望を遂ぐべきなりと云ふに、坂田篤と聞きて、云はるゝ所又以て至極せり。さらば一年まつべし、隨分御奉公大切に勤められ、申すまでには候はねど此の事ゆめ〳〵人に氣どられるべからず、兩家、以前より猶懇ろに出入すべきと約諾しければ、飯尾もいたく喜び、よべの恨みは恨とし、互に手を握りて語り合ひ、後事を呉々約して、坂田は密に家に歸れば、飯尾門まで送り出でゝ門を鎖して居間へこそ歸り入りぬ、折りふし草も木もいぬるときく丑みつの頃、家僕も家婢もみな熟睡して坂田が語ひし事、夢にも知らざりけり。ひとり、隣室に臥したる飯尾召仕の妾、何にかふと驚きさむれば、深更に人の聲、怪しと、立ち聞けば、常に聞きなれたる坂田の聲、ひそ〳〵の談合、しかとは聞えねど、來年までの命をかせ、かさんとつねにつねに聞きなれぬ言、怪しとひとり不思議を心ばかりに納めぬ。此の妾は、同じ藩老士角野覺兵衞が姪にて、賢女の聞えあるものなり。

（未完）

赤福餅開業祖 濱田智恵子の小傳

岡田杏次郎

貧しきものは人の憐みを惹きやすく、富みたるものは人の望を繋け難し。世に孝女と呼ばれ貞女と稱せらるゝもの、多くは皆貧窮の人なめり。然れども、其の人一旦志を得るに及びては、孝女必しも貞女とならず。貞女必しも慈母とならず。富みて而して人望を失はざるものに至りては愈稀なりとす。よく此の始終を通じて全くせるもの、世にそれ幾何かある。言擧げて云はんも嗚呼がましけれど、吾が母君の如き稍これに庶幾しと謂ふべきか。乞ふ少しく語ることを許させ給へ。

伊勢太廟に參詣せられし諸君は、神路山の麓五十鈴川の滸に、巨然たる一老屋を打搆へて盛に商業を營み、車馬店頭に群集し、男女家中に雜沓せるを見給ひしならむ。是即伊勢名物赤福餅にして、實に吾が家の營業なり。顧客諸君の常言に云ふ、伊勢參宮を爲すも赤福餅を買はざれば家に歸りて參宮したる心地せずと。斯く深く愛顧せらるゝが故に、大祭日節日等には一日五六千人の來客ありて、平時少くとも千人を下らざるなり。常客平均二千人。僻地に在りて斯る多數の顧客を有するは實に稀なりとす。神宮司廳の藏版に成れる神都名勝誌に云ふ、

名物赤福餅 新橋の西詰に餡餅を鬻ぐ家あり
埃嚢抄に餅は福のものなれば祝ひ用うる歟又二人向ひ餅を引きわるを福引と云ふ又大裏には餅の名を福生藥と云ふと見えたり又世俗餡入れたる餅を大福といへり然れば赤き餡つけたる餅故に赤福と稱へたるなるべし店頭人常に充塡せり一箇年間に砂糖を費すこと五萬斤に下らずといふ

一年間に砂糖五萬斤を費しゝは本書編纂の時に於ける消費額なりき。參宮鐵道開通以來當地の繁榮は昔日に倍蓰せり。今日に在りては一年間の消費額砂糖千五百挺。之を二百三十目斤に換算すれば十五萬斤。餅米三千俵小豆二千八百俵に及べるなり

赤福餅につきて右の考證は、前神宮權宮司岡部讓氏の

所說なりと聞けり。往にし明治十二三年の頃、故人堀秀成翁吾が隣家に卜居せられし時、語學的解釋を下して曰はく、

赤福とは誠にめでたき名なり。赤と云ふは赤心を以て奉賽する參宮者の精神に通へる言辭にして、光ある明けきものを云ふなり。福は本來慶事の義なり。大御民が赤き誠心もて己も己もさちわらしめ給へと願出づる心にも通へり。然れど、赤福とは明けく清き心もて人々さち求むる義なり。是やがて伊勢參宮するもの丶意をうがちたる名にして太廟の下にはうつなく動すべからざる名にこそありけれ。

「げにや人足たゆまなく、賑ふかどや赤福に、うつ舌皷れど高く、ふくる丶腹は望月の、思ひにさはる雲もなく、清き心や五十鈴川、流る丶水の末遠く、內外の神の宮まうで、いやとこしへの聲ぞめでたき」とざれ言まじりに壽ぎ給ひき。

天下泰平にして國民皆　皇恩に沐浴し、報本反始の誠を表せんとして、太廟に參詣するもの年々歲々增加せり、吾が家亦その餘澤を被りて商業益々繁盛なり。今や家の隣に架したる橋の名さへ、人呼びて赤福橋と云ひ車夫等が町の名さへも云はで赤福町と云ふ。郵便電信も伊勢赤福と記しなど、國のいづれより來るもまがふ方なく、遠國へ行きても伊勢と云へどまづ名物赤福餅を說き給ふとか。斯くまで愛顧せらる丶故に、吾が赤福餅の名を冒して開業するもの、同市內は云ふに及ばず十餘里を隔てし津市にさへ起るに至れり。

赤福餅の繁昌するは全く太廟賽客の餘澤なりと云へども、赤福餅の斯く聲價を博したるは實に吾が母君の力なり。抑この赤福餅は、吾が祖父の創製にして、今を去ること約五十年前、弘化年間より始まる。然れども、當時人未これを稱せざりき。傳へて吾か父君に及び、これが製方を改良して以て現物をつくるに至りぬ。父君早世の後は、母君獨その遺業を守株して、辛苦艱難終によく今日の繁盛を開き給へり。

母君名は智惠子と云ふ。伊勢國宇治館町字仁儀兵衛氏の第三女なり。天保七年二月五日を以て生る。幼にして父母を喪ひ、兄姉と共に家に在り。年十六出で丶慶光院に仕ふ。

伊勢慶光院は日本三上人の一にして、無本寺禪宗なり。開祖を守悅と云ふ。第三代の院主淸順尼、天文年中諸國を勸進して宇治橋の絶えたりしを架設し、又内宮假殿遷宮を行ひし功により、忝くも慶光院の號を勅賜せらる。是より慶光院の名世に著ると云ふ。此時の院主は第十四代周昌上人にして、上人は勸修寺中納言經則卿の息女なり。母君後に此の時の事を語り聞かせらる丶樣

上人樣御年やう〳〵三十五にて失せさせ給ひき。性質まことに優しき御方にて、下々に憐み深く何事も懇に敎へさせ給ひぬ。一年公事沙汰ありて江戸に參られしが、其を苦に病みて終にはかなく成らせられしなり。上人樣は御容貌すぐれて美しき御方にて、尼君になし奉りしは勿體なく思はれしと云々。

母君の敎育は全く此の時に在りき。年十九、出で丶父君に歸かせ給ひしは嘉永七年二月十日なり。此の時吾が家の有樣は如何ありしか、祖父母の君は如何にましませしぞ、父君母君は如何に暮らさせ給ひしぞ、吾之を言ふを欲せず。欲せざるにはあらず、忍びざるなり。唯當時の吾が家は極めて貧窮にして負債に沈淪せしこと、而して又祖父母の君は目前主義の人にして、少しも豫後の事に注意し給はず。人の物乞ふあれば、已の貧しきをも顧ずして、惜氣なく投げ與へられし事など記臆せられなむ即足れり。讀者諸君よ、今こ丶に一昔話あり。事頗るわが家の現狀に酷似せるものあるを覺ゆ、揭げて以て一粲を博せん。

今はむかし、無何有國に老夫妻ありけり。深山に入りてあら玉をなむ幾個ともなく堀出しつ丶店に並べて賣りたりける。天津御空に輝き給ふ日御神の御光仰がむとて、店先を往來するもの數多人ありき。店

に並べたるあら玉をなむ怪がりて寄りて見るに色黒かりけり。黒玉ジャ〳〵とて買はざりけり。翁辛うじて堀獲たるあら玉も其のかひなかりしかど、嫗と打對ひて泣き居たりぬ。或人之を見ていと本意なきことに思ひ、二人にむかひて言へるやう。此の黒玉は磨けど磨くほど赤く光るものなり。之を磨くにはトクサか椋の葉が用なり。トクサやある。椋の葉やある。と尋ねたれど、トクサも椋の葉も無かりけり。こゝに翁と嫗とはトクサや椋の葉を求めんとて有るもの殘らず賣拂ひつ。やがてトクサと椋の葉とを求め得たれど、二人共に老人なれど磨くに力足らで少しも光らざりけり。それのみならず。もと此の二人はいと心の善きものなりしかど、人の乞ひ求むるまゝに、トクサや椋の葉を惜氣なく與へけるほどに、跡に殘りし物いと乏しくなりて心細く思ひけり。翁と嫗とは己が力の足らざるを悟らで、あら玉の光らざるは全くトクサや椋の葉が少なき爲ぞと心得て、今年二月わが息男のために迎へたる婦の嫁入道具をさへ悉〳〵質物になむ入れたりける。息男も嫁女も今は唯身に着けし物あるのみ。翁嫗は新にトクサと椋の葉とを買求めて、力の限り磨きに磨きたれど、螢火ばかりの影だに見えず。今は翁も嫗もあぐみはてけるが、さりとて己が精魂の苦しさに思ひやられて、此の玉磨けとは云ひ得ざりき。茲に若者夫婦は翁嫗の疲れしさま見るに忍びずて自この玉を乞受けぬ。玉は得つれど磨く物とてなかりけり。翁嫗は隈なく探りもとめて漸う椋の葉四枚ばかり持來りぬ。この椋の葉は目方もて賣買するものなるが、一枚の目方僅に一匁ありしのみ。四枚なれど四匁なりけり。此の僅なる椋の葉をもて數多の黒玉を赤玉に磨き上げんこと誠に難き業ならずや。然れど若者夫婦は力飽くまで强かりけれど、互に心を勵まして、安眠も寢ずに磨きけり。此の時心に賴みつるものは椋の葉よりも己等の力なりき。如何に恐ろしき物なるよ。翁嫗

が力の限り磨きけれど少しも光らざりし黒玉が、若者夫婦の手によりて漸う赤み來りしかど、此處ぞ今一息と勢猛に力の限り磨きに磨きたれど、やがて眞輝ける赤玉とはなりけり。此の地に双なき名物とはなりぬ。往來の人々店先に打集ひ。人山なして吾後れじと爭ひ求めぬ。實にや此の赤玉の光を放ちしも、やがて天津日影のうつりなりけり。

これ何ぞ吾が家の事に酷似するの甚しきや。吾が父君母君が家政讓渡の際に、資本として受繼がれしものは、實に山田ハガキ一匁、札四枚なりしのみ。これ當時唯一の資本なりき。父君母君は此の四匁の山田ハガキによりて、負債に沈淪せる家政を治め、上は祖父母の君に事へ、下は家妹二人を養育せざるべからざる境遇に在りしなり。實に此の境遇に在るもの、夜を以て日に繼ぐとも、猶其の足らざるを歎ずべし。父君母君は如何にして此の境遇を處理せられしか。吾等平生諭されしところによれば、

此の時家業のみにては到底生計の方途立ち行かざるにより、父君は日々他の雇役に從事せられ、或は暦製造の職工に雇はれ、或は宮中の賽物見張番を勤められ、或は御師の家に出入せられなどして一日も怠らせ給はざりき。母君は又燈下に其の日の賣代を數へて、父君が日々給與せらるゝ雇役錢に合算して、まづ明日の米油費を引去り、餘錢もて直に米屋に走り、明日賣品に要すべき原料、即餅米小豆など一二升づつ購ひ來り、其れより直に製造に着手して、母君が餅米炊かれ給ふ間に父君は砂糖煮させ、父君が小豆磨き給ふ間に母君は竹皮折らせなどして、相共に其の夜の中に、明日製品すべきまでの手續を了へさせ給ふ例なりしが、いつも就眠の時刻は翌午前に入れりとぞ。扨又朝戸開けさせ給ふ頃は、未近隣の眠れる中にて、明星の影消え失せぬ比なりきと云ふ。父君は外勤の時刻までに、店の仕廻り庭の掃除より餅搗くことまで皆自なしをへて、やがて出させ給へど、

跡は母君一人にて家事萬般に當らせ給ひきとぞ。祖父母の君は既に老體にましく／＼、家政さへ讓らせ給ひしかど、僅に晝間の事業を補助せらるゝのみ。家妹二人は十歳未滿にて人手こそかゝれ、物の用には足らざりきとぞ。

小車のかうゆき廻りて止ることとしなけれど、糸によるもつれもなくて、此方かなたの負債さへ、次々に運び行きけり。父君母君は之に力を得て心亂さずとり／＼に勉强せられしかど、やがて四五年の内に負債をも一掃してけり。扨も光陰矢の如し。いつしか安政の年も過ぎて、萬延とは云へど僅一と年の坂を越ゆれど文久と改元せられ、茲に三年の月日を送りて元治元年に入りしが、母君はこの年月の間に男女四人の子を擧げさせ給ひき。長男某早く夭しぬ。此の年祖母の君は老の病と枕に伏せられけるが、起居自由ならず。母君は日々懇に藥を奉り、病の口にかなふものなど力めて進められ、忙しき身にてありながら、むさくろしき寢床の始末まで、人手を煩さずして皆自事とらせ給ひき。父君は又家にかへらせ給ふや、家事の仕廻りなど爲しをへて、夜なく／＼祖父母の君の手足など撫で擦られ、嘗て一日だも怠らせ給ふことなかりきとぞ。母君常に此の事を以て吾等を誡め給ひき。父君母君は斯く孝養を盡されしかど、如何せん老後の病なれど、藥石効なく、終に身まからせ給ひけり。

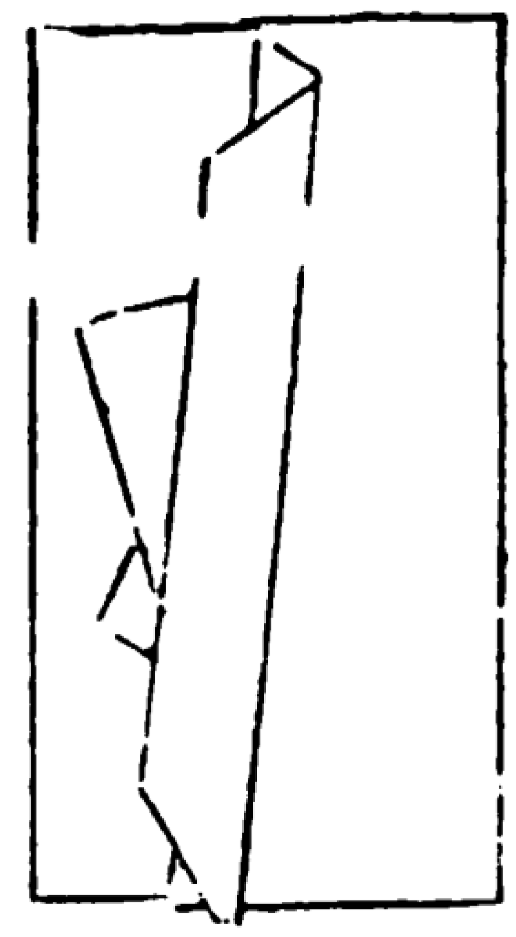
（以下次號）



包の記

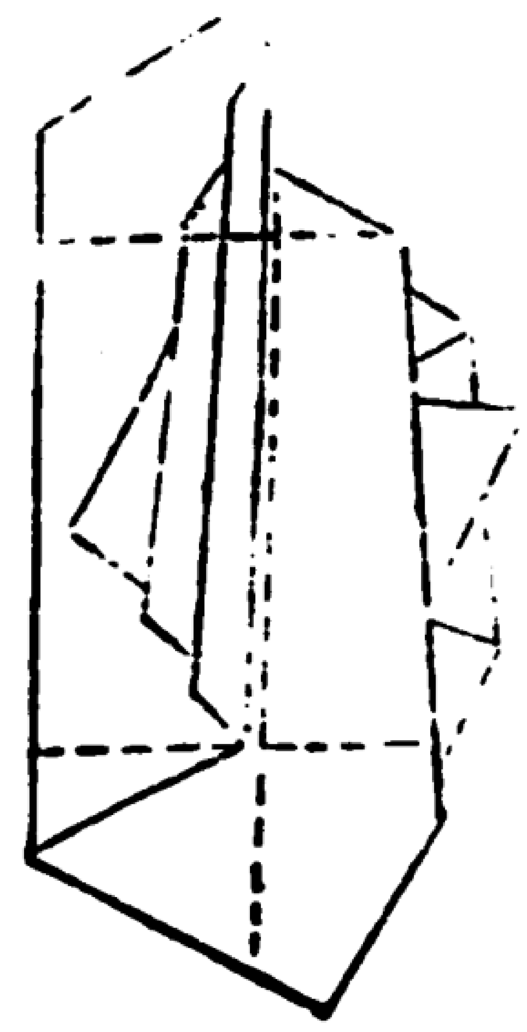
故有住齊先生敎授
門人　なみ子　鍱子　筆記

元結包



表奉書紙、裏紅奉書。(前號に美濃紙とせしは奉書の誤なり)にはひをとること亦常の如し。

同じく解の圖



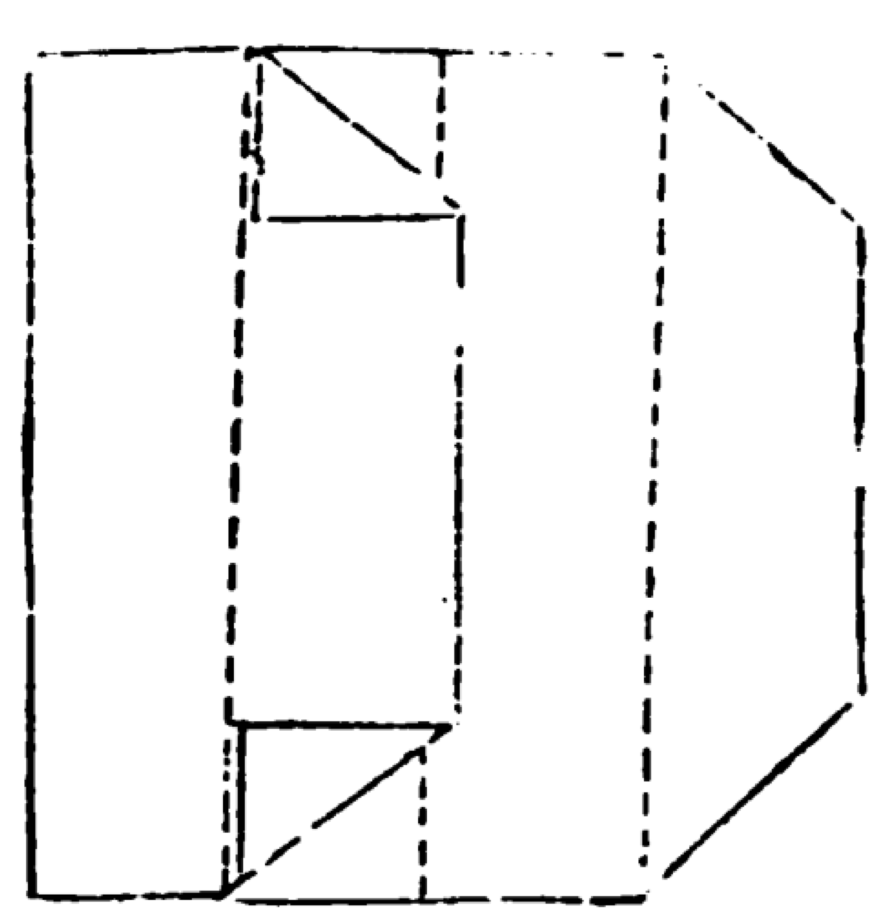
常の如く紙取をして、恰好を見計ひて、解の圖に示せる如くして漸次折り上げ、之を形紙となして折りなすなり。

茶包

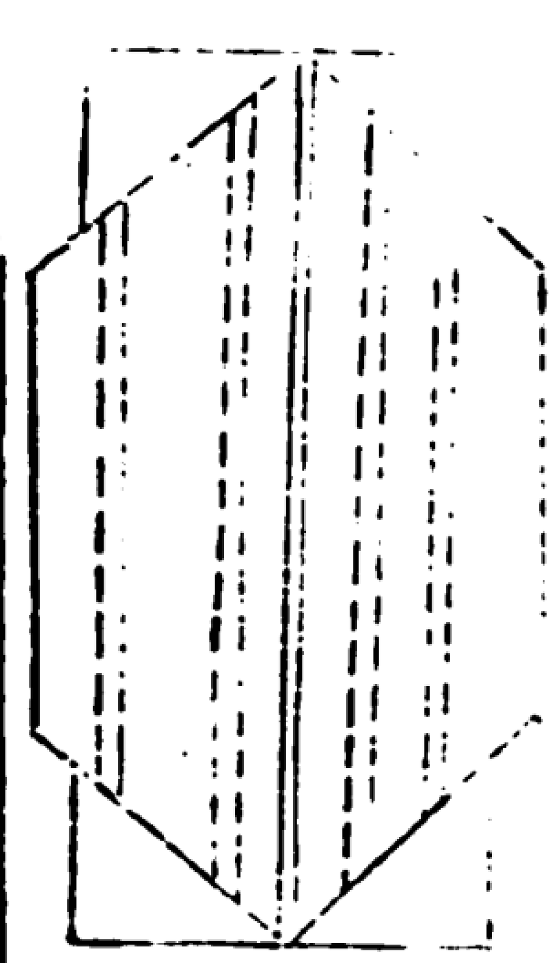


西國にて結納に茶を贈る時用ゐる包方なり。用紙、紙取等皆前に同じ。

同じく解の一



同じく解の二



茶の湯

孤峰庵碌仙齋不美
關　葦雄

茶禮初學(續)

此精神を以て花を生くべし。餘り滿開したる花は

不好奮勝なるを好とす、枝振の繁茂し過たるは如何にも見斗ひ枝葉を能透して生くべし、枝の長短表裏の木振を見斗ひ、元を平等に切て、右の手に持、立て靜に入、輕く手を放すべし、又此切たる本の所を、遠州流にては、切口を紙捻、或は元結にて卷結び、切りて生るを口傳とす。是も木草の振りあしきは至極生よきものなり。又或流儀にては、枝を一本宛拵へて、生花家の如く生る人もあり。是は時間移りて茶の花を生るには如何にや。茶の花は中立の間なれば。手早く無臓左に生るを手際とす。故に茶の花は投入と稱す、枝に力入過れば、枝動搖して心の儘に留らぬものなり、生終りたらば水を差すべし（但し滿容）枝葉の露不足ならば．如露にて能水を掛べし。花盆を持入、爐緣を拭ひ、釜の蓋を切掛け、水指を運び、茶入を置付、後亭主衣服を改めて客の迎ひに出る歟、又は鳴物を打て知らすべし。同等以下ならば、鳴物を以て爲知する打方三種あり。

大小中中大。又大小大小中中大。又は客の數程打歟三種類也。偖客方にては、中立して、腰掛に至らば、重ねある圓座を取用ひて、各腰を掛休憩あるべし。喫烟をするも妨げなし。法話淸談苦しからず。或は大小便にも往くべし。鳴物響たらば腰をはづし。愼で可聽。是則主人迎に出ると同樣故如斯するを故實とす。打終りたらば腰を掛てよし。又直接に主人迎に被出たらば、上客は三歩進み出て禮を受べし。衆客は腰をはづし輕く受てよし。直に客席入するをよしとす、（但し是は、花の露不乾間に可入と利休居士七個條に示されたり）此時上客は衆客に對し、此度は上客を可換抔云て辭讓すべし。二客以下は、無御搆御入可有と云てよし。然らば又御先へと云て手水を遣ひ席入すべし。此時各圓座は後の壁へ立掛置もの也。末客是を取重ねて元の如く置を習とす。煙草盆も其上に載置べし。都て亭主の仕置たる通りになし置くべし。次に席入の順次は、始上客床前へ

往たる時、二客つくゞひ石に畏り、上客風炉の前に往たる、時、二客床前に往、三客蹲石に畏り、次に上客假の座に付たる時、二客風炉の前に往、三客床前に往、斯如して末座は例の如く、入口の戸を音する樣に締切、掛金をかくべし。こゝに客方居並び、席定りたらゞ相圖の咄をなすべし。（但是は花珍花なりとか、色合美麗なりとか、能も生方調ひたりとか云樣なる話をなすべし）主方は此建切音を聞、外に出、席の窓に掛ある簾を外すべし。遠州流にても茶筌湯治の音を聞て、風炉先、窓の簾を卷と云へり。至極最なる事なれ共、人手少き侘人は、自身此事をなす故、卷揚げて後茶を點て妨げなし。尙勝手口にて樣子を伺ひ、席の座定りたると認たらゞ、勝手口を明け茶碗を持出、道具疊の正中に座し、茶碗を左の手にて、僅少前の方を持、左の方壁際より離して假置し、水指の前の茶入を右の手にて右の方に寄せ左手にて茶碗を取、前中央にて、左の方眞中を持、茶入と置合すべし（但し臺目なれゞ、水指は右の方、茶入、茶碗は疊の眞中と心得べし）一旦立て勝手へ入、飜へ蓋置柄杓を仕籠、左手にて持出る（但し左手を十分に延し、提る心持にて、大凡左の膝節の左側の邊迄下る）勝手口を入、振向、飜を下に置、勝手口の大皷張を締る。次に飜を持、立て道具疊に進み、着座の曲を能見て靜に座すべし。

（以下次號）

女禮

新年の床飾

有住常子

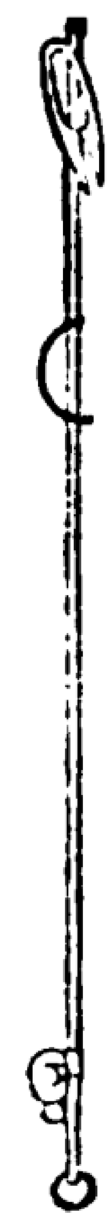
○遠山だいといふものに、かいしきかみ二枚しきて伸鮑をれきて、伊勢海老の鎮子たかれたるを、せたき床にすゑたる、はふきたる樣ながらめでたうなむ。

○丸き臺に、赤き紙と白き紙とをかさねたるに、餅の鏡をれきて、折櫃にくひつみの物つみたる、紙立造花、

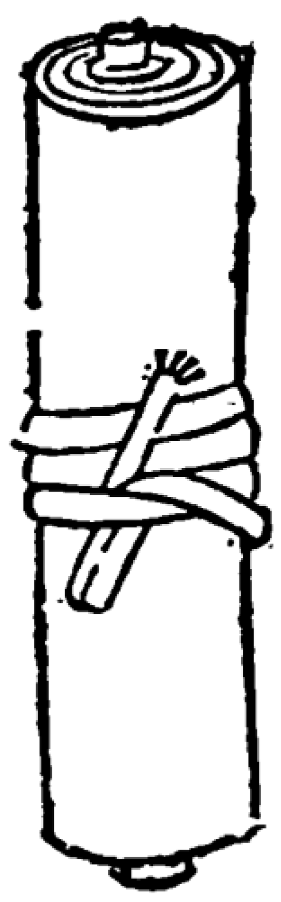
いと古代なりや。
○二重の臺といふものいと大きにつくりて、伸鮑、昆布、勝栗つけて、紙立もれそろしきまで大きに折りたてゝ、若竹を六の角にたてゝ、紅の梅松など頭にいたゞかせ、金銀の水引上のかたよりたらしかけたる、近き世さまのことゝ／＼しきを、大きなる床にそなへたるいとよし。
○外居に色はなやかなる搔敷紙して、梅一枝、伸鮑ちひさく結びて三ッ、五ッ、昆布、かちくりすこしそへたる、きはめてめづらしうこそ。

新撰結物百種

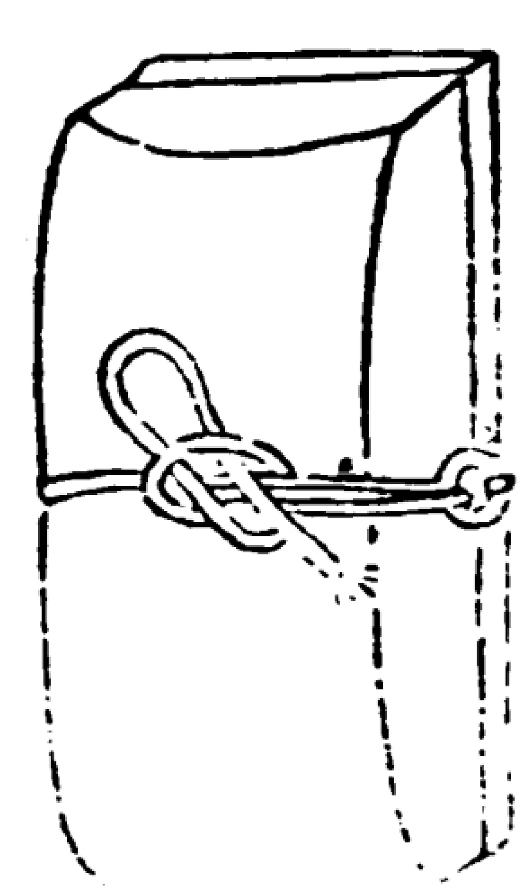
百草庵一無



巻物の緒止め 24



文箱結 25



たちぬひ

西山たい子

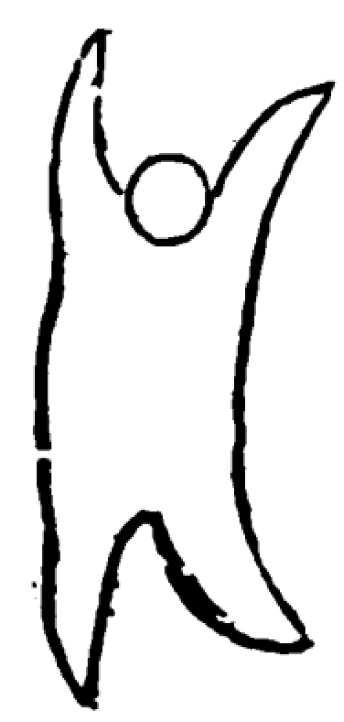


(百二) 猿

れさるは、四角、または少し細長き切四角を裏より三角につまみ、少しづゝ縫ひ、ひきかへし、其のつまみぬひたるところをよく／＼針にて引き出し、綿を入れ、首を外の切にてくゝりれき、其の明きをる處にはさみ入れて絎るべし。さすれど、四角につまみし所手足となり、眞中胴となり、首は手の間より出るやうなりぬ。

但し大小は意のまゝにすべし。

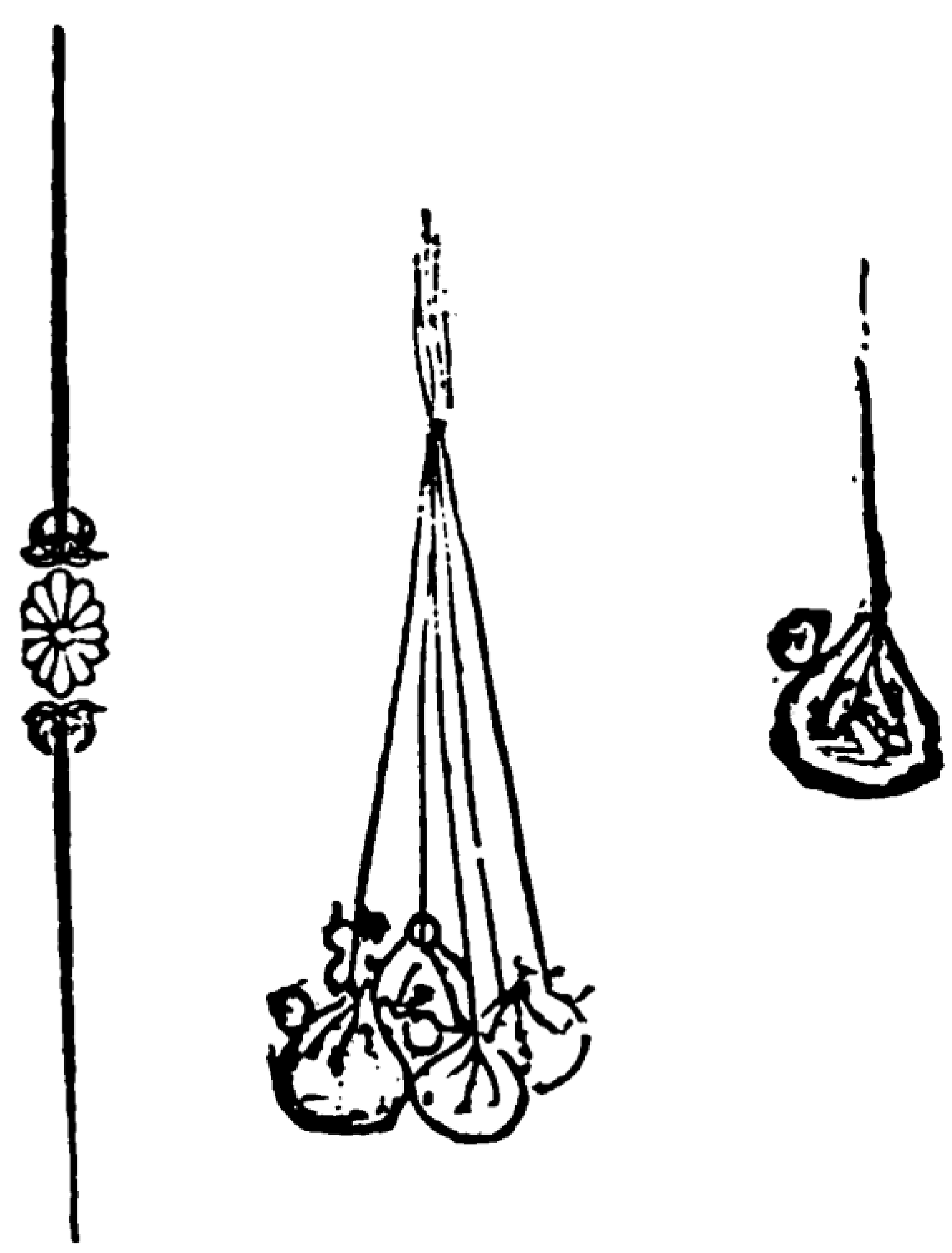
その圖



まめざる

幅四分、長さ一寸ばかりの切の端を細く裏へ折り、巾を二ツに折りて絎け、其の間に糸を通し置き、首を他の切にて縊りたき、その首を、通し置きし糸にてくゝりつけるなり。之もまめ球のごとく、幾個をもよせて背守となす。

その圖



割烹

二汁五菜の料理献立

石井治兵衛

御長熨斗（敷紙）　白木三方

御引盃

御吸物　鯛ひれ

御銚子　燗酒

御小皿　杉蒸かれひ　かくしみそ

御土器　一白木三方

取肴　松葉するめ　結青昆布　白木三方

御銚子　冷酒

御引替

○御本膳

膾
曙名吉
唐草赤貝
しらが大根
木耳せん
栗
生が金かん

御汁
大つみ入
色紙牛蒡
しめぢ茸
四半菜
めうが

御香物
奈良漬瓜
粕漬守り口
千枚しそ
[illegible]山椒

煮物　そぼろうづら　鯛 豆腐　榎 たけ　春きく

御飯

○御二

平皿　合がれひ　算木海老　丸百合根　岡松茸　みつ葉敷みそ

御汁　鯛脊切　竹紙昆布

猪口　か香煮大串子　きんしゆば　浸しにんじん

御向詰　小鯛　かけしほ

御鉢

御煮𣏓

御通

御盃

御銚子

御吸物　包梅に　さき防風

御中皿　魚てんほう〳〵　胥串

御湯

御水

御茶菓子　むら時雨　水栗　河茸

御濃茶

御後菓子　相生糖　二見かう　呉葉さう　がん石　はつ霜　千代香　老まつ

御薄茶

（以上）

だいどころ

四季料理の取合

春の部（續）

煮物

たこの櫻煮、小芋、獨活○鴨に、獨活、いり鳥○ひらめあら煮に、もやし生姜○鰤鱈に、獨活うま煮○まて

貝、くわゐ、つく〴〵し○みる貝、わらび、燒豆腐○鰈の葛煮に、青のり○きんこの煮詰に、わり山椒○白魚に、うど、淺草海苔○とこぶしに、竹の子、わらび○鶉しんじよに、くわゐ、白瀧○鴫鴨に、竹の子、わらび○小鴨に、ちくわ、生椎茸○かきに、よめな、葛掛、すり生姜○たけの子に、じゆんさい、葛かけ、おろし山葵、

和物

筍ゆでゝ、木のめ味噌○松露、きくらげ、ごせう、味噌○きんこに、松露、豆腐味噌、車海老、ふきのとう、胡麻味噌○いかに、うど、きのめ味噌○いかに、きくらげ、唐からし、味噌○鳥かい、わけぎ、からし、酢味噌○赤貝、ゆり根、山せう味噌○くわゐに、もやし茗荷、胡麻味噌○百合根に、うど、きんざん寺味噌○蛤に、あらめ、胡麻味噌○はすに、さやゐん豆、しらあへ○白魚に、わかちさ、酢味噌あへ。

汁

松露に、よめ菜○白魚に、いとふき、めうど○薄たひらぎに、松露、きのめ○つみ入に、根芋くこ○貝のはしら、穂わらび、めうど○小かぶに、つみ入○よめ菜、つくし○燒豆腐、はらゝご○わかめに、うど○小はまぐり、穂わらび○小椎茸、つみ入、豆腐鯛さいの目に、みつ葉きのめ。

卓袱料理獻立の料理法（前號の續）

● 小菜八皿の拵やう

（一）鯛の刺身は、鯛を三脯に卸し、よく洗ひ造り身となす。白髮蘿蔔（白髮大根の拵へ方は、先づ大根を一寸二分位に切り、三方を角に取り、小口より薄く切り、末を捨て又之を極細くせんに切り、丼様の器に水を入れ、此に大根を浸し、取箸にてよくほごし、水をきり絞りあぐれば、大根能くはぜて白髮の如くなる）及び岩茸を取合せて皿に盛り、卸し山葵を側に置き、又合せ酢を猪口に入れ添ゆるなり。尤岩茸は一度湯煮して水に冷し、絞り揚てよろしきに切り遣ふべし。

（二）唐菜○烏賊○胡蘿蔔の三種をいづれもよく洗ひ、湯煮して宜きさに切り、芥子味噌を拵へ𢪸るなり。

(三)車鰕は一度鹽湯でにして皮をむき、宜しきに切り、又河茸を湯煮して水に冷し、絞りわげ、又慈姑の皮をむき、河茸と一つに酒醤油砂糖等をよき梅鹽に調味してよき味に煮付け、鰕と共に皿に盛るなり。

(四)輪切牛蒡青海苔付は、牛蒡を四五分位の厚みに輪切り、湯煮して後ち酒醤油砂糖等にて味をつけ、而して青海苔を火に炙り、盆の上にて揉み細末となし、此に牛蒡を轉がし衣となす。又蒲鉾は板付蒲鉾を厚さ二三分に切り、紀薑、即梅酢に漬けたるを盛合するなり。

(五)隱元豆は充分湯煮してよく煮えたるとき、鹽、砂糖を少し入れ、味を付け、又上等の白砂糖に菓子紅を入れ混和し、豆を器に盛り、上に此紅砂糖を掛るなり。

(六)獨活を洗ひて短冊に切り、又蓮根も薄く輪切として、いづれも砂糖、鹽を散布し、酢に漬け置く○木茸は一度湯煮してよろしきに切る○魚の肉は鯛、其他何魚にても皮、骨、腸類を去り、よく洗ひ、五分角位に切る○新薑は薄く殺ぐか、又はせんに切り、以上の品を體裁よく器に盛り、吹貫蕃椒を少し置合せ、上に生酢を掛るなり。

(七)小鳥は毛を取り、嘴と脛を去り、腹を出し、開きて庖丁の背にてよく敲くなり、而して醤油酒砂糖をよき鹽梅に調合して之を煮かへし、冷してのち鳥を此に少時間漬け、而して鐵網の上にてやくなり、或は又燒鍋にて蒸燒にするを尤よろしとす、又串銀杏は銀杏の皮をむき、沙鍋にて熬りたる後鹽をふり、竹串に五つ位を貫き、小鳥とゝもに器に盛るなり。

(八)奈良漬瓜、新澤庵、味噌漬茄子の三種は何れも宜しきに切り盛合せるなり、但老人には細かに刻み進むるをよろしとす。

●大菜六種の拵やう

(一)方頭魚は腹を出し、三片に卸し、皮付の儘五分角位に切り、鹽を少し散布し○小鳥蒲鉾は、小鳥の毛を取り、腸を出し、嘴と脛とを切り去り、庖刀にてよく敲き、よろしきに丸め○南京いも(里いも)は皮をむき、

丸の儘を宜しきに切り○胡蘿蔔も又よろしきに切り○銀杏は皮をむき○木耳は一度湯煮してよろしきに切り以上の品々を、酒、醤油、砂糖にてよき味に煮付け、大鉢に盛り、又何魚にても魚肉を擂盆にて摺り、又薯蕷の皮を剝き、卸して魚肉に摺り和せ、鰹節の煮汁にて緩め、泥々にして右盛りたる上にかけ、鉢のまゝ蒸籠にて蒸し仕上るなり。而して嫁菜をこま〳〵に切り、上にばらりとかけ、客に進むなり。但嫁菜は一度湯煮して水に冷しおきたるものを云ふなり。

(二)鮟鱇は、肝腸ともに洗ひて骨付の儘よろしきに切り、又よき味噌を摺り、鰹節の煮汁にてのばし、此汁にて煮あげ、椀に盛り、蓋をなし、其蓋の上に蕗の薹一瓣を置き、客に進むなり。但蕗の薹を椀蓋の上に置くは、客若し之れを好まぬ人なきにあらざればなり。

(三)鰕蒲鉾は、伊勢鰕皮を剝き、砂糖、鹽、粒胡椒、雞卵の四種を入れ、庖刀にてよく敲き和せ、よろしきに丸め、湯煮するか、又は蒸籠にて蒸なれば猶よろし○丸剝き蘿蔔は、蘿蔔を洗ひ、皮を剝き、小口より厚さ八分位に切り、面をとり○椎茸は水に浸しおき、ふやけたるを絞りあげ、石付を去り、よろしきに切、以上の三種を鰹節の煮汁等にてよき味ひに煮あげ、丼に飾ふなり。

(四)方頭魚の「ユーワン」燒は先方頭魚の腸を去り、三枚に卸し、巾一寸長二寸位に切り、而して味淋醤油酒抔を調和して一時間程浸し置、之を蒸籠にて蒸なり○押慈茹は皮を剝き、湯煮し煮えたるとき一つ〳〵に布巾に包み、上より押潰す○赤蕪菁菊形の酢漬けは即ち赤蕪菁を菊形に庖刀して酢に漬けおくなり、以上の三種を中鉢に盛り、客に進むるなり。

(五)雞の骨付切りは、先雞の毛を取り、腸を出し、骨付の儘よろしきに切り、○孟宗筍は皮を剝き、三角形に切り○獨活は一寸位に切る○木耳は湯煮してよろしきに切り、偖雞と筍を鍋に入れ、沸湯を程よくいれ、暫らく煮たる後、獨活、木耳の二種を入れ、煮立

ちたるところへ醤油をさし鹽梅よく仕立つべし。而して丼に盛り、上に粒胡椒を糝點すべし。

(六)砂糖湯は鍋によき砂糖を入、又水を入れ、煮たちたるところへ流蘇寒天(細寒天)を水に浸し、一寸位に切り、此に入れ、直に湯ともに丼に盛り、又薑を卸し、布巾に包み、絞り、其つゆを上に滴すなり。

以上調理法は、卓袱料理六大八小の調進仕樣なりといへども、又魚類鳥類野菜菓實に至るまで、其數最も多けれど、季節に隨ひ物の組合せ、或は調味、或は体裁等總て趣向を働かせるは、庖丁人の注意にあるべし。



○

秀歌集(卅八)

鹽井正男

をさまれる御代のはじめに立つ春は
　雲のうへこそのどかなりけれ

○之は入道前太政大臣が、嘉元二年百首歌奉りし時の中の歌とて、續千載集に入れり○をさまれる御代、太平の世の中と云ふ事なり○はじめ。はじめの上に年を加へ見るべし、即ち年のはじめの意なり○雲の上こそ、禁中のことを貴びあがめて雲の上と申せしことゝ、又空のことゝをひきかけ云ひしなり○のどか。ゆつたりとの意なり。

○一首の意は太平のよく治つて居る御代の年のはじめに、立つ春は、大空こそ、又禁中こそとりわけてのどかであるはと君が代をことほぎしめでたき歌なり。

○

のどかなる春の光りに松島や
　をしまの海士の袖やはすらむ

○正治二年、後京極攝政太政大臣が百首歌奉りけ

る歌とて、前と同じ集に入れり○松島や、松島は陸前の國にある名高き島にて、やは呼び出しの言葉にて、松島のと云ふべきを松島やと呼びかけ、松しまや、そこの雄島のと言葉を強くおもしろくせしなり○をじまの海士。をじまは小さき島との意にて、海士は漁人などつねに、船をつかふものゝことなり○袖や乾すらん。袖をや乾かすだらうと想像せしなり。
○一首の意は、此のまーのどかなる君が代の春の光に、松島や、あの小さき島の海士まで、袖を乾かして春の光を仰ひで居るだらうとの意にて、之を君が代とことほぎ意も言葉もめでたき歌なり。

○

かへるさをよしや恨じ春の雁
　さぞふるさとの人もまつらむ

○之も同じ集に大藏卿隆傳が弘安百首歌奉りける時の歌なり○かへるさを、雁がねの歸りゆくをとの意なり○よしや恨じ。歸つて行てしまふがをしく、此のやうにをしく思ひとゞめるをふり捨てゝ歸り行く雁なれど、恨みまいと言葉の外に、をしむ心をもたせたるなり○さぞふるさとの人もまつらん。さぞまーふるさとの人もまつて居ることであらうとの意なり。
○一首の意は、春の雁よ我はお前が歸るをいたく惜しみをしむを、知らぬがはに我をふりすてゝ歸りゆくが、よしや、たとへとめたとて止まるまひから、我はもうお前を恨むまじ、我が惜しむ如く、さぞやふる里人も、お前を慕ひ、まちこがれてをるだろふからとの意にて、をしむ心のしきりなるにつけ、又ふる里人の心を思ひやりたるいとあはれになづかしき歌なり。

○

別れけむこし路の秋の名殘さへ
　思ひしらるゝ春のかりかね

○之は弘長元年内裏に百首歌奉りけるとき、歸

雁を前大納言良教がよませたるにて、同じ集に入れられたり○別れけん。けんは過去の想像詞にて、即ち別れて來たであつたらうとの意なり○こし路の秋の。こし路は雁がねのふるさとを云ひしにて、秋は雁がねは、此方に亘り來れど、その去年の秋のとの意なり。

○一首の意は、かへる雁を惜しむ此の心につけても、別れて來たであらうふる里の去年の秋の名殘さへ思ひ知られ、思ひくまるゝむかりかへすが惜しき春の雁がねぞとの意にて、前の歌と意も同じにて、いとあはれの歌なり。

源氏物語講義（十九）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

桐壺（續）

命婦かしこにまかんで着きて、門ひき入るゝよりけはひ哀なり。やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立てゝ、めやすきほどにて過したまへるを、やみにくれてふし沈み給へるほどに、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月かげばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。南面におろして、母君もとみに得物ものたまはず。今までとまり侍るがいと憂きを、かゝる御使の、蓬生のつゆわけ入りたまふにつけても、耻しうなむとて、げにゑたうまじく泣いたまふ。

さて、話わかれて、命婦はいよ〳〵二條の里亭へ着きたるなり。

○まかんで着きて　まかんではまかりいでなり。尊者の所へ至るを參入るといひ、尊所より退くを罷出づといふ。即こゝは命婦の內裏より二條へ罷り出でたるなり。

○かどひきいるゝよりけはひあはれなり　かどひき

入るるは車を門に引き入るゝなり。車といはずして、ただひきいるゝとのみにて、車に乗りて行きたるやうにきかせたるは巧といふべし。車を門に引入れてあたりを見れど、里亭の住居の樣子があはれであつたといふ意なり。

○やもめずみなれど人ひとりの御かしづきに云々　以下は命婦が、二條里亭の光景を見て、感慨に堪へずして、思ふ所の意なり。やもめとは和名抄に、無レ夫曰レ寡和名夜無女とあり。やもめずみは後家暮といふ程の義なり。御息所の母君北の方は、夫大納言に晩れたれど、やもめずみといへるなり。人ひとりの御かしづきとは御息所をさしいへり。かしづきは御奉公のことなり。御息所は陛下の寵遇限りなかりしが故に、從つてその母北の方も、御息所　御奉公の餘慶に浴して、兎にも角にも作り立てゝ、餘り見苦しからぬほどに世間體をよくして、今までは日頃を過して御座つたのにといふ意なり。

○やみにくれてふし沈みたまへるほどに云々　やみにくれては、子を思ふ心の暗にくれての意なり。後撰集に『人の親の心は暗にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな』といふ歌あり。その意によりて書けるなるべし。ふし沈むは、嘆きのあまり心もかきくれて、前後正體もなく泣き沈むをいふ。ほどにといふ語は、時間の分量を知らせたるなり。夏の頃より御息所の病氣づきて、遂にあへなくなりたまひたるため、其の嘆に沈んでありし間に、自然屋敷の掃除なども、手のとゞかずなりて、庭は一面に草の山をもなしたるなり。

○野わきにいとゞあれたる心地して　さらぬだに庭は一面の草山なるに、とりわけ今宵の野分によりて、その草山は右往左往に吹きなびけられたれど、一層荒廢の度をましたるやうな心地がしてなり。

○月かげばかりぞ八重葎にもさはらずさしいりたる　かやうに荒れ果てたるが故に、所得がほに生ひしげ

れる衛は、八重廿重に隙間もなきまで門のあたりに立ちふさがりたれど、さやかなる今宵の夕月ばかりは、それにも頓着なく、一しはすきとほりてさしこんで居たとなり。やもめずみなれど云々よりこゝまでは、命婦が二條里亭に到り着きて見渡して思ふ意なり。今宵の風景に應じて感慨を催す所、最人の感情を引く所なり。評釋に「上に野分だちてといひ夕月夜といひ出でたる脈をたがへず、次々も皆風と月とを並べあげて、時の景色を書れたる、いと嚴に法あり」といひ、又「さてこゝに闇を以て月に對し、草を以て風の氣色を添へられたる書ざま、殊にめでたし」といはれたるは、讀者にとりてのよき注意といふべし。野分といひ、月といひ、風といひ、露といひ、このあはれなる里亭の情景を叙するには屈竟の材量なり、命婦が　勅を奉じて内裏を出づるより、使命を果して參内するまでは、始終この脈を失はず巧にこれらの景物を點接して、景情兩つながら叙列するさま、鑿々として人を襲ふが如き感あり。この邊は作者も殊に意を用ゐたるものと見ゆ、含味すべし。

○南おもてにおろして　車を南面の客殿におろして、命婦は北の方に御對面を遂ぐるなり。おろしての下に對面すなどの語を含めて見るべし。さらずばおろしてのて文字おちつく所なし。

○はゝぎみもとみにえものも宣はず　はゝぎみものも‖もの字は最力ある字なり。靫負の命婦は、初より悽然たるあたりの光景にうたれて、物もえ言はず、暗涙に咽んで居たるに御息所の母君北の方も、また今更のやうに涙にむせかへられて、俄には詞もいでたまはぬなり。靫負の命婦の物もえいはぬは、その感情深き心に、今御息所の生故郷の二條里亭へ來り、現在其の母に邂逅しては、一は先頃までも親しく其の温容に接したる御息所のことを考へ、一は其の生みの母たる北の方の力とたのむ最愛の息女を失ひたる其のかなしみはいかばかりならむと思ひやりて、一

層同情の涙にむせびれて、物をもえ言はざるなり。北の方は又、吾が女の御息所に親み深き靱負の命婦と思へど、これをまのあたりに迎ふる事の、さながら吾が女に會へるごとき感おこりて、なつかしさとかなしさとの一時に迫りきて、物もえいはざるなり。斯くて双方とも暫時無言にて居たるは、さもあるべき人情をよく穿たれたるものといふべし。

○いままでとまり侍るがいとうきを云々　これより北の方の詞なり。さてあるべきにあらねど、北の方先口を開きて、御勅使に向ひて愚痴をこぼすなり。其の詞は早くこの世を去つたならば、かやうなる哀みもなかりしならむに、先立つべき吾が身が却りて子に先だゝるゝやうな不幸にであつた。親がその子の野邊おくりするなどは、後生の惡い母よ、前生の宿業拙き女よと、世間の人は吾を笑ふであらう。これを思へば實にまゝならぬ世が味氣ないなど意味ある所なるべし。

○かゝる御つかひのよもぎふのつゆわけ入りたまふにつけてもはづかしうなむ　斯やうに世の思はくも苦しいのに、斯様なるおもたゞしき御勅使を辱くして、このむさくるしき伏屋をも御厭ひあそばさで、蓬生の露をさへわけて、御弔慰くださるゝ畏さに付けても、一層世の人目を引く種とならむかと存じますれど、死なむとしても死にえざる生命の程が恥しく存ぜられますとなり。

蓬生の露云々は北の方が吾を卑下して申す詞なり。蓬といふ草は、春三四月頃はまだ萠えいでたるばかりのやはらかき草なれども、夏より七八月の頃にかけては、丈高くのひて、ざわ〳〵と繁りあひたるは、人の半身をも没するばかりになるものなり。よもぎふのふは、おふのおの畧かれたるものにて、生ずるよしなり。即蓬の生じたるをさして蓬生といふなり。あさぢふといふは淺茅の生へたる所、芝生といふは芝の生へたる所をいふ。皆同じことなり。蓬の生じ

たる所は大方荒れたる所なれど、斯くいひて家の荒れ果てたることをいへるなり。蓬生といひたれど、其の詞の縁につれて、露わけ入りとはいへり。

○げにえたうまじく泣いたまふ　たうまじくは堪へまじく、ないたまふは泣きたまふの音便なり。斯く申して北の方は、餘所の見る目にもこらへきれぬも最だと思はるゝ程、よゝとばかりになき沈みたまふたとなり。

以上の大意は、

さて命婦は御勅諚を帯して、彼の二條の里亭へ御着ありて、車を門内に引入るゝや否や、あたりの光景は何となくさびしくあつた。北の方は夫に後れて後家暮であるけれども、御息所御一人の御宮仕の餘慶によりて、兎や角と拵へて、恰好よく餘生を慰めて居られたのに、案外御息所に先立たれたるため、兒を思ふ暗にかきくれて、泣き沈んで居たまへる間に、手入する下部もなければ、邸内は秋の野らとなり、草は山をなしたるに、あひにく今宵の野分のために、一層荒れまさりたるやうなる心地がして、たゞさえたる月かげばかりが、門をとざせる八重葎にもさまたげられずに、隙間を洩れて軒端近くさし入つて居つた。命婦はこの光景を見ながら、南面の客殿に車を下して、北の方に對面せられた。打向へど、命婦も北の方も、共に懷舊の情俄に胸にせまりきて、互に暫時は物もえ言はでありしが、母君やうやう先口を開きて仰せらるゝには、先立つべき親が却りて子におくれて、この年までこの世に生きとまつて居りますのが、甚辛く心苦しくありまするのに、斯樣に畏多き御勅使の、かゝるむさくるしき蓬生の宿の露をわけて、御慰問くださるにつけても、吾が身が耻しく思はれまするど仰せられて、餘所目にいかさま堪へられぬほど泣き沈みたまうたとなり。



主従心得草（後編續）

諏訪　忠元　寄贈

右にて考ふべし。木も土なくては生ぜず。火も土より生ず、金水も土なくては出る事なし。春夏秋冬の四季も土用なき時は春の暖氣來らず、諸木花咲事なし。夏の暑氣も來らず、諸々の苗も生ぜず、秋冬も右にてしるべし。四季の土用なき時は、人間は勿論、都て生を保つ事かたし。一年三百六十日の內、土用七十二日なり、尤四季にあらず、五季也。一季は七十二日宛也。其內八十八日宛土用を加へて九十日となり土用十八日を四ッ合せて七十二日となる。是にて一年は五季となるなり。又御飯を焚にも、金のかまへ水をいれて木をくべて火を焚て御飯は出來るなり。然れ共、土のかまどなければ出來ぬ者なり。土は信也。此信の土なければ何事も成就しがたし。

こじつけの所もあれ共年季株の儘たい
たす是も一理あれば用ゆへし



是信の土用は親指也、親指なくて、箸も筆も針も持れず、是にて信の入用考ふべし。又信の字に付て種々の譯ある事、又金をためるに近道秘事口傳あれ共、長けれど爰にいひ盡しがたし。追てしるす。

別して商家の奉公人は、此信の一字を首にかけて勤めさへすれどわしき事はなき者也。夫奉公とは主人へ身を奉るとかひて奉公とよむ。手前のからだにあらず、主人より預りたるからだ也。信なき時は私の出來る者也、調市飯焚といへ共、信の一字を持て居る時は、あまりわろき事はせぬ者也。奉公人も、私をはなれて主人大事と勤る時は、身にあやうき事もなく、心をくるしむる事もなく、一生安樂也。己れが爲にする奉公は身の

破滅や。主人の爲にする奉公は我身の爲と心得べし。君を思ふは身を思ふといふたとへの通り也。又檀那といふ文字は、主人一人の名にてはなし、主人と家來と合せて檀那といふ。唐土の江甫といふ所に檀といふ木あり、此木の下に萠といふ草あり。此草を取て外へ植ても育たず、忽ち枯るなり。又檀の木も萠の草なき時は是も又忽ち枯る也。右檀萠を一所に植れば、兩方共榮へる故に、主從合せて檀那といふや。主人あつての家來、家來有ての主人也。又家來なくては主人と名付る者なし。

（以下次號）

新瓦（續）

杏汝芳子。先考亦羇旅。若思不レ詳ニ其所ニ自出一也。家乘所レ書。則唯其遺言。先妣記レ之。以語ニ若思一爾。考姓中根氏。名重勝。字子義。號ニ武濱一。三河人也。延寶間。遊于伊津一。因家焉。其郷曰ニ下田一。南至ニ于海一。海濱清幽。島嶼可レ觀。是爲ニ武濱。考樂之。因一以爲レ號焉。正德三年癸巳冬十一月二十九日。以レ疾卒。年六十七。葬ニ于郷北本覺寺旁一。男子五人。所レ存唯二。若思及汝父也。一女名京。適ニ合原勝房一。勝房江都人也。居ニ於相模一。相模之南有ニ浦賀邑一。海關在焉。勝房乃其小吏也。終ニ于浦賀一。先妣姓淺野氏。江都人也。若思既失レ業。不レ能レ事焉。託ニ諸勝房一。元文三年戊午夏四月十八日。卒ニ于浦賀。年七十一。葬ニ于關之東顯正寺一。又其東乃鴨居郵也。汝父名孔昭。字叔德。號ニ鴨居一。生ニ于下田一。家ニ于浦賀一。生ニ一男一。名清吉。移ニ于鴨居一。生ニ二女一。其一乃汝也。汝姊名參。參及清吉。皆蚤夭。汝母姓齊藤氏。鴨居人也。汝外祖妣。姓前田氏。卒ニ于鴨居一。其墓所レ在曰ニ不入斗一。在ニ鴨居西二里一。乃其生處也。汝母及兄葬ニ于　先妣之塋一。汝姊墓在ニ鴨居西德寺一。若思。字敬父。號ニ東里一。下田人也。汝初名珉。及レ至ニ於斯一。吾更レ之曰ニ芳子一。芳之爲レ物可レ愛也。子之言嗣也。所一以レ祝レ汝也。正德辛卯秋。余適ニ京師一。因寓ニ於攝州中山之東一。其鄰有レ寺。曰ニ徧照院一。有ニ僧六人一。相與采ニ菌于野一。多得レ之。亨

而食之。甚美。明日先食者死。背陷而紫。後食者三人。相繼皆死。亦如之。其幼者。年十一。曰露身有嘔。飲其湯。疾幾死。

佐與者。常州水戶城東吉沼邑人。伊平太之妻也。伊平大貧。與妻並耕。後得惡疾。而不能行。治之無效。是以益貧。至賣田以給湯藥。佐與乃爲人挫鍼治縫。以奉養之。如事老親。如保幼兒。久而益篤。伊平太閔其勞苦也。乃謂之曰。余之未死。爾之力也。德莫厚焉。然而余疾不可爲也。而爾尙壯。雖更適人。不亦可乎。爾其圖之。佐與泣曰。不可。若君之疾。終不可諱。吾將終身守其居焉。況忍以勞苦棄君哉。伊平太又欲浴奧州巖城之溫泉以治其疾。而無財以治裝也。佐與借錢於人。得二百文。乃使工作車。工知其志也。爲求美材。以作之牢。而不受其直。於是佐與使伊平太寢於車。而躬自挽之。欲以適巖城。有二子皆幼。佐與懷其一。而携其一則力不足以行車也。請路人助之。又見巨室。陋踵其門。而借役焉。然後能行。乞食於路。路人憐之。助挽其車者衆也。遂得至于巖城。伊平太浴溫泉一月餘。疾愈大半。與乃妻子倶步還吉沼。實享保十九年秋七月也。州法出其境者必告諸官。得報而後行。佐與弗知也。及自巖城反。里長以其犯法告吏。吏素聞其賢也。不忍責之。更具其事。以言于官。官命贖其所賣田。以賜之。且復之終身。

雪婦者。江都漁人之妻也。美而仁。其夫死。人將盬之。懼乃食地黃。以土酥汁髮。暴白如雪然。人畏之。

元文初。江都橘坊倡越。年十五六。美而善歌。富人之子。適其家者。相屬於路。一少年尤愛之。數適焉。後借其費而不敢也。間一年。復適焉。越問之曰。何其濶也。對曰治業焉爾。曰何以復來。曰夢神告余曰。橘園之遊將利於汝。余敢不勉。極歡而去。越笑曰。神過矣。夫遊于斯。何利之有。君子曰。倡而言之。異哉。神信然乎。其將赧然矣。

享保辛亥。余在江都。江都油坊有隱君子。賣卜以食。

自號無我。余愛敬之。問姓名不對。余乃稱之曰司馬子無我笑曰。子則誰也。其買生乎。因相親也。明年壬子暮春之初。余與無我遊於東郊。是日也霖雨新晴。桃李方華。觀者往往宴于樹下。余謂無我曰。不亦樂乎。乃作詩曰。東野之華。谷風其馥。此有飲酒。彼有食肉。既飽既醉。使我心樂。無我笑曰。彼自樂之。我何與焉。余曰。子以無我爲號。何也。曰夫子絶四。其一乃無我也。吾將學焉。曰然則何以笑我詩乎。夫唯無我也。故無非我也。彼亦我也。此亦我也。彼之所無。此則有之。此之所無。彼則有之。無不足也。烏有餘也。富貴貧賤。壽夭禍福。死生榮辱。於是乎齊矣。孝親敬長。恤民愛物。皆自愛也。攻昧取亂。禁暴遏虐。皆自治也。由此觀之。則彼之樂。豈非我之樂哉。無我歎曰。大哉言乎、自非聖人。其誰能之。曰何必聖人。雖吾儕亦可勉也。譬如美玉。其小大輕重不同。而其爲寶則一也。請問其方。曰難言也。固問之。乃曰其謙乎。言謙則順。事謙則審。容謙則恭。色謙則和。言順事審信也。容恭色和禮也。信禮爲始。義以節之。勇以守之。寛以居之。德莫美焉。以此事君。以此事父以此富貴。以此貧賤。以此生。以此死。凡所以者莫非此也。謂之仁焉。謙之終也。謙能成仁。仁又能謙。謙仁相因。如環無端。然則雖有我。亦何能爲。是無我也。故天益之。人好之。鬼神福之。可不勉乎。無我說。更號謙齋。而請記於余。辭。固請。乃記之。此其大略也。(未完)

菓子の話(二)

甘泉野人

世人普通に、菓子といへば、單に甘いものといふ念を抱き、之を製するも亦、唯、甘かれかしとのみ心掛くるは誤れる沙汰です。菓子の味は、今日では餘り單一です、或は甘酸調和したるもの、或は淡泊にして消化し易きを主とし、或は香料を加へて味官の快美を助くる等、其原料を多様に取り、又甘味に於ても、獨砂糖によらず、昔用ゐたる如く、甘葛煎とて、千歳藟の

汁や、飴、又は柿肉より取りたる菓糖などを用ゐなど、大に風味を増すことでありませう、甘蔗糖のみを用ゐ、形狀色彩にのみ走るは近時の流弊で、甘蔗糖の外、前述の如き菓糖や、又乳糖、蜂蜜、澱粉糖などを廣く用ゐる樣にいたさせたいものです。又菓子製造家に取りて注意すべきは。水であります、水質の惡きものを用ゐますれど、隨つて風味を減じ、異臭を帶び、又腐敗し易くして貯藏に堪へざる等の患があります。又菓子製造の用器は、大に省慮すべきもので、昔は木製、又は鐵製のみを用ゐましたが、近來は舶來の銑鐵製を多く用ゐ、其破損し易きを見るや、轉じて銅製を用ゐることゝなり、今では專ら銅器を用ゐます、銅器の鏽毒を含むことは夥しいもので、去明治廿七年中、東京衞生試驗所に於て府下有名の割烹店より、銅、青銅、又は鐵鍋にて調理せる三十五種の魚肉、野菜を取り寄せ、百グラム中に含有せる銅の定量分析を施行いたせし成蹟は、銅、青銅、鐵鍋に係はらず、悉皆銅分を撿出しました、其原因と申しますと、

第一　銅鍋を使用すれど、最著しく銅の反應を呈す。

第二　下等の砂糖を使用すれど、銅を含有す。

第三　鐵鍋中に、銅夾雜すれど、又銅の反應を呈す。

此の如く、どの品からも、銅分の檢出せられたのは、驚くべきでありませんか。銅の人身に害あるは、恐るべきもので、獨菓子のみならず、近來銅製用器の流行するは、危險の談であります。又鐵鍋と雖、安心の出來ないは、前述の通りで、現今の鐵鍋と申すものにも、百中に、純銅〇一、三三分を夾雜せるものを發見した例もあります。故に什具を求めます際、少許の費用を惜ます。良質の鐵器を取られんこと肝要であります。次に砂糖の點につき申し上げます、砂糖の辯護は、前既にいたしましたれど、こゝには翻つて、その改良點をのべます。從來、掛物菓子に用ゐる製造原料は、阿波や讃岐の國產なる三盆白、及その他の砂糖を以て之

を製し、その製法は、大抵粉を入るゝを主とし、生掛は僅に一部分に過ぎないです、生掛といたしますれど、味は過濃で、價が不廉なりますけれども、世の進歩につれ、生活の度が高くなりまして、輸入砂糖の透明なると、その味の輕淡なるより、今日都會の地にては、十中の八九まで生掛を製する樣になりました。抑この生掛の製法と申しますものは、濃淡その度に適せず、歯牙を痛め、胃腸を害しますから、注意せねばならぬ次第でござります。そこで、品評家の申しまするには、原料の砂糖を精撰するは勿論、粉、豆等、配合を愼み、濃淡宜しきを得るを要し、生地物は可成菓物を應用し、柿肉、梅肉、柚、胡麻、山椒、胡椒、麻の實、桂子、罌粟等、又は胡桃、落花生等の如き油分あるものを用ゐ。又生地物には、成るべく香料を施し、生姜、薄何、紫蘇、肉桂、山葵、檸檬油の類を可とし。種生地物は、成るべく色着せざるものを用ゐ、殊に燒色種を用ゐるべし。葛粉、山紫姑粉、小豆粉、薯蕷粉等、成るべく滋養分あるものを可とし。落雁粉、種粉、浮粉、豆粉等之に亞ぐ、色彩は、無害の染料を用ゐるべきは勿論、青料には、挽茶、青海苔の類をよろしとす。かやうに申して居ります。

その他、乾菓子、中乾、蒸菓子等、皆それ〴〵改良すべき點がござりますれど、製造家にも非ぬ讀者達には、興うすかるべけれど、これより轉じて、近來新製の餅菓子、及細工菓子のことを御話し申しまして、菓子の話の局を結びませう。

我邦宴會用の餅菓子は、未西洋の如く盛にならねども、近來京都に於いて大に之が流行を來しまして、花卉禽獸など、種々の形狀に似せ、その技倆も亦賞すべきものがござります。西洋にては、重に高塔式を取りますが、西京人は日本的の意匠を加へて、花鳥を作ります。又西洋にては、宴席の中央に、テイブルの上に拵へますから、八面睨みに出來てをります。日本では、床の間に置くより外仕方もありませんから、片面より見る

やうにして宜しとの説もありますが、日本には、結構なる挿花といふものがありまする故、餅菓子を床の間に拵へるも如何と思はれます。この點は、當業者も、亦家政のことに意を用ゐ、美術などに關係ある人も、研究すべきものでありませう。（完）

手鞠歌

赤松景福

餘所は素より咸く知らざれど、れのが國などにては、女兒の手鞠歌の類は、大抵その詞理もなく、妄誕なるものにて、云ふに足らねども、こゝに一篇いと愛べきものあれど、爲にこれが評釋を加へて、新年の試筆がてらものして、世の閨秀等の一讀に供へむとす、

（第一節）「西の西のその西の　三げんならんだ中の家」
（第二節）「その婦は善い婦ぢや」　（第三節）朝はとうかられひなりて
裏へ廻つて手水使うて　二階へ上つて化粧して
（第四節）
窓のあかりで紅さして」　いと様坊様れひなれよ
れ茶がぽん〳〵湧溢る　わきまける」

右の歌は己が讃岐國に歌へる手鞠歌なり、かやうのものなれど、論なう古雅なるにはあらねど、大に風致に益あるものと謂つべけれど、筆の勞をも忘れて說かむ、右歌様にて、色香乏しとて、貶しむること勿れ、雅言の限もて美しう飾る文といふとも、浮華しく散漫たらむには、何の用にかはせむ、是今はその義を主と采る所以にして、さて國の隔たれる所、あるひは語意の同じからざるものも、あるべきを以て、事の序に煩しきやうなれど詞の解を附く、

詞の解○第一節三げんは立並べる家三軒なり、ならんだは並びて在るなり、び（並び）をんと音便に云ふは俗に飛びてを飛ンデと云ふ如し、だはデアルの約にて、ルの省かりたる也、○第二節そこの家は其

所の家にて、即ち中の家を云ふ、善い婦ぢやは善き婦なりと云こと、き(善きを)いと音便に云は、大きを大い(れはいまうちぎみの類)と云ふ如し、ぢやもデアルといふ言の約り省かりたるにて、東の國にて、ダといへるに同じ、○第三節とうからは疾くより也、く(疾く)を音便にうと云ふ、竹取物語に歩みとうする馬、紫式部日記に、とう賜らむなどあるとうに同じ、れひなりては御起なされてといふ事なり、れは御、ひは晝なり、晝は起夜は寢るが常なるなり、やがて起る事をオヒナルと云ひ、寢る事をオヨルと云ひ、習へり、裏へ廻つては裏は屋陰にて、廻つては廻りてを促ていふにて、去りてを去ッテと云ふ如く、常に多きことなり、手水使ふててみづをてうづと云ふは音便なり、かみをカウ(上野神戸の類といふ)如し、御手水などいふ語物語書にあり、使うては使ひての音便、ひをうといふは、狩人をカリウド高麗人をコマウドなどいふ如し、東京人などは縫ひて使ひての類のひも、促呼てつ(縫ッテ使ッテ)といへるは縫うて使うてといへる優なるに及ず、化粧して、竹取物語などにけさうとある是なり、粧はシヤウの假字、シヤの切サなれどサウともいふ也、裝束をシヤウゾクともサウゾクともいふと同例なり、○第四節いとさんは孃樣といふことなり、(東京人じやうさんを促僻めて、ジヨッチヤンとやうに云へり)坊さんは兒男の美稱とす、れひなれよ上にいへり、れ茶云々御茶がよく沸騰るをいふ、ぽん〳〵とは其沸騰りて溢るゝ形狀言なり。以上雅俗をいはず、語のまゝにまに識せるのみなり。

さて一首の義は、里人がある婦を美て歌へるにて、先第一節は、婦の住所をさしていふなり、「西の西の其西のと」は語を疊みて歌ひ出たり、「三よしのゝよしの、さひのくまひのくまの俤あり、次に第二節「そこの婦は善い婦ぢや」とは、是一首の主意にて、その婦の行ひは善しと評斷していふ也、下の朝はとうから云々の語

はその善き事がらを分ちて説なり、伊勢物語に「西の京に女ありけり、その女世人に勝れりけり云々」とあるが如く、始に大旨を擧て、次に分説格なり、次に第三節「朝は疾うかられひなりて云々」早起は毎日第一の務にて、內則に婦事㆓舅姑㆒、如㆑事㆓父母㆒、雞初鳴、咸盥漱云云とある如く、何の國も同じ理なり、「裏へ廻つて手水使うて」とは婦女は妄に外面に出ぬ心得にて、朝早く人目の少なる程にも屋陰に廻るなり、是は謹肅る樣を見る、「二階へ上りて化粧して窓のあかりで紅さして」とは婦女の身を潔くし、妝を整へて、假初にもしどけなき樣せぬをいふ、是も婦女の禮なり、さて此に「窓の明り云々」といへる二句いといとめでたし、そは朝早く樓の上尚暗き程なれど、窓のあかりを便にて、口脂を點すといふなり、世の常の母の憐愛を恃める驕女ならで、偶早起する時は、燈燭を用ゐて爲すべけれど、此方は人の家に適る婦なれど、舅姑の見まさむを憚りて、さは得せざるなり、是藩政時代の婦の、よく婦行を守りて、舅姑に順從ひて、常々勤しみ儉やかなるものなり。此二句樓の上にて化粧せる樣、宛然見るが如き心ちす、次に第四節「いとさんどうさんれひなれよ、御茶がぽん／＼湧きまける湧きまける」とは、上にいへる身の粧のみならず、既に敏く厨下の事を執り竟て、釜の茶は十分に沸騰れりといふにて、茶の一を以て、朝飯の設皆とゝのへるを知らせたり、「いとさん坊さんれひなれよ」とは良人の妹弟などの尚臥たるを、今は皆起てよと、朝飯を告知らするなり、末の句「湧きまける」は歌の竟に打返して歌ふなり、總て此篇の句末に、てもじ多くして、中にも化粧して紅さしてなどのては、古事記天岩屋戸の段なる而もじと、その用法全く同じうて、（一事を爲竟て、後に次の事に挂る時の言にあらず）、こも亦をかしきことなり。世の婦女若よく此歌の意を、常に行ひ得たらむには、舅姑に事へてその歡心に叶ひ、家の業も修るべきことぞかし。

明治三十二年一月六日朝日うら〳〵かにさせるえむに、女兒の手まりを玩べるを見つゝ書きをへぬ。

漏屋の翁（三）

白松園主人

そのとき、おのれは父の面をうち守り、さて曲六は、何とてかくは、暗きも厭はで、翁をも待たで、かへりて漏屋に行くならむとく示し給へといふ。父はほゝゑみて、今暫く、父が語るを聞きね、おそろしき話ぞといひつゝ、やがて語をつぎ給ふ。

去る程に、曲六は息もつぎあへず、翁が門をさしのぞき見るに、雨いたく漏りぬとおぼしくて、雨の雫の、ほと〳〵と音す。燈火なけれど、内は暗けれども、月の光りに、なほよくすかし見れど、家の片隅に、人のけはひして、しく〳〵と泣くめり。曲六は眉根をよせて、翁は夜ふけぬ間に、必ず我屋に行きたらんに、何物のありて、泣くにかと、不審むほどに、やがて聲立てゝ、狼よりは、漏屋おそろし、〳〵と、いひ〳〵て泣く。さては、翁は未だありけり、益なきことや、今いふにて知りぬ、今よひ狼の來りて、翁を食はんとねらへるによりて、翁は得出でぬにこそ。翁こそあれ、馬をだに食はれなど、我がいたづきも、空しくなりなむ。狼はいづこと、能く〳〵見れど、背戸の破れたる壁のあたりに、爛々せる眼の光りと、息づくさまの見えてければ、曲六は急ぎ厩の口に至りて、守らん者をと、猶も様子を伺ひけり。

折柄、月は雲間に入りて、またもや、降りも出でなんばかりにて、元の如く常暗となりぬ。さるに、翁は頻りに聲立てゝ、前の如く、狼よりは漏屋おそろし、おそろし〳〵と、いひては泣く。狼は宵のうちより、翁食はんとその様子を伺ひゐたるに、そのいふを聞きて、あなおぼつかな、世にもりやといふ獸の大將軍ありて、おのれと同く、伺ひをるにこそ。狼よりおそろしといへど、いみじう猛き者なんめり、憖に逸りて翁を食は

んとせば、辛目見んか、寶の山に入りながら、手を空しくなさんは、本意なけれども、傷けられては詮なからん、歸へるに若かじと、思ひ定めけん、足音高く、厩の口を彼方へ逃げ出すを、曲六は早くも聞きて、馬の逃ぐぞと心得て、南無三追ひ止めでやはと、飛ぶが如くに追ひかけたり。狼はすはこそ、もりやのおひくるなれと、命を限りに馳け行くを、何處までもと曲六は慾にはまさる勇氣を皷して、古の八町二郎も物かは、忽ち追ひつきて、背中にひらりと、飛び乘りたり。狼は叶はじと全身の力をこめて、身振ひして、振り落したりければ、曲六はかたへの沼へ、ざんぶとばかり陷りたり。狼はこの際に、おとをも見ずして逃げ延びつ、おのれが栖處へ立ちかへりて、さて諸々の眷族共をうちつどへて、その由を告げ知らし、かく辛目にはあひぬれども、彼奴沼の中へおちいりたれば、溺れて死につらん、皆諸共に從ひこよ、曳きずり上げて仇うちせんと、多くの獸を引卒ゐ、以前の處へたちかへりて、さて誰かある、護物をもて、探り見よといふに、さるべき獲物なしといふ。狼は暫し沈吟じて、端と手をうちつゝ、然らば狐汝の尾の長やかなる、それをもて探りねといへば、狐は思はず身ぶるひして、命せには候へども、今日しも里なる犬におはれて、尾のさきを、したゝかに傷つけられて候へば、探らんこと、思ひも寄らず候といふ。然らばとて、他のものに命ずるに、皆々去りごみして、我承はらんといふものなし。其時全類を推し分けて、進み出でゝ、何程の事かはある、やつがれ承はらんといふ。全類驚いて之れを見るに、猿にてありしかば、狼いたくよろこびて、汝のものに巧みなる、よう仕れといはれて、猿は欣然と、沼の汀におり立ちて、尾をふり翳して、彼處此處と、探る程に、忽地尾を緊と、捕ふる者ありしかば、猿は膽魂も身にそはず、皆々救へと、聲を限りに叫けびしかば、狼を初めとし、救はんとするもの一匹もなく、山奥さして、我をさきにと逃げのびたり。

猿は仝類にすてられて、如何にもして逃げんものをと、もがきにもがけど、絶えてせんすべなければ、天にあらび地に叫けびて、聲をも泣きからし、面をも泣き赤らまして、遂に尾は、根本よりホッキと切れしかど、辛き命をぞ助かりながら、これよりそが子孫は、すべて尾はなくなりて、面さへ赤くぞなりけらし。（をはり）

風流の交

金津常十郎

客曰、其角集のうちに、乞食のつくりたる發句に、

こもの雪わがうごきなどちりぬべし

とあり。誠に風流には貴賤のへだてなし、非人の身として諸風士と名をつちぬる事、實に風雅の一德なり。昔も、丹州貝原と云ふ所に「すて」とよべる女あり、俳諧をよくして其名高し、ある年京師に遊び、仙洞家に召れて栄の花の題を賜ひければ、取あへず、

栄の花の跡は人まつ閨の友

君きこしめされ、甚御感賞まし〳〵て、

貝ぞらにれしやすてれく露の玉

とあそばされて下されけるとなり。誠に規模の事にぞ思ひはべる。

主曰、されどこそ古人も天地を動し鬼神を感ぜしむとはいはれたれ。風流の道は目に見えぬ鬼神すら感ずといへど、いはんや目に見ゆる人をや、風雅は天地の道なり、貴賤は人の品なり、然れどいかんぞ貴賤にかゝはる事のあらんや。昔和州郡山に、正式と云へる俳人あり、則貞門の風士なり。其身輕き勤めする人故、勤仕の身は心のまゝに花見る事も叶はずと述懷して、

そどに居て見ぬや吉野のはなのさき

と云ふ句をいへり。然る所、いかゞして太守の御耳に入りけん、優く思召て、吉野の花見にまゐれとしどしの暇賜はりければ、それより吉野に遊びて心のまゝに花をながめ、其歸るさに見事なる花を一枝折取て、道の程さゝげ歸りて大守に奉りければ、悦び給ひて

あしがきの吉野まぢかく家居して
　　とふべき花にこはるべしとは
とあそばし賜はりけるとなり。布留田造と云ふ狂歌師も、此正式の作名なり。狂歌も殊の外上手なりし由なり。又同國三輪と云ふ所に、布袋屋何某といふ人、年ごろ歌を好みしが、ある時吉野にあそびて、
　花とのみ見しはふもとのこゝろにて
　　雲わけのぼるみよしのゝやま
とよめり聞く人皆秀作なりと稱美しけるゆゑ、おのが心にも天晴よみ得たるものよと悦びて在しが、ある年京都へのぼる事のありしに、序ながら冷泉家へ詣りて、右の歌を御覽に入奉りしに、爲村卿や、沈吟ましく〳〵、扨宣ふは、汝は殊の外骨を折しと見ゑたり。去かし歌にはならずと仰られけれど、彼男大に肝をけし、暫し茫然として居たりしが心付て申上けるは、恐れある事には侍れど、御直しも下し置れなど、歌になり申事もやと伺ひ奉りしに、いかにも添削して歌になるべしと筆をそめ給ひて、
　白雲と見しはふもとのこゝろにて
　　花わけのぼるみよしのゝやま
と御直しあそばして仰けるは、汝がよみしごときは皆いつはりなり。白雲と見るは、虚ながらも爰が歌の脉ぞと宣ひければ、彼者感じ入りて御前をまかでけるとなり。

才くらべ

蓬生屋女史

左大臣時平公、右大臣菅公とは、往々論あはず、一は權をとりて動かず、一は理をとりて聽かず、論はてずして終るためしもいと多く、多くは又時平公が權のまさる方少なからざりき。或時、又意見あはぬことあり。右大臣、此の事のみは、我が說を通さねど、世の大事たるべしと思案に暮れけるが、時平公には一の僻あり、それは一つのをかしきことあれど笑ひ止まず、何も忘



る丶が僻なり。されど、此の説通さんには。左大臣をして笑はさしむるにしかずと案じわづらひ、やがて一人の殿上人に語りけるに、そは安きことなり、私にまかさせ給へとて、ひとりうけひきぬ。やがて其の日となり、其說をとくや、彼の殿上人狀をよまんとして、高らかにならしたり。時平公いとをかしがり、さては笑ひどよみ、遂に萬事を管公にうちまかし、已はをかしさに堪へず腹を抱へて歸りけり。菅公乃ち已が意のまゝをほどこしけりとなり。屁一つの謀の叶ひしもをかしきためしと、ひき出しぬ。延喜の帝は、みな人知り奉る仁君、かつ聖に渡らせ給ふ君なり、此の君、大方常に笑ませ給ふとぞ。それは、おごそかに形づくりをらせ給ふては臣下皆かしこみおそれて、諫を申し入るゝものなしとて、さやうに笑ませ給ふなりと、此の一事にても其の賢君たりし事おしはかられぬべし。かしこきのみにはあらず、みな人、善にうつらんと思はんものは、

なみ、かやうの心がけたもつべきことにこそ。

禽獸の言行

田端の隱居

家の中にては蛤貝外に出で丶しゞめ貝なるあり。それは外へ出で丶しゞめ貝の如く、なるは人を怖る丶にて、人をおそる丶は、おのづから尊敬の意をたもちたるなれど、さのみあしきにはあらねど、家の中にては父母兄姉、長者にさやうにせどよし、さらに家の中にては蛤貝の如く、いとふくれて大きくなり居るは憎し、されど外へ出で丶のしゞめ貝、敬とは見えで、卑屈とこそ見らる丶なれ。翁が家にも、か丶る娘をもたり、いと殘念の限りなり。又螺貝に似たるあり。中は空しく、何事もなきに、風の吹くま丶人の口をそへ誘ふま丶にいと大きなる空虚音を立てはこり、神の如く佛の如く、聖人の如く、賢人の如く思はせむとするあり。さやうなる音はじめこそをかしき音ときかめ、ねらき音と思はめ、誰れかはいつまで、唐人のねごとを倘ぶべき、遂には何等の價値もなくなるぞかし。義理も人情もなく、人を仆し、人を食ひ、己れひとりよき汁吸はんとするを人間中の狐狼とす。また世に送り狼と云ふあり之はある山中、夜中など人出づれど、其人を何處までも送るにて、狼の中にもやさしき者ありと一わたりには思はるれど、さはなく、人のつまづき、人の仆るに乘じて食ひつかんとする狼にて、それに逢ふ時は、紐やうのものをとき、其の先きを結び、ひきありきて、よく用意してまろばぬやうにし、恙なく門まで歸らば、其紐をなげて内に入る、狼其の紐をくはへて去ると云ふをかしき動物なり。人の中にも、又さやうに人の仆る丶をまちて、己れ食はんとするあり。されど人々心して、まろばぬ先きにはやく杖をつきおくべしあなおそろしおそろしの世や。

（未完）

家庭の花

小倉山人

後篇（承前）

淋しき秋の特更あはれは雨後の朝ぞかし。朝日のよわくさせるはあれど、落葉雨に朽ちそめて、枯木の影も心細く、野山の景色はこれよりぞ寂れ行く秋果て方は、おもふこと多き人の胸をぞ何々と痛めしむ。先刻より机に靠れて太息つくづく世をぞ怨ぜし貧書工、おもひ迫つてほろ〳〵と落す涙が文字ならば、如何なる文章とかなるならむ。老母や見給ふ、又叱られむ。アヽわれながら氣がよわい。かゝる女々しき性根にて、何時目的を達しやうぞ。大丈夫すべからく、と流石は男子のこゝが特色、左樣じや、と拳に机を一擊、あはれおそろしき勇猛精進の氣象を奮ひ起し、金が物いふこの世の中、ウヌ何うしてくれうぞ、と仰ぐ目前に障子越、煌く朝日を眩しとてにや、眼をしばたゝく額には、枯木のかげぞ映りたる。今日から斯うはして居られぬ、と霞村いよ〳〵元氣づき、障子戞然と引開けて、強くは踏めぬ椽側に出づれば、さつても可笑しや世は魔界、今まで一間に悄然と垂籠めて、世もいや人もいや我身さへ厭はしと、厭世道を辿りしほどは、落葉の雨に濡れたるさまより、枯木の悄然立てるさまゝで、悉皆涙といふ餘り陽氣でないものゝ種に成りしが、何に世の中は河童の屁、そのくさぐさを書きあつめて、少々おし強く賣り飛さば、悟つた人でも貰へば悦ぶ金も手に入り、大家とかいふ看板も自然と社會が贈る可し。ムヽこりや面白いと機運熟して、今日始めて當世渡世の秘極を悟り、ぐづと仰向いて朝の日光匂はしき青天を眺むれば、心俄かに活々として、世の中素的滅法に廣し。ムヽこりやいよ〳〵面白いと笑み溢れて、漸次眼を庭におろせば、これまで頻りに涙を誘ひし落葉の雨に濡れたるところも面白く、枯木の悄然立つたも可笑しく、風そよ〳〵と戰ぐさまさへ心地よし野の春の如し。折

しもよすがに屋の棟あたり、ころころころりと喜び烏の聲すなり。平生には隨分澁い顔を爲ませる老母、今日は、今日は、何ういふ風の吹き廻しぞ、アレよろこび烏が家の屋の棟で啼いて居るに、お前には聞えませぬかへ、と何年目にてか老母今日笑顔を見すれど、霞村もおもはずニコ〳〵と笑ひ、成程〳〵烏めが、アレ切りにやつて居りまするな。これは今日この霞村に、烏の畫をかけ、賣れるぞといふ、美神の御告かも知れませぬ。早速一枚書きましやう、ムヽ仕合せと今日は紙も一枚ある。老母さま、私は何うやら氣が引立つて參りました、と墨摺りながし、紙を展げて筆執つて、熟柿に烏といふ趣向、圖柄は餘り新しからねど、運筆健かに書きあげて、視れど視るほど神あり氣あり、わが畫ながらも近頃の出來榮え、と霞村自ら見惚れて溜息吐きたる所に、がら〳〵〳〵と威勢よく來て止る人力車の音。續いて聞ゆるお聲はそれ、昨日こそお入來ありしに、今日亦かさねてのお入來は不思議。何は兎もあれ返辭して、はい居りまする。何ふかまあ此方へと飛んで出づれど、アヽ好かつた、在宅で好かつた、ヤレ〳〵先づ〳〵、イヤ好い天氣に成つたのう、と何とは無しに取りあわてゝ入り來るは霞峰先生。サアまあ何うか此方へ、と霞村は頻りに手を押揉む。ムヽ朝から勝い勢が出るの。ハア烏が出來て居るの。どれ〳〵と小腰屈めて一覽あり、ムヽこれは中々巧く畫いた。イヤ何うも非常な出來ぢや。近頃は又滅切腕が上達つた〳〵。イヤ何うもそれそれ入りまする、と霞村は頻りに小腰を折る。先生他所に振向かれ、ムヽ幸ひと老母さまも居らッしやる。老母さんお早うござります。昨日は何うもいろ〳〵。左樣でござる、結構なお天氣に成りました。早速ながら少々御相談があつて參りました。お手隙ならど何うか此處までと云へど、はい〳〵只今參りまする。霞村は折々眉を顰め、師の意中を疑へり。老母はぼつ〳〵來て座り、相も變らず苦き顔、先生一服喫し給ひ、煙管をぽんとお膝にお掛かれ、さて

御相談とは他でも無し。こゝに無類の嫁御あり。身分は御同様に士族で、年齢は今年二十三なり。この女第一の取柄は、先づ心根の優しくして、容姿も十人並には勝れて美しく、裁縫も府縣の免状を取つて居ります。年配と云ひその外萬事、霞村が妻に最も相應し本人より先づ聞きたきはお前さまの御了簡なり。いかゞでござる、その樣なを御子息の嫁御にもらひ、お前さまもそのお年して、いやな鍋釜のお世話を成さらうより、その邊は若きに任せて氣樂に身をおき、御子息にも幾分か、家事の苦勞を妻に分たせ、早く立派な壻をかゝせて、出世爲せたいの御了簡はござりませぬか。御思案どころでござりましやうぞと平く諭す。去りとは危介至極な性分、老母一通聞いて、度々の御親切、老が骨身にしみじみと、誠うれしう存じまする。この上ながらお世話ついでに、もしそのやうなのがお見あたりでござりまするならで、何うかお世話を幾重にも、と云ふ可きところを苦り切つて、かたじけないとの一言は、横に向いて時々漏す欠伸の序次に出しもせず、お前さまの仰しやるところ、いよ〳〵以て眞實ならで、お言葉の通りなり、わたしも早この年に成つて、寒さの日に增すこれから先は猶のこと、鍋釜せゝくるお役目は眞平なれど、一應念を押したきは、お前さまの媒介口なり、この前の子で早三度、媒介爲られる度毎に、イヤ身分も宜い、イヤ容姿も美い、心も柔順で藝も出來る、イヤそれも好い、これも宜いと、三度は三度よいよいづくし、虚然乗つて貰うて見れど、お前さまの口と物とは天地の相違、三度は三度皆おなじやうな僞物で、唯の一度もわたしの氣には適らなんだぞへ。今度も亦よい〳〵づくしで、砂糖の十分利いた牡丹餅、さも甘たらしうは言はるれど、一口食べて見ぬ上は、又何うやら安心が成りませぬ。去りながら何處までも貰はぬとは申しませぬ。いよ〳〵の所、誠氣に適つた嫁ならで、貰つて樂を仕たいは山々。たゞ氣遣はしいは又しても、お前さまの媒介口。あぶないものぢや、と

折角持ち込みし話の鼻捧、一句も言はせず折つて仕舞へば、先生は興覺め顔、霞村は地にも入り度心地。散散惡まれ口を利きて、性分とは云ひながら、老母は胸の閊へを下げて、ヤレ／＼と云ひながらそろ／＼立つて行かんとす。マアお待ち下されい、と先生は手に付けし我門生の可愛き餘り、虫を殺して老母を曳き止め、然らば今一ッの御相談は、この度の嫁こそは、と拙者慥かにお引受け申さば、兎にも角にも今一度嫁御をお迎へ下さるか。お言葉に一寸の相違無く、誠心根優しくて、わたしの言葉に逆はず、よろづの面倒親切に、見てくれるといふ嫁ならば、今も申しあげたやうに、貰はないと、申しませぬ。それは寔にかたじけない。然らば今度は何處までも、屹度お受合ひ申しまする。この度の嫁御が上に付きましては、この川上霞峰におきまして。それでは、如何にも貰ひませう。その代りには川上先生。イヤ最うその御念には及びませぬ。時に霞村、今度はお前の了簡じやが、覆藏なく打明して貰ひたい。實はその、今度かさねて媒介を爲やうといふのは、お前も以前から知つて居る淺草の紙屋、彼のそれ清川の姪じやてのう。年齡は今年が二十三で、容色も心も申分無し。その上諸藝も萬能で、お前の嫁には至極適當。あの樣なのを貰つたならば、定めし内證向も好く成つて、職業に充分力を盡すことが出來て、自然出世も早からうと、實はその、私もその邊を考へて、辛く探したやうな譯じやが、お前の了簡は何んなものじやのう。イヤ最う何から何まで御親切に、有がたいとも辱ないとも、お禮の申しやうがござりませぬ。何んの、而てお前の了簡は。私は最う母の心次第でござりまする。ム丶是れは滿息、而て見ればお前にも異存は無いの。然らば善は急げの世話に從ひ、今夜呼ぶとしては何うじやの。ヘエと霞村は眼を開く。イヤ今夜さ、と先生は言葉に力を入れて言ふ。イヤそれはと霞村は躊躇ふ。何に萬事は私が知つて居る夕景こ丶を掃いておけ、障子の穴も塞ぐに及ばぬ。それでは私

は是れから又、淺草まで行つて來る。これで安心〳〵、とわが事のやうに悦ばれ、待せし車に老の身の心逸れば身輕く乘つて、上野の方へと消え給ふ恩師の後影、霞村は見ゆる限り見おくつて佇立みたりしが、懇しき影の消ゆると同時に、何れもひけんおろ〳〵と含涙んで、恩師の後を伏拜めり。

（後篇未完）

梅の下風（十七）

白魚女史

ねぐらはなれし時鳥わが子にあらぬ子も子としては、中々に他處に見られぬお專がなげきいぢらしく如何にもして救はまし、助けましと絶えず思ひたる與惣次もよろこびて、よぼ〳〵たち腰を延ばし御成遲しとまちわづらへば、お專は猶更覺束なくさへ思はれ、もしや根なき事にあらざるか、夜の間に御成ありしにはあらずや、さはる事ありて止み給へるにはあらずやと心を痛め、いたむるほどに、御先きを拂ふ聲す。うれしやと思へば俄かに足すゝみて腰をつきたるまゝ、早くより大地にひれ伏し、心に神を祈りて待つ間程なく、御輿近づきぬ。お專は平伏しながら、御上申し上げ候、何卒御聞きをさめを願ひ上げまつると糸の聲もほそぼぞわなく〳〵竹にさしたる上書を差出せば、與惣次も共にひれ伏して、共に願ひ奉るを左右の者共うけ納めて、御輿にさし入るれば、雅樂頭樣、上書を開かせ給ひ、つく〴〵と二人がさまを簾の中より御覽せられ其方が傳吉の妻せんなるか、又、老人は誰なるぞとの供の御取次ての御言葉に、兩人は唯かしこみ、はい、私は傳吉妻せんなる者にて候。これなるはせんが養父與惣次と申す者にて候、明日と定りし傳吉が命、何とぞ御殿樣の御慈悲もて御助けあるやうにとわなく〳〵聞え上ぐれば、供の衆また取次ぎ、願書御とり上げになりたり。何れ御沙汰あるべし、御輿やれとの下知に、駕舁はや御駕を舁き上ぐれば、二人はは



つとむかり、首を大地にすりつけ、思はず手を合せよろこび涙にむせかへりて、又起き上る力もあらず見ゐけり。

あはれ天、善にくみすと聞くを、傳吉幼きより惡をなし、事も覺えぬに、如何なる天の責めなるにや、罪なきしもとに髮膚はうち碎かれ、僅かに玉の緒を繋がるる牢屋の内、明日は斬られの日とさへ定まりぬ。是も先の世の報いか、さても我れ父母を養はんとして、親またず、せめて家政を興して不幸の罪あがなはんとして中々に此のなき罪、遂に身を殺し、家名を穢す、身はよく〳〵の不肖、父上、母上、御先祖樣、たゞ〳〵ゆるさせ給へ、許るさせ給へ、後の世には必ず〳〵彌陀の示現とやらをうけ奉り、四省して仕へまつらん程に、南無此の世の罪業はよきにまかし申すべしと玉なす涙を珠數にしやうみやうしつゝ眼を閉ぢてはや明日の覺悟を心になす悲しき夕暮、獄屋を預り守る者入り來り、傳吉に向ひ、さて〳〵其方は果報者明日に迫る命なりしを、評議の事ありとて、上樣よりの御達しにて、明日の命延びたるぞとの言葉に傳吉は夢見たる思ひ、ふと眼を開きてあたりを伺へど現とも思はれざりけり。

さてお專、與惣次が上書雅樂頭樣御覽んぜられ、お專與惣次が身の疲れやうを推され、速かに榊原家へ使して、郡役に下命し、傳吉が明日の命を延べ、江戸表にて、詮議あるべき旨を達し、やがて江戸へ上り、大岡越前守之をあづかり、やがて傳吉、お專、與惣次をはじめ、馮司、お早、村頭、喜平太平等五六名、郡役二三名を呼び召されて、白洲を開かるゝことゝなり、第一日には、馮司、お早呼び出されぬ。馮司方が願書を讀ましむるに、越後高田寶田村百姓傳吉は、元來私が甥にて、且は若年にして父母を喪ひ、不幸の孤、あはれみ、子とおもひ父と思ひ候ひて盡力せしこと少からず、恩義もこれあり、其の身江戸表へある際、旅宿の女と通じ、家に在る妻に無き名を負はせ、其の母もろ

ともに逐ひ出し候を私見兼ね候て、ひき取り、やがて百姓共のすゝめにて、息子が妻としたりしに、傳吉之を恨み、遂に暗夜猿島河原にて人知れず息子夫妻を殺ろし首を隱し候を天命遁れ難く、傳吉と申す火打袋其傍らに落ち居り、殊に庭の飛石にも、衣の裾にも血の跡のあざやかに候は正しく、息子が仇、何とぞ、御詮議しかるべき罪にあてゝ、息子夫妻が恨みを晴らさせ給ふやう願ひ上げ奉るとの願書よませ給ひて、大岡殿如何にも願書の如くならぞ、さぞ無念に覺ゆらん、れはや、そちも嘸かし一人の娘を失ひて悲しからん。して猿島河原より傳吉が宅までは何里はどあるぞと尋ねらるれぞれ早空眼を拭ひながら、四十丁ぞかり候といとはれ聞ゐたり。四十丁の路を歩行歸りてなは飛石に血の跡あざやかなるや、傳吉は羽でもはをへり虛空を飛び歸へり、はじめて我が家の前に足をつけたるにや、いとをかし何はともその詮議を遂げ、そちが無念をも晴し暮む立ちませとて白洲は閉ぢたり。



曉旅行　東久世通禧

餘りにもけふの門出やいそぎけん
ゆけぞもくらき野路の松むら

枯野霜　前田利嗣

山かげの枯野にたてるむらすゝき
くるゝもまたで霜ぞれきける

野徑霜　長岡護美

朝まだき起いでゝゆけぞれく霜に
くつの音寒し野べのかよひぢ

山影寫水　津輕承昭

ゆく水のみどりも深しまつたてる
龜の尾やまのかげをうつして

雪中鳥　宮地嚴夫

あさるものなきか梢のむらすゞめ
雪のふる日はうごかざりけり　小出粲

鳩

うぶすなの杜の山ぞといへぞとに
まじりてあそぶ小山田のさと　植松有經

雪中鶯聲

草も木もうづみはてたる白ゆきに
いづこなるらんうぐひすの聲　大口鯛二

放鳥

放てぞそとらへられけるはなち鳥
ひとのなさけや仇となるらん　千葉胤明

烟草

何ごともまづさしおきて吸ぞかり
たゞこすきにはいつなりに劔

和布刈神事

ふでくさの生るなみまを播わきて
わかめかりくる神のみやつ子　加藤義清

根引松のかたに　松浦辰男

てすさびに引捨られしひめまつも
みさをの色はかはらざりけり

元日筆はじめ

山かげの雪のしたいはかきわけて
はるかに祝ふ御代のはつはる　鹽井正男

松上雪

嵐にもなびかぬまつのこずゑまで
なびきてつもるけさのしら雪　大畑弘國

伊藤ゆき女

これよりはおのが夜なべと雄心を
振れこしけんすがたゆかしも　佐々豐水

香川影樹の女

水にうつる我影をしもなげきけん
ことぞの花のすがたゆかしも　仝

わが小竹園にかよひくるをしへ子の男女六十人
あまり心をあはせて木野神社に五色の幕を奉る

によりはしつかたに歌かきてよとこひければ幕

といふ字を物名にして　仝

天地のいつゝのいろのうるはしき

こゝろ立まくねぎかけまつる

橋上霜　草野隆道

もみぢの散りし梢にあらはれて

おきしもしろし峯のかけはし

朝　赤松景福

起きいでゝ一日のことは朝日子を

をろがむ時のこゝろもてせよ

勤倹　安齋篤敬

さむかりと思ひなすてそ繕ろひし

さうじのかげも風やよくらん

寄水鳥述懐　木庭芳香

世をわたる人こそならへみづ鳥の

浪のまに〳〵うきしづみして

晴耕雨讀　宇井正夫

日よりには門田たかへし雨ふれば

むかしの道をふみわけぬらん

述懐　伊東祐賢

わけのぼる歌のなかやまおく深し

ふもとにくるゝ身をいかにせん

藤原百川公　近衛貞子

うごきなききみがまことの心もて

國の御はしらたてかへにけり

寒樹風　前田朗子

もみぢばはさそひつくさし後も猶

梢をならすかせのさむけさ

寒夜衾　柳原愛子

重ねてもあらしの音の身にしみて

ふすまかろくも思ふ夜半かな

竹霰　松平健子

さら〳〵とまがきの竹の音すなり

雨やあられにふりかはりけん

國旗　南鄕柳子

日の本の御旗のかせにとつくにの
くさ木もなべて靡きふすらん

池水鳥　保科節子

池みづは凍りにけらしけさみれど
あそべる鴨のかずぞすくなき

千代野尼　北島以登子

君が得しこゝろの花はいまの代も
ちよ野に廣くさかゑけるかな

孟母　常磐井文子

三たびまで隣かへしやをさなきを
をしふる道のかゞみなるらん

嶺上松　鶴久子

白くものうづむとすれどみね高き
まつこそ人の目にかゝりけれ

石川丈山　河村重子

のがれすむひゑの麓のかりいほは
なか〳〵世にもしられける哉

古宅鶯　海上壽子

をすやれし軒端の梅にいにしへの
春をこひてやうぐひすの鳴く

寒梅　柴田靜榮子

年さへも春にさきだつ御代なれど
雪のうちよりうめや咲くらん

亥年を迎へてよめる長歌並短歌　野崎宗英

なぐるさのと走るがごと　ゆくみづの流るゝがごと
いつしかと月日めぐりて　あら玉のとしは來にけり
うら〳〵とのぼる日影に　軒ごとのみはたかゝやき
かどごとのみしめ色そひ　皆ひとのこゝろのたまも
曇りなくうるはに見ゑて　いとも〳〵のどかなり鳧
をさまれる御代に生れし　うれしさを何にたとへむ
樂しさをなにゝくらべむ　しかはあれしかはあれ共

とつくにの人もきよりて　われひとゝともに住ひて
吾ひとゝともにつとめむ　その日こそ遠くもあらね
ひさかたのかみ代に生し　たみくさはいよ〱茂り
根ざしさへいとぞ堅めて　ゆき霜のそれにもたへて
ときはなる松のみさをを　身をしめて榮ゆかなん
むらぎもの心かまへを　いそしみてなすべき折ぞ
されぞこのこゝろの玉も　れのがとる正しきわざも
いとゞ猶みがきにみがき　いさましく世になり出ゝ
皇ぐにのひかりわげんと　走りゐのよそめもふらぬ
いさましきとしに逢こそ　うれしかりけれ
墨縄を人のふめとや飛彈工
ひたはしりゐの年は來にけり

ある人の賀に老松翠色深
といふことをよめる歌

瀬上壽子

春山は花さきをゝり、秋山は紅葉にほひて、春秋そたぬしかりける、しかれども春雨ふれど、花はもあせにあせしを、かゝれども秋風ふけど、紅葉ぞもちりに散しを、ちりもせずあせもせずして、むす苔のみどりも深き、池のべの老木の松は、五百世かも千世かも經ぬる、影ひたすみぎはを見れど、萬代の龜ぞあそべる、しげりあふ梢を見れど、千代ふべき鶴ぞすみける、鶴龜は愛度ものぞ、うつしみの世の長人や友となすらむ。

松と水と

路山子

はなの晨の木の間には　朝日直刺すやまのべに
緑のいろをあやなしつ　下ゆく水にかげとめて
つきのゆふべの玉琴を　うごかぬ岩と諸ともに
梢のかせにかなでつゝ　千代をしめたる松高し

＊　＊　＊　＊　＊　＊

げに大御代の初日かな　けふ改まれはぞらの
夜半の嵐もしづまりて　東のかたはがら〱
世には汚しあともなく　あまの戸あけて八衢に
かみ代れはゆる光あり　天津日影のいでませど

＊　＊　＊　＊　＊　＊

かしこき御影仰きつゝ
千年のまつは行く水に
語るか聲もたのしげに
さ枝のそよき長閑なり

＊　＊　＊

花のあしたの色もよく
月にひゞくも清けれど
とよさか登る日を受て
立てる姿もたぐひなき

＊　＊　＊

樂き御代の今日に逢て
きよき光を身におひて
いざやうたはん諸共に
なれが涼き音をそへよ

＊　＊　＊

水は日影にきらめきて
黄金の色をよそひつゝ
こたふる聲も和やかに
さなり／＼と頷づきぬ

＊　＊　＊

立てるのみかは打出て
しらべいみしき松の聲
それさへあるに行水も
音色さやかにあはせ鳧

頼文いはく。路山子は、安藤桀光ぬしの別號なり。

こゝろの花　　井上頼文

梅にも紅葉にもたちまさりて、高く薫り、遠く匂へるは、よろづの物のかみともあふがるゝ人の心の種より咲き出る花なりけり。此の花のあやしくたへなることは、ふりしきる雨にもしをれず、ふきすさぶ風にも散らず、春ゆき秋されども、清くうるはしき色香はうするゝ世なく、年ふるにしたがひて、ます／＼なつかしくも、うるはしくも、清くも、けだかくもなりまさるものになん。いでや今より梅にも紅葉にも勝れる心の花の千種八千種つみいでゝん。

つみいてゝ嬉しきものはちりうせぬ
人のこゝろのはなにぞありける

新年の詞　　三輪義方

ほがら／＼と、明けわたる空の氣色は、天地の、わかれそめけん、そのかみも、かくありけんとさへ・ればねて、心の中にものおもひもなければ、まづは、君は、やちよにと、ことほがれ、おのがよはひも、ひさごになど、祝ひつゝ、結ぶみもひ、濁らぬ御代を、あふ

ぎて、打向ふ、齒固のもちひ鏡など、いづれも〳〵、物として、清からぬものぞなき。かくて、うら〳〵と、さし出る光も、あらたなる、心ちのせらるゝは、日出る國の年の始は、あだし國々とは、異なるにぞ、有るらん。此は明らけく治るといひてより、この方、みそとせあまり、ふたとせといふとしの、むづきついたちの、あしたになん。年立ちかへりぬる、御賀まをしに、まうのぼる、つかさびとたちの、こと〳〵しう、さうぞきたる、ゑもいはぬ光、うるはしくて、馬に車に、引きつゞきたる、けはひの、ものよりけなるに、まして、その人々の、まゐつどひたらん、九重の内の、御有さまや、いかばかりならん。さるは、八百萬の神の、かむつどひの、如くやあらましなど、おもひやり奉るも、かしこうなん。大路行きかふ人は、綾錦たちかさね、花を折りたる、をとめの姿は、さらにもいはず、何ならぬ商人さへ、よき衣きたる、はれ〴〵しさ、霞まぬ空も、色に匂ふまでなん。去年の暮より、暖けき海づら、いでゆわく山里などを、もとめつゝ、しばし、世のかしがましきほどを、のがれて、たびやどりに、送り迎ふるすき人も、あめるは、豊なる御代の恵に、潤ひあまれる、すさびにして、そは都の賑はひは、見ざらんなれど、是も亦、仙境に遊ぶ、心ちやすらんかし。まことや、年ごろも、猶いたく、さやぎてありけりと、きこゆる、島のあたりも、豊芦原の、そのかみ、たけみかづちの神、ふつぬしの神を、降し給ひけんやうに、かしこき、みこともちの、おもむけのまに〳〵、やう〳〵に、まつろひゆきて、さる島人も、大御たからの數に入りて、皇國の、暦の定の、まに〳〵、けふの日を、迎へて、長閑けき御世を、ことほぐらんなど、遙なるせかいのことをさへ、おもひやれど、いとゞ心も、のびらかなる、年の始になん。





雑報

●聖徳　深く厚くおはします御事、いま更ならず、仰ぎ奉れども、はてしもおはしまさず。去歳の十二月の末つかた、廿八日といふに、陛下は、侍従を召させ給ひて、月日とくきへゆきて、今は、ことしも暮れなんとす。民のありさま、いかならん。今日より三日が間、いらかならぶる都をはじめて、鄙のふせ屋に至るまで、見て参れと宣ひて、遣し給へり。侍従かしこまりて、限なく見めぐりかへり、上りて、いづこも、みな、竈の煙いとにぎはへるよしを奏し奉れるに、詳らに聞し召し給ひて、大御心やおちゐたまひけん、みけしきいとうるはしくおはしましきとなん。

●御孝徳　皇太子殿下、御孝徳深くおはしますも、亦、今更の御事ならず。殿下には、つねに、あした夕、両陛下の御肖像を拝し給はでは、必、御饌をきこしめし給はずとぞ。又、英照皇太后の御神霊を祭らせ給ふには、必、斎戒沐浴せさせ給ふとなん。いともかしこき御事にこそ。

●御服　皇后宮陛下には、元旦より三日が間、年賀の拝を受けさせ給ふに、御新装、古式と新式とを折衷したる白の御洋服を召させ給ひ、御胸のみぎり左には、金光きらびやかなる御紋章をかけさせ給ひきとぞ。

●御講書始　去し七日、午前十時より、御學問所にて、行はせ給ひ、細川潤次郎(詳書)本居豊穎(國典)三島毅(漢籍)の三侍講、本文を演釋推究して、進講し奉れり。要は、みな、治に居て亂を忘れず、國家太平無事の日も、片時だも、治世の大御心を緩うし給ふべからずといふにあり。正午閉筵せさせ給ひ、これを嘉納せさせ給ひて、厚き大御言を賜ひきとぞ。この日、宮内大臣、侍従長、宮内次官、及、上席の式部官をも倍従せしめ給へり。

●御學問始　皇太子殿下には、去し九日、沼津のかり宮に、三島、本居等の侍講を召しよせ給ひて、御學問はじめの御式を行はせ給へり。

●歌御會始　は、十八日に行はせ給ふべきを、廿五日に延引せさせ給へり。さて、役員には、

讀師從二位伯爵　壬生基修
講師從二位子爵　北小路隨光
發聲從三位子爵　綾小路有良
講頌從三位伯爵　大原重朝
從三位子爵　前田利鬯
正四位男爵　西五辻文仲
從四位男爵　金子有卿

●英照皇太后御例祭　去し十一日は、皇太后御三年聖忌にわたらせ給ひしかど、宮中にては、御靈祭を行はせ給ひ、又、京都、後月輪東北の御陵へも、御使を遣はし給ひて、御祭を行はしめ給へり。

●貞宮殿下薨御　殿下は、今上天皇陛下、第十の皇女にておはします。御生母は、權典侍園祥子、即、小菊内侍なり。明治三十年、九月二十四日、午前十一時五分、麻布御用邸にて、生れさせ給ふ、御名を多喜子内親王と申し、貞宮と稱へ奉る。去歳の末つかたより、御つゝがおはしましけれど、去し九日、相州、酒匂の松濤園に、遷りおはしましゝに、十一日、御病(御脳膜炎)とみに重らせ給ひ、其の日、青山の離宮にかへりおはしましゝが、侍醫のつかさ〴〵、あらん限の術をつくし奉れども、かひなくて、午后十一時五十分つひに、かくれさせ給ひぬ。雲の上のおはんなげきは、申すもかしこし。國の内こぞりて、畏みいたみ奉らざるはなし。御年は、こゝに二年四ヶ月にて、おはします。御なきがらをぞ、十七日、豐島が岡の、御陵墓にかくし奉れり。御葬の御式は、神祇式にて、いと質素に行はせ給へり。いとも〳〵かしこき御事にこそ。

●仁慈　おはんなげきの御中にも、かく、深く、下萬民をおぼし給ふ御事、かけんも、いとかしこし。およそ、皇族薨去には、三日の間歌舞音曲を停止せさせ給ふ御例なるを、このたびは、下のなりはひを思し給ふ

大御心より、この令をしかせ給はず。且、又、さきに、皇子、満宮照仁親王かくれ給ひし御時、御葬の列にたつべき儀仗兵をも、近衛騎兵、一小隊、同歩兵一大隊、また、師團歩兵一大隊をたて給ひしかど、此度も、この例にならはせ給ふべきにやと、御心をうかゞひ奉りしに、陛下、きこしめして、かくしも〳〵、國家の干城を労せしむるに忍びず、且、皇女におはせど、近衛騎兵一小隊、同歩兵一大隊にて可なりと宣はして、師團歩兵一大隊を除かしめ給ひきとぞ。おほんめぐみ深く厚くおはしますことは、實に稱へ奉らんに、言の葉もなし。

●たまもの　さきに、侯爵伊藤博文の母堂あやまちて、腰を傷め、病床に臥せるを、兩陛下きこしめして、御使を、大磯の邸につかはし、御肴、及、御料理數臺を賜ひていたはらせ給へり。

●仁徳天皇祭　ことし、千五百年にわたらせ給ふをもて、來ん四月のころ、大坂なる高津神社にて、大祭を行ひ奉るべしときく。

●孝子孝女　下文を見て鑑とせよ。誰もみな、人たる道をふみて、大御心に協ひ奉れ。この二人は、特に朝廷より賞せられたるなり。

三重縣伊勢國河藝部椋本村　駒田　多市

資性温良幼より父母に孝事し父中風を患へ加ふるに母病蓐にして家事を見る能はす初め父商業を營て折閲し尋て長兄病に罹て死し生計頓に困窮に至るや妹すゑと與に交々他家に傭はれ若くは行商を爲り其所得を以て湯藥甘旨を進め夙夜看護に誠を盡す適々人あり結婚を勸むるも孝養の或は衰んことを恐れて肯はす一意承歡二十餘年一日の如し父歿するの後母亦同症に罹り奉養扶掖到らさる所なきも幾もなく死亡せり後ち妻を娶て勵精業に服し一家輯睦郷閭咸な其至行を稱す洵に奇特とす依て爲其賞金三十圓下賜候事

三重縣伊勢國河藝部椋本村駒田多市妹　駒田　すゑ

資性温順幼より父母に孝事し父中風を患へ加ふるに母病蓐にして家事を見る能はす初め父商業を營て折閲し尋て長兄病に罹て死し生計頓に困窮に至るや幼弱の身を以て次兄多市と與に交々他家に傭はれ其所得を以て湯藥甘旨を進め夙夜看護に誠を盡す妙齢に及びて人の嫡嫁を勸むることあるも孝養を缺くを恐れて肯はす一意承歡二十餘年一日の如し父歿するの後母亦同症に罹り奉養扶掖到らさる所なきも幾もなく死亡せり爾來兄を助けて勵精業に服し且つ姉の家亦貧其子女を迎へて之を撫育し友愛の道を竭す等洵に奇特とす依て爲其賞金二十圓下賜候事

●孝子　徳島縣、徳島市、助任町に住める姫田連右衛門が三男に、平吉といへる人あり。家もと、豊なり

しを、父、商業に機を失ひて、産をかたむけ、いと貧しくなれり。平吉十三歳の折(明治廿一年)如何にもして、もとの産に立てなほして、親の心を安めしめむやと思ひ起し、親戚某が許に理髪の術を習ひ、二年がほどに、わざ成りて歸り、我が家にて、開業しけるを、人皆、孝心に感じて、平吉が許にのみ到りて、托しけるに、家業いよ〳〵繁榮して、家、漸、裕かになり、今は、一家心安く日を送るを得るに至りぬれど、近郷みな感せざるはなしといふ。

●又栃木縣、下野國、那須郡、狩野村に、二人の兄弟あり。兄を山野三木太郎とて、ことし十七歳、弟を龜之助とて、十三歳なり。父庄三郎は、四十九歳なるが、年ごろ喘息をわづらひて、家業にえたへず、貧しくて、醫藥の料をも、得んによしなきを、二人は、日毎にかはる〴〵、石油の行商を業とし、兄家に居て、看護すれど、弟出で丶商をはげみ、弟看護をつとむれど、兄また出で丶商を怠らず、共に精勵餘念なしとぞ。まことに感ずべし。

●孝女　東京府下、南葛飾郡一の江村、字鹿骨に、姉は、森田わかとて、ことし三十歳、妹は、うめとて二十二歳なるがあり。父利兵衛は、五十歳なり、母としは、五十一歳にて、一家四人なり。昔は、裕に日を送りけるが、漸、おとろへて、家も貧しくなれるに、一昨年よりは、かて丶、父利兵衛病にかゝりて、鍬鋤をも、とらぬを、母いたく憂ひて、心をいたむるに、姉妹二人ことを慰さめて、われ等、力のかぎりつとめしまりて、昔の家産をとりかへし、御心を安め侍らんといひて、只管、家業をはげみ、朝はとく起き出で、夕は、おそくいねて、怠らざりければ、しるしありて、今は、家も、やう〳〵、榮え行きて、昔のさまにたちかへるべき赴なるに、親子の喜一方ならず。人も、見めで丶、或は、むこに、或は、嫁にと、いひ入るれども、かくては、孝養、おろそかになりぬべしとて、うけひかず、いよ〳〵はげみつとむるに、一

郷吏に感ぜざるはなしといふ。

●又　兵庫縣、宍粟郡、山崎町、内山崎（五十一番屋敷）に住める小倉長次郎が女に、二女かめ（明治十四年三月生）三女あい（明治十六年十月生）の二人あり。父長次郎、商業にかゝづらひて、ことごとく、家産を失ひつるに、去し廿七年九月よりは、母たつ女、水腫病をわづらひて、おきふしもならず。父は、常に外にのみありて、生計にいとまなきを、二人は年まだ幾つにもあらぬに、心をあはせて、母をなぐさめ、藥をすゝめなどしつゝ、看護に怠りなく、暇には、賃仕事などして、家計をたすけ、孝養おろかならざりしが、かひなくて、去し卅一年五月、母はつひにみうせぬ。事、知事に聞えしかど、其の奇特の行をほめて、このほど、褒狀を賜はれり。

●貞婦　同じ兵庫縣、多可郡、中村の内、牧野新町に住める藤井清藏が妻にこま女（萬延元年七月生）といへる女あり。人となり、温良にして、恭謙なり。去し明治廿一年十一月、こゝに嫁げり、その後同廿三年一月の頃より、夫清藏、難病にかゝれるを、只管、懇めつゝ、看護おろそかならず。家ももとより貧しくて、家産とては、たゞ僅に、畑地一畝九歩のみなるに、專、農業をつとめて、生計をはげみ、かゝる中にも、曾、租税の期をあやまちし事なく、十年が間貞操を守りて、一筋なること、恰、一日の如くなるに、こも、事、知事に聞えしかど、物を賜はりて、褒賞せられたり。

●又　栃木縣、芳賀郡、水橋村の人、岡田太吉が妻に、よし女とて、ことし三十歳になれる女あり。夫太吉は眼病をわづらひて、さきに盲目となれるに、よし女、四人の子どもをはぐゝみながら、日夜、賃機をおりて家計をたて、一家六口を　女の手一つに、ひきうけて、こゝに六年が間、事なく、日を送れりといふ。

世にたゞ、夫、または親の力にのみたよりて、今日を過ぐす者、かへり見て、時を惜しみ、力を惜まず、親、夫をも、助けて、いよいよ家を榮えしめよ。

●又、茨城縣、下總の國、結城郡、玉といふ地に、飯山榮女といへる女あり。人となりて、飯山武市が許に嫁げり。後よく夫にしたがひ、又、姑ありけるに、心をつくして事へき。さて、三年ばかりを經て、一女をうめりしが、夫は、ふと病にかゝりて、醫藥、看護、至らぬ隈もなかりしを、しるしなくて、終に身うせぬ、ゑい女なげきかなしみつゝ、この後は、形見の一女をはぐゝみながら、ひたすら、姑に事へしが、三年ばかりの後、姑また、病にかゝり、老の身とて、足腰も、えたゝぬを、看護おこたりなく、家も、漸、貧しくなれるに、女の身ながら、暇には、耕作をはげみ、或は、人に傭はれて、裁縫、洗濯などして、いさゝかの料を得、こを藥の代にあて、又は、嗜むものをかひとゝのへてはすゝめつゝ、二年が間、心をつくして、療養おろそかならざりけるが、かひなくて、終に身うせにき。榮女なげきに、なげきを重ねて、いたく悲しみ、後の祭をも、懇にして、かくことなく、遠近みな、孝貞の行に感ぜざはなしとぞ。(武笠繁子の報による)

●長壽　陸中國、伊具郡、櫻村の人、佐倉藤助、同胞五人なるが、長は、八十九歳になり、次は、八十五歳、次は、八十歳、其の次は、七十六歳、又其の次は、七十三歳になり、共に、身體すこやかにして、常に農事を業とすといふ。●又、德島縣、美馬郡、岩倉村の人、藤田某、こも、同胞四人、長は、女にて、九十一歳をかさね、次は男にて、八十八歳になり、次は、女にて、八十五歳、末も女にて、八十一歳、何れも、身すこやかなりとぞ。●又、兵庫縣、多可郡、黒田庄村に住める村上平兵衛が母せん女は、ことし、八十八歳になれるが、幼より、醫藥を服せしことなく、今もなほ、燈下に裁縫を事とし、子孫六十一人におよび、姪と甥とは數を知らずといふ。●又、東京市、本所區元町廿番地に住める足袋商、中川屋、金子高三郎が祖母は、名を菊女とて、ことし、九十五歳の齢をつみ、日毎に、居て、裁縫を事とするが、其の身體の健

なると、術の巧なるとには、壯者も、及びがたしといふ。

●特行　伊豫國、松山市に、某といへる翁あり。常に、餘資をたくはへおきては、貧しき者どもを救ふをもて、こよなき樂とし、かの白銅貨幣發行の後は、日毎に、一個づゝを銀行に預くるをつねとし、今になほやめずといふ。

●又　德島市、西新町に住みて、煙草をひさぐを業とすなる岩佐利吉が長男に、元藏とて、今茲、十六歲になれるがあり。高等小學校の四年生なり。このほど、病みて死なんとしける時、かねて、貯へおける金十圓を取り出で、悉く之を、日本赤十字社に寄附せりとぞ。

●質素　の風は、誰も、よく守るべきなり。ことに、學校の生徒は、わけて、おろそかに思ふまじきなり。近江國、八幡小學校の校長は、生徒の服裝いよ〳〵華奢に流るゝをうれひ、こと〴〵く、生徒の父兄をよびあつめて、學校は、もとより衣服の美をきそふべき處にあらず、みめかたちのよし惡しは、學問、品行と相關せず、專「恭儉己を持す」の御旨を主とすべきよしを說けりときく。よき事なり。

●敎育概覽　此程、文部省にて發刊せる第二十五年報に依れば、明治三十一年度に、直轄學校の雇外國人は、四十一人、俸給年額は、十三萬六千八百圓にして、前年度に比すれば、三千二百餘圓を增せり。又、圖書館は、官立一、公立九、私立二十一にて、帝國圖書館にて、縱覽を許すべきは、和漢書十三萬千三百八十八冊、洋書三萬二千八百三十一冊、合計十六萬四千二百十九冊なり。又、地方にて、小學敎員撿定に及第せしは、正敎員甲種一千五百二十八人、乙種百七十三人なり。尋常中學、師範、及び、高等女學校敎員撿定に及第せしは、九百七十七人なり。又、師範學校生徒總數は、八千八百三十八人、尋常中學校生徒總數は、五萬二千六百七十一なり。師範は校數四十七、中學は、百十九なり。又、高等女學校は、總數二十六にて、六千七百九十九人の生徒あり。高等學校生徒總數は、四千四

百三十六人、帝國大學生總數は、二千二百五十五人。政治學、法律學、經濟學を敎ふる私立學校は、總數十にして、生徒總數五千百十一人なり。又、學齡兒童百人中、就學者八十人以上、八十五人未滿なるは奈良。七十五人以上、八十人未滿なるは山口、島根、岡山、京都、滋賀、三重。七十人以上七十五人未滿なるは大阪、熊本、福岡、高知、石川、富山、長野、靜岡、神奈川、群馬、宮城。六十五人以上七十人未滿なるは廣島、愛媛、香川、兵庫、福井、岐阜、山梨、千葉、茨城、栃木、山形。六十一人以上六十五人未滿なるは長崎、佐賀、大分、宮崎、鳥取、和歌山、東京、福島、巖手。五十五人以上六十人未滿なるは鹿兒島、德島、埼玉、秋田、青森。五十人以上五十六人未滿なるは新潟。四十五人以上五十人未滿なるは北海道。四十人未滿なるは沖繩なり。

●奇しき竹　備前國、津高郡、宇垣村、字岩子の藪に生ふる竹は、古より弓材となるをもて、名高し。この藪ことごとく、竹の太さ、はた、節の長さ、皆ひとしくして、いさゝかも、差なく、他處に移し植らるれば、生ひたゝずとぞ。奇といふべし。

●忠犬　獸なりとも、みだりに、酷くは、扱ふまじきものぞ。ことに家畜は、みな心ありて、恩を知れば、よくめぐむべし。中にも、犬の義を知りて、忠を盡せること、古より、例すくなからず。かの昔、崇峻天皇の御代に、守屋大連の資人、捕島部萬がかへる白犬、主人はろばされし時、なきがらの首を、くひ持ちて、ふるつかにおきて、そこに飢ゑ死にけるを、天皇きこしめして、いとめづらしき犬なり、後の世に傳へよと宣ひて、墓をつくりて共に葬らしめ給ひし。又、同じ御代に、櫻井の田部連がかへる犬は、己が主人、戰の場に、討死しけるを、其の首と身とを、一つ處にはこびおき、側にふし居て、之を守り、やがて、人、其の屍をおさめたるを見て後、起きて去にしなど、今、思ひ出でらるゝなり。さて、このほど、靜岡市に住める八木定八といへる人の娘に、しげとて、今茲、年二つ

になれるがあり。或る日、路の邊に遊び居たるに、あやまちて、壕の中に、轉び落ちんとしたるを、其の家の飼犬、走り來て、そがそでをくひとめて、危き命を救へりとぞ。犬だに、物をしれるは、かくの如し。言はずとて、一へに侮るまじきなり。

●博士の家訓　理學博士伊藤圭介翁は、もと、尾張の醫家に生れて、ことし齡九十七歳の高きをかさねたり。博學多能のきこゑ高く、最、植物學に長じ、深く、衞生の法に達せり。さて、いまだ、上梓せざる草稿、積みて、一室にみてりといふ。左に掲げたる家訓は、翁が八十三歳の年、元旦に、かきつゞれるを、後、明治廿九年より、年々元旦毎に、復閲増補せるものなりとぞ。

家訓

神を敬し
上を尊み
御布告を守り
親に孝行
主人に忠義正直、師恩を忘れず
人に交るには信實温和にして虚言を云はず
早く起て職業を出精し
家内睦まじく耐忍慈悲を専とし
大酒大食を戒しめ
儉約養生して身體を强壯ならしめ家の繁榮を樂むべし
此戒を毎朝一度宛唱ふべし、是我家の遺訓にして
生涯の祈禱也

●篤行　福島縣、信夫郡の人、久間木とよ女といへるは、今茲、九十歳になれるが、身すこやかなること、壯者も及びがたきばかりにて、常に、機れるをもて、業とせり。このころ、信夫郡に在郷軍人團といふが成れりときゝ、喜びて、大に、之を賛し、五男の甚吾とて、年六十七歳なるを遣はして、金五圓を寄附せり。この甚吾といへる人、また、義心に富み、常に、兄弟子孫一族十七戸をはげまして、家業を勉めしめ、もし、貧

しくて、納税等に苦しむ者などあれど、自、訪ひゆきて、之を代辨する等、なほ、篤行多くして、人、皆感ぜざるはなしといふ。

●義老婦　琉球國、鳴尻郡、摩文仁間切米須村の人、久保田勝榮が祖母某は、今年、八十二歳の齢を重ねたるが、孫勝榮、徴兵適齢にて、入營するを欣び、門出の折、いましめていへらく、兵は國家の柱石なれど、父母妻子を思ふなかり、國家の爲を思ひて、力を盡せよと、懇にをしへて、老をも忘れ、よろこびて、出しやれりといふ。何れもみな、臣民たる本分をわきまへたりといふべし。

●寄書

自由の跛　石南

自由の跛か、跛の自由か、已れこゝを言ひ別けかぬれども、片足短きをからだの跛といひ得べくんど、心の偏跛に成長するを、心の跛ともいひ得べく、隨つて自由の跛といふこともあり得んか。世に名を知られたる人にて、その家庭敎育に自由主義を主張する者を見受くること少からず。そは兒女の欲望言行に向つて一切干渉せず、その求むるものあれど、如何に高價の物にても之を與へ、食を欲すれど、何物にても與へて制せず、金錢も望むまゝに與へて自由に物を買はしめ、貴人に失禮をなすも更に咎めず、他人に如何なる迷惑をかくるも戒むることなし。而して曰はく、英傑の質となさんにはすべて兒童の自由に任ずることそよけれ、幼きより徒に束縛して、禮儀作法の人形となすに及ばずと。その論壯快にして英雄肌の人の耳には、いと面白く聞ゆべく、しかもまた沒すべからざる眞理を含むに相違なし。

何となれど、余りに束縛して敎育するときは、はたらきのつかぬ萎縮的の人間を作るべく、かゝるものは今日以降、生存競爭はげしき世の中にては、迚も役に立つ見込なし、一敗地に塗れて、生涯また立つ能はず、はした無き世の毀譽褒貶を恐れて、正義を行ふ能はず、人の脅迫にあひて、已れの道を守る能はざるが如き人物は主として束縛敎育によりて、生ずる者なるを知らど、斯くの如き方法も、また特功を奏することなきにあらざるべし。

然れどもこれ權道なり、正道にあらず、眞正に敎育の意義に合する者にあらず、たま〳〵善き者の生ずるも、そはこの自由主義以外に、必ず何かのよき者ありたる

に相違なし。試に思はれよ、はしきまゝに金を費さしめて、果して勤儉なる主人主婦を養はるべきか。また飮食物を恣まゝにせしむるとは、衛生上勿論わしきことにして、腹痛を起せど發心して自然に止むべしとは、不親切なる極、時には救ふべからざる病因をなすに至るべし、且つ文明に進むに從ひて、規律正しくする習慣を要するに、この我儘敎育は、到底之と衝突するを免れず。また禮儀作法とても、一時に習はるべき者にあらず、よし一時に習はるべき者とするも、その主腦たる品格は、決して一朝一夕に養ひ得るものにあらず、必ず深く養ふところ無かるべからず。

かつ、兒童が既に言語を覺ゆるときは、明かに社會の仲間入をも、なす者にて、此時よりまた、社會に存する道德の仲間入をもなさしめざるべからず。而して社會は相柳損して、始めて相互の幸福を増すことを得る者なれど、我儘とは相容れず、そもこれ等の人の自由主義といふは全く我儘、放任に外ならず。かく我儘になさしめ、放任したりとて、敎育感化など全くなしと思ふは大なる誤りなり、自由といひ、自然といふ、その名は良しと雖も、苟も兒童に陶冶性の存ずる以上は、惡き感化を受くるか、善き感化を受くるか、何れにしても敎せられずして存ずること無し、故に些しの制裁なき自由の發達、人爲を加へざる自然の發達など、決して得有りべきことならず、これ只假想に畫かるゝのみ。既にさなりとすれど、束縛に失せず、放任に失せざる完全なる主義によりて示導禁遏をなさゞるべからず。

日本にては、いまだ家庭敎育に注意すること淺けれど、東洋流豪傑肌の主人が、學問の生かぢりによりて、かくの如き亂暴なる主義を奉じ、家庭を荒すこと多かるべしと雖も、前にのべたる如きは、實は自由の語のために反つて自由を失ひ、あたら片輪の敎育をなし了るものなれど實に恐るべく戒むべきことにこそ。

●新刊しなさだめ

●安德天皇潜幸遺蹟　一卷　高山昇著

皇典講究所印刷部發行

昔、長門の壇の浦にて、源平の戰の時、平氏敗れて、養和のみかどは、入水せさせ給ひきと、百錬抄、東鑑、平家物語、源平盛衰記等、皆、かきつたへ、又、或は、さにはあらで、潜幸せさせ給ひぬといへる說もありて、何れとも、分けかねしを、著者は、こを委しく考へ定め、なほ、みづから、天皇の潜幸せさせ給へりといひ傳ふる對馬の國に渡りて、其の御舊蹟の處々のありかたちを目のあたりに見奉り、又、種

種の事實をも、探りて、更に、之を古文書、系譜、傳書等に合せ考へて、この一卷を著せるなり。まことに、考へられたること、然るべし。げにまめにも、ものせられたることよ。凡、史に志あらんものは、必よみて、すぎし昔の御ありさまをしぬび奉り、なほ、其のおほかの、未、明らかならぬふしぐくをも、考へあかし奉るべきになん。

●やまとにしき　一卷　石榑千亦編輯　こゝろの花發行所發行

こは、歌集なり。今の御代のありとある歌どもをとりあつめて、佐々木信綱ぬしが選まれたるなり。四季の歌、くさぐくの歌、合せて、千餘首。めでたきも多かるが中には、歌くづなきにしもあらず。さはいへど編者と、選者との勞おもひやりつべし。たゞをしきは、短歌のみにて、長歌、其の他のかげたるなり。こは、編者のおこたりか、又は、世に歌の道のすたれたるが故か。はた、他に故ありてか。しひて責むべきには、あらざめれど、とまれ、かくまれ、あたらしき事なり。又、一つには、千亦ぬしが書ける序に、「三千歳のわが皇國には、三千歳のわが歌あり」といへる、いさゝか心得ず。我が皇國、何ぞ、こゝに三千年と限るべけん。神武天皇御即位の御時よりは、およそ三千歳にちかけれど、我が皇國は、この時にはじまれるにあらず。又、歌よりいはんも、たゞに三十一文字のみにてすら、素戔男命に、はじまれるにあらずや。この三千年とかゝれたるは、必、文字の誤植なるべし。聊、つみ出でゝ、編者の猛省とこふになん。こは、やすからぬことなれいぞふなり。





敎の庭

一月廿日兼題　都雪

天

たましきの都なれはやふるゆきも
　ひかりてりそふ心地こそすれ　越中國東水橋　吉岡歌子

地

馬くるましけきみやこの大路さへ
　雪のあしたはしつけかりけり　肥後國菊池郡城北村　小森田輝子

人

人しけきみやこ大路はふるゆきを
　馬にくるまにつみてこそゆけ　東京牛込區北山伏町　高島壽子

人

越のやまにつもるときゝし白雪を
　けさはみやこに花とみるかな　東京淺草區新福井町二　吾妻ちか子

秀逸　（十首）

こと繁きみやこ大路もゆきふりし
　あしたはかりはしつけかり鳬　丹波　羽室象子

宮人はをすかゝけてもなかむらん
　今朝めつらしき雪のはつはな　肥後　平山政子

たまさかにふれる都のしらゆきは
　花にもまさるなかめなりけり　美作　楢崎縫子

武藏野のむかし覺えてはてもなく
　みやこ大路にゆきふりにけり　遠江　岡部八代子

白雪にちまたのちりはかくされて
　みやこれはちのけさの淸けさ　大阪　山崎しつ子

人しけきみやこ大路もしかすかに
　雪ふるけさはしつけかりけり　東京　諸井久良子

うま車しけきみやこのれはちさへ
　雪のゆふへはしつけかりけり　韓國　新浦美津子

天つ日のひかりに近きみやこにも
　とよとししるく雪ぞつもれる　越後　外川とい子

しかすかに都れはちのゆきかひも
　しはしたえたるけさの雪かな　伊勢　坂口ふく子

ふりしける雪のあしたに見渡せは
　けにたましきのみやこなり鳬　甲斐　名取正代子

（以下原稿到順着）

雪のはなにほひまはゆくうちひさす
　みやこほお路にふりつもりけり　佐々小季子

八千代田のみやこの空はふりつもる
　ゆきのけしきもおもしろきかな　佐々有郷子

天のしたゆたけきさしのしろきかな
　みやこおほ路もゆきのはなさく　坂本涯多歌子

冬のひもに匂へるはなのさくらたは
　雪のあしたの名にこそありけれ　　森　やす子

馬くるましけくゆきかふみやこちは
　ふりしくゆきもつもる間そなき　　浦井豐子

うち日さすみやこ大路のはつゆきに
　ゆき見くるまのにきはしきかな　　住山幾子

人あしのしけきみやこはやう／＼に
　つもりしゆきも消ゐ果てにけり　　近藤春子

にきはしきみやこのまちも白たへに
　いつのひさまにゆきつもりけん　　橋本さよ子

雪ふれはこゝにかしこにうち出てゝ
　さむさもしらぬみやこひさかな　　志茂多廣子

人しけきみやこおほちもふりしきる
　ゆきにゆきゝもしつかなりけり　　徳永萬壽子

うち日さすみやこの春のにしきさは
　今朝ないふらんゆきのあけほの　　德永廣子

晝さしのしろしさこそはみゐにけれ
　おほうちやまにつもるしらゆき　　澤田春子

朝日さすみやこにつもるしらゆきは
　ゆたけきさしのしろしなるらん　　吹田たけ子

時ならぬはなのみやこさなりにけり
　おほちにつもるけさのみゆきに　　田代艷子

おほ君もみそなはすらんみやこ路に
　さよさし見せてふれるみゆきを　　田代綾子

にきはしきみやこも今朝は靜かにて
　ゆきおもしろくつもりぬるかな　　吉富彦子

ゆたかなる御代のすかたや内日さす
　みやこおほ路のゆきのあけほの　　村上昌子

きのふまてはつかにみゐし足からの
　ゆきはみやこにふりてきにけり　　松永信子

花さしもめてはやすらんみやこひさ
　けさめつらしくふれるしらゆき　　尾立富子

をすまきて大うちひさはなかむらん
　はなさちりくるけさのしらゆき　　西内篤子

ふしかれのものさ思ひししらゆきの
　けさはみやこにふりつもりけり　　尾立英子

かきくらし雪はふれさもみやこ路は
　人のゆきゝのしけくもあるかな　　根岸豊子

もゝしきのおほ宮ひさもみきくみて
　めて見ますらむけさのはつゆき　　西川順子

立ちならふ幹もうつめてはてもなき
　みやこおほちのけさのしらゆさ　　中山さみ子

あらたまの年のはしめにこゝの重の
　みやにゆたけくつもるゆきかな　　小野けさじ子

やまさほきみやこ大路にめつらしく
　けさしらゆきのふりつもるかな　　永井さい子

きのふまてさほ山にこそなかめしに
　みやこ大路ちのけさのしらゆき　　高橋吟子

富士の根にめなれし雪のつもりきて
　けふこゝのへに見るそうれしき　　大藤祺子

山さとはいかにわふらんみやひさの
　うたけしてみるけふのしらゆき　　横山柳子

うつもれて雪のあしたはみやこへも
　むかしにかへるむさし野のはら　　杉山絲子

きゐぬまさ誰もこゝろにいそくらむ
　ゆきのくるまのきほふみやこち　　道廣八重子

朝日かけちかきみやこはきゐぬまさ
　ゆき見くるまのにきはしきかな　　金谷仁惠子

ちる雪ははなにまかひてきのふけふ
　みやこのそらもはれまなきかな　中村壽枝子

ふる雪にみやこおほちはしろかれの
　たからをつみしこゝちこそすれ　竹内ひさ子

けさみれはやなきさくらもしら雪の
　はれのみやこさなりにけるかな　賀茂鉦子

ちむしさもいはてそいそくすみた川
　あささきそめしゆきのはれみに　村田多豆子

雪みむさすみたつゝみにいそくなり
　むつのはなさくけさのけしきを　山口千枝子

さよさしのしろしもみねて君か世の
　ちよ田のみやにつもるしらゆき　加藤加壽子

あさ日にはいておくれしさすみた川
　ゆき見にいそくうまくるまかな　服部まむ子

さもしひの光りつよさにみやこ路は
　たからのいしさ見ゆるしらゆき　久米貞子

ひさすちのみつをのこして加茂川の
　にしもひかしもゆきふりにけり　淺井靜子

山の端はかすみそめてもみやこには
　またしらゆきのはなそちりける　四條駒子

朝またきかよへるひさのあさもなし
　つもるまゝなる今朝のしらゆき　横手ふく子

うちわたすむかふの岡はかせさねて
　木々のこすゑにつもるしらゆき　横手こう子

ふる雪にみやこおほちはうつもれて
　木々のこすゑにはなそ咲きける　横手たつ子

いつしかもしつみはてけり人しけき
　みやこおほちのゆきにうもれて　田中廣子

朝ほらけ行きかふそてにうち散りて
　みやこもふかくつもるしらゆき　大谷友子

きのふまで思はさりしをけさみれは
　みやこおほちにゆきはふりけり　川西孝子

人しけきみやこもけふはゆきふりて
　やまささにすむこゝちこそすれ　乾嘉代子

をくるまの行きかふ音もたねはてゝ
　みやこおほ路にゆきはふりけり　佐々敏子

小原女かゝづくゝろ木もしろたへに
　みやこおほ路はゆきふりにけり　吉田季子

みわたせは軒つられたるみやこちも
　ゆきにはてなき野へさなりけり　碓井信子

ふる雪にみやこちふかくつもれるは
　さしのみつぎのしろしなりけり　碓井武子

ふりそめししのふか岡のあわゆきは
　うめのはなかさまかひつるかな　今井よし子

みやこ路もゆきゝの人のあしたねて
　なかめたのしくつもるしらゆき　松野以代子

みやこ路につもれる雪はきねぬれさ
　またなかめあるにはのしらゆき　望月徳子

わが宿にあわゆきふれりおほみやの
　のきのくたけやちりかゝるらむ　籾山つう子

今朝見れはたふさかりけり大うちの
　やまよりつゝくにはのしらゆき　笹子茂子

玉しくさ見る間ははつかちりひちさ
　ふみけたれけりみやこ路のゆき　敷島花子

うまくるましけきみやこの大路には
　たまりかれたりけさのしらゆき　小番多美子

みやこたに雪ふりつもるこのころは
　こし路のやまそおもひやらるゝ　齋藤かつ子

みやこもふかくつもるしらゆき

大比叡のみねをあらしのこえにけん
なゝめにふりぬみやこ路のゆき　齋藤よし子

すゑ遠くなかめおよはぬみやこちに
いやしつけくもふれるゆきかな　新井登代子

おもかけをこすゑに見せてさき匂ふ
はなのみやこにゆきのふるらん　河村君子

ゆきふれはおほちは人のさよむなり
うへのにやゆくあさくさやさふ　谷口婦佐子

消えぬ間と雪見くるまの行きかひに
みやこおほちもせまきあさかな　高橋ちん子

さきならぬみやこの花を見るはかり
おほちのなみきゆきふりにけり　伊勢うた子

降る雪のたまるまもなくきえにけり
見るひさしけきみやこおほちは　山中しげ子

さ衣のをつくはおろしさむく〳〵て
みやこのおほちゆきふりにけり　寺館よし子

白ゆきの日かすつもれは富士つくは
みやこおほちもおなしいろなる　馬場みち子

みやこ路に牽きくるまのあさたにも
わかぬはかりにふれるゆきかな　武谷長榮子

ましはかる小野のほそ道いかならん
みやこもゆきさこもりかちなる　長澤いゑ子

ゆきゝさへひさし往來くなりにけり
ゆきそみやこのはなと見ゆれは　長澤ひて子

はつ雪をみやこのそらにみわたせは
いさもゆかしきこゝちこそすれ　宮内信子

みやこ路のかきれも軒もうもれけり
しつかにつもる夜半のみゆきに　廣田里美子

さゝさしのしるしにさてやはつ春に　濱野時子

きえぬまにいさ窓あけてなかめてむ
つもりもあへぬみやこちのゆき　曲田常世子

つさひ來てさつ國ひさもあふくらし
おほうちやまのゆきのゆふはえ　古瀬しん子

ふりつもる雪にゆきゝもさたえけり
にきはふはなのみやこ大　路も　池澤天與子

みやこひさいざやいてみよ上野なる
はなのしらゆききえやらぬまに　黒木信子

こささらに花のみやこさいふへきは
しらゆきふれるあしたなりける　青木たま子

白ゆきのつもるを見れはふゆもなほ
みやこははなのさかりなりけり　野中あさ子

うちつさふゆき見くるまにうへの山
めせ〳〵とよふこゑもきえつゝ　森こさ子

白かれのしろかさはかりまかひけり
ちよたのみやのゆきのあけほの　香澄梅代子

ゆたかなるさしのはじめさみやこ人
ゆきかふそてにゆきそかゝれる　關口光子

ゆきかよふくるまも馬もなかりけり
みやこおほちはゆきにうもれて　藤原菫子

見し春のやなきさくらもわすれさ
ゆきもみやこの花にそありける　菊池さた子

ひさあしのしけき大路もふるゆきに
しはしさたえて見ゆる今朝かな　羽根田米子

みやごへのあたりのさかにふる雪は
ちりくるはなのこゝろこそすれ　萩原章子

さよさしのしるしもみえてふり積る
みやこおほちのけさのしらゆき　中桐杏子

明けぬれとゆきかふ人のあともなし　みやこおほちのゆきのあけほの　舘脇ます子

降る雪にひとのゆきゝもうちたえて　みやこおほちはしつかなりけり　諸井晧子

九重やたまのみそのをまはゆくも　ふりきよめたるけさのしらゆき　池谷富子

行きかよふくるまの跡もみえぬまて　みやこおほちにふれるしらゆき　杉浦糸子

うちあふくおほうち山にふりつもり　ゆたけきみよをみするゆきかな　小曾根しう子

やまかけは道もなきまてつもる世も　みやこおほちはゆきのはつはな　佐々木はつ子

大みよの千代田のまつにおしなへて　つもるもきよしはなのしらゆき　前田たけ子

さわかしきみやこ大路をよそにして　すたのかはへにゆきをみるかな　川上喜代子

静けさはみやこのうちとおもほえす　しのふかをかのゆきのあけほの　川上博子

うちわたすふしの高根にみしゆきも　けふはみやこにふりしきるなり　坂田清子

玉しきのみやこおほちにふるゆきは　はなにもましてめてたかりけり　八木沼里子

こゝろしてふみならしそみやこ人　けさめつらしくふれるはつゆき　外川登子

玉しきのみやこおほちもわかぬまて　ふりつもりたる今朝のしらゆき　品川英子

世の塵もうもれてたゝぬみやこちは　ゆきのけしきにしくものそなき　石川類子

雪ふとちきのふもけふもあすかやま　石川樂子

ゆきのけしきにうかれあそひつ

はなよりもあたりまはゆく見ゆる哉　ゆきのみやことひとやいふらむ　石川久子

ゆきて見むさくらか岡のはなよりも　きこさにゆきのつもるなかめを　石川なゑ子

おしなへて雪は降れともことさらに　みやこおほちはおもしろきかな　井川澄子

いますきしくるまの跡も見ねぬまて　みやこおほちもゆきのつもれり　山根久子

ふりつもる雪のあしたに見わたせは　ふゆさへはなのみやこなりけり　仲田恵以子

こゝのへのみやこひろしと思へとも　ゆきにはけさはうつもれにけり　仲田業子

ことしけきみやこ大ちもみゆきふる　けさはちまたのしつかなるかな　佐野幾代子

行きかよふ人かけたえてしらゆきに　みやこおほちはうつもれにけり　高橋照子

絶えまなきくるまの跡も消ゆるまて　みやこおほちにつもるゆきかな　四　艶子

こゝのへの松のほつえにふるゆきは　いまひとしほのひかりそひけり　高橋信子

宮ひともたまのうてなにをすまきて　ゆたかにつもるゆきをめつらむ　松尾節子

珍らしくふれるしらゆきみやこひと　こゝろしてふめあすは消えんに　榊田新子

うち日さすみやこ大路もけさはまた　はつゆきしろしふむあともなく　竹村竹里子

みやこたにあとなきまてにふる雪の　みやまやいかにうつもれにけん　椎野ぬき子

ゆきかよふ人のたもとにふりつみて
みやこおほちのゆきそはにある　春山花子

おほちゆくゆき見くるまは天きらひ
ふりにふるともいさはさりけり　西村草子

さきにほふ花こそみれめつらしく
みやこのそらにふれるしらゆき　野口三子

うち日さすみやこ大ちはふりね消て
ゆきもふかくはつもらさりけり　森ゆき子

さたねせぬみやこ大路もしかすかに
ゆきふるくれそさひしかりける　林二葉子

しろたへのゆきの花にもみやこちは
もの見くるまの[illegible]にきはふ　坂田喜美子

見渡せはのきもいらかもうつもれて
屋根よりやれにつゝくしらゆき　綿野りき子

けさみれはひさよのほさに雪ふりて
はなのみやこへはなさきにける　中村さき子

きてもみよ花よりもなほまさりけり
みやこおほちのゆきのけしきを　井上まさ子

さきならぬはなさきたりさみやこ人
めつるこすゑにゆきはちるなり　菊池一子

つきはなのみやこ大路もしろたへに
けさめつらしくふれるゆきかな　村田たけ子

雲はれてみやこのゆきはひさしほに
ふるささひさはなになをなかめん　齋藤俊子

ちりふかきみやこ大路もゆきの日は
ひなにもまさるなかめなりけり　青木春子

ゆきかひのしけきおほちのひさ跡を
しはしうつめしはつみゆきかな　服部香津美子

名にしおふ花のみやこもうつもれて
なかめさひしきゆきのあけほの　香川ちゑ子

馬くるまゆきかひしけきみやこには
いらかのみにそゆきはつもれる　木下つれ子

けさ見れはいよ〳〵白くつもりけり
なかめもきよきひぐらしのささ　吉江いく子

ゆきかひのしけきおほちも人たねて
あさたにみねぬ今朝のはつゆき　米窪たい子

なくるまのさよみもきかす雪の朝に
みやこおほちもさひしかりけり　都水春子

みやこ人ゆきみる今朝はこゝのへの
みにはにきみもそなはすらむ　目黒咲子

けさみれは玉のみやことなりにけり
ならふいらかにゆきのつもりて　日吉あさ子

たましきの都おほちに一さしほの
ひかりをそふるけさのしらゆき　降田槇子

大みやの御にはの木々にふるゆきは
はなのみやこのはなかさそ見る　美濃君子

めさましてきけはまくらに音たかし
ゆきこそつもれみやこおほちに　白石貞尾子

ふりつもるゆきにちまたも人たねて
みやこもひなのこゝちこそすれ　白石藤子

きのふけふみやこの空はかきくもり
みちしろたへにふれるしらゆき　篠田うの子

うつしゑのふても及はしたましきの
みやこ大ちのけさのはつゆき　魚住愛子

めつらしくつもれる雪をみつるかな
あまつひかけのちかきみやこに　南こづ子

かすか野は眞白となりてあをによし
奈良のみやこにゆきは降りつゝ　櫛田秀子

みやこにはものめつらしくふる雪を
　さきならぬ花とあやまたれけり　山本孝子

さくらたのみほりのまつの風たえて
　ふかくもつもる今朝のゆきかな　鈴木やい子

見せはやなゐなかわたりの人にけさ
　みやこおほ路のゆきのけしきを　井上まさ子

白かれをしきわたすかと見ゆるまて
　みやこおほちにふれるゆきかな　戸塚鐵子

にきはしきみやこおほちもふる雪に
　ゆきかふひとのあともたえけり　御味花子

たかきやもひろき大路もおしなへて
　ましろにかはるゆきのあさかな　御味元以子

みやこ路はけさめつらしくふる雪に
　すみだのあたりのにぎはしき哉　本庄志雅子

きのふかも富士に筑波に見しゆきの
　今日はみやこにふりつもりつゝ　高砂き代子

こゝの重のはなのみやこもふる雪に
　まことや花のみやことはなる　高砂菊代子

白ゆきのふりしあしたはすみ田かは
　ゆき見くるまのちまたなりけり　高砂武子

ふる雪もつもらさりけりひさあしの
　しけきちまたのみやこおほちは　高砂秀子

馬くるましけきちまたのにきはひて
　ゆきはふれともつむひまそなき　渡邊しけ子

ふり積るけさのみゆきのしつけさに
　みやこもさとのこゝちこそすれ　稻田銀子

しら雪の間なくふれともみやこちは
　しけきゆきゝにみちはたえせず　河田いし子

一月廿日兼題　鶯を待つ

天

富山縣高岡市　鶴見擧子

軒端の梅も折しりがほに綻びそめて、隙もる風にえならぬ香のにほひくれど、なほ春の心地のせられぬは、かのなつかしき初音のそはぬ故なるべしと、朝夕ひたふるに待ちわたれど、たえてれとつれぬは、まだ古巣の雪の消えやらぬにやなど思ひやりて、

軒端なる梅のはつ花さきにけり
　いさとく來なけ谷のうぐひす

地

羽後國平鹿郡淺舞町　谷口婦佐子

新玉の年たちかへる朝より、朝な夕なにまてとも〳〵、いまだ初音の聞えぬぞ、いと心もとなき。庭の垪の梅も、はや咲き初めて、かをりみちぬるを、などて、いまだ訪ひ來さるらむ。その谷の雪の、まだ深くて、世の春を知らすやあるらん。あはれ、春風よ、この花の香をさそひ行きて、かの鶯を驚かしてよ。

人

甲府市山田町　名取正代子

春立ちしより、何くれとまちにまたるゝ物の多かる中にも、早咲きの梅の、とくにほひそめつるに、いかで〳〵と、思はるゝは、鶯の初音になんありける。さても、都にすみなれて、物みなは時にれくれぬならひなめるを、鶯の初音ばかりは、いつも〳〵山里にれくれがちにて、かうもまちわたらるゝぞ、いと〳〵口をし

き限りなる。さりとて、人傳に聞かんは猶わづらはしければ、いでや、よき風の便りもあらむ、鶯さそふしるべに、此梅か香たぐへやりて、まだしきかたことをだにも、とくきかんとまちいそがるゝぞ、谷の鶯心あらば、とく我宿に初音きかせてよ、春きぬとうたひてよ、さらぬかぎりは、春も春なる心地こそせね。

（以下原稿到着順）

中山さみ子

風おたやかなる此春に、かをり床しき櫻の花も、ほこり顔に咲き出でたるを、いさゞなつかしく、聞かまほしきは鶯の初音にこそ。今日はかなたに鳴かなむ、今日はこなたに來鳴くならむさ、日毎〳〵に待ちわぶれば、おそしさ恐れてなむ。ふる巢を出でし鶯の、野邊に來鳴く時のきなば、心合の友さち袖を連れて、花にあこかれ鳥にたはむれてんさ、今よりいさ樂しうなん。ひさ日も早く初音を聞きなば、一しほ心もうき立ちて、霞たな引く春の日も、又興をそへなんさ思へば、いさゞ獨待たれてなん。

佐々有鄰子

庭はみな竹のみ植ゑ生して、風聲はいぎたなきねふりをさまし、兩音はのどけき春花のひらくをいざなふなど、さり〳〵なるに、ひさり朝夕はしゐして待ちかれつるひさつの動物ありさいへばなにぞさ、かたへの友達が、文机にむかひ居て問ひかけぬ、其ものはいかなるものか、貧寠あてて見たまへさいへども、答へなければ、一首の歌をよみてしめしぬ、

朝な夕な待つ來山の鶯を
　のきばにしめてきくよしもかな

田中繁子

なつかしの鶯、汝が友は早やこゞゑましろに咲きいでて、待ちわび顔なるぞよ。さく〳〵わたり來よかし、そちが友のあるじの我にも、いざ一きかせよかしな。

乾嘉代子

「春來ぬさ人はつくれど鶯の鳴かぬかぎりはあらじさそ思ふ」さか、げに匂ひ鳥の聲聞かぬうちは、春つげ草のかぐはしき香をはなつも、「なにさなう物たらぬ思ひのするなり。早く來鳴けよ、谷の鶯、香り床しき梅が枝に、ほうほけきやうの一聲を、うたへやうたへ森の鶯。

宮坂順子

待たるゝものはさいひけむ鳥の聲は、げにさるものにて、まれびいづれば、ゆかしさのいやますその音かな、「平らけく治る御代の年立ちかへり、去歳の春きゝたるまゝのけふさなりては、また更にあたらしき心地のして、今いくかあらばなんご、あてなきあてのひさ日も早かれさのみ思ひつゞくるは、あやなきふしにや、まだ信濃路は雪深く、ましろなる山に、霞の立ちぬべしさもおほねず、池の水も厚く氷りて、谷間のうきれおもひしらるゝに、春立つさいふあしたよりは、日影もおのづからのごかにて、數ならぬ垣根の内だに、雪間の草若やかに色つきそめ、うなゐ等がよりつさひて、かしましく打興ずるさま、一しほ人の心をのばへんばかりなれば、ひさり庭におりゆきて、笑むべくも見ねぬ梅が枝の下に、去歳を思ひおこしては、さくきなげきなけ、我さも、羽風に花を散らすさも、なんご、おだまきのくりかへしつゝ、げにまたるゝは鶯の聲かな。あな〳〵。

和田けい子

春はさまざまなかしき中に、鶯こそこよなきものにはあなれ。そが初音のうらはづかしげなるは、なか〳〵にめづらしう、興あるものさて、春毎にうちまたれつ。見渡せば、四方の景色の、楽さ乍ら朧にかすみ初めければ、例の一聲、はやもなきいづべきを、など今年はさ、ひたぶるにうち待たるゝよ。まして、まがきの内には、早梅の三つ四つほころびそめしものを、得ならぬ香をさめて、雪のふる巢をたちもいでなば、哀れあすあさてはなきもぞいでんなど、思ひ樂みて、徒に空しき日をあまたうち過すに、梅の南枝いよ〳〵さき、霞ます〳〵深うなりもてゆけば、もどかしさに、餘所な

お里なまづ訪ふかさ、いさくやしうわびしさの極みなりけり、

待ちこがれ空しく過す悲しさな
知せまほしき谷のうぐひす

など、短冊にものして、梅の梢につけたれご、心やろべくもあらず。

河原芳子

ほつ／＼さほころび初めし庭の梅の花は、いつにかはらぬ床しきかなりなるに、そな知らずして、なほ谷間に冬籠りやしつらむ、鶯は今に一聲も來鳴かず、春さはいへご、のこりの寒さにおぢてにや、あるは谷間の雪の深きゆゑにや、梅はあれご、何さなく物たらぬ心地ぞせらるゝ。

新井登代子

春にさきだつ年のはじめさて、四方山にいまだかすみこそたゝれ、大御代のめぐみのつゆうけて、梅の花のわらひそめたる、こゝろありげにて、いさうれしうなむ。やよやうぐひす、さきはさむく、風はさねわたるさも、雪にうもれぬ梅が香は、ものたらぬ我宿の軒のはにもみち／＼たるな、いかておくれてあるへしやは。

春またで梅さくさしのはじめには
うぐひすのれぞまづまたれける

河村君子

峰につもりし雪は、まだふる年のまゝなるに、さすがに庭の梅はほころびそめぬ、谷より出づる聲なくさも、時の來たれるな知るならん、されご、なかぬかぎりはものたらぬ心地ぞせらるゝ。など、今年は去歳よりもおそき、ましてわが宿は、憂き世はなれたる山里にしあれは、あだしものこそおそかれ、鶯の聲のみはいささ聞ゆるへきな、まだ雪はふるすにつもりて、涙の氷れるにや、いさおぼつかなし、梅が香な風のたよりにたぐへて、さくしらさまほしうて、

春きぬさふるすたつれて鶯に
たよりなつけよ梅の下風

山崎しつ子

春立つまゝに、木々の梢もやう／＼けしきたちたるがなかに、まご近き梅の、かつ／＼咲きいでて、ふくさしもなき春風の、なり／＼ねならぬ香な送りくるは、いひしらずなかし、さればにや、年毎に、はやうより鶯もこの梢なたづれきて、木傳ひつゝ初聲もらすなるな、ことしはなにさて谷の戸ないづるこさのおそきか、まだ一聲もきこねれば、梅もたねなくおもふらんかしさ、事たらぬ心地のせられて、ひたすらまたるゝものは、鶯のこゑにこそ。

濱野さき子

廣からぬ庭にあれご、好むかまゝに、うゑたてし竹木は、折にあひて花鳥のなぐささなりし事もありき、中にも千代のかさしさ培ひし梅は、數多けれご、しろばかりにて、鶯のなくなり／＼に、あかぬ心のするよしな、友なる人のきゝさりて、過ぎにし年、うす紅梅なる老木の一本送りこされて、今更に心の底のくみやられてゆかしかりけり、時のよかりしにや、いさよく根さしぬ、ざれご、此春はさ心せしも、いさましく若枝のさしわたりて、蕾も數つき、きのふけふの寒さもよそにみて、二つ三つほゝゑみたる、うれしさいはんかたなしや、さるにても、此心竊しなしるやしらずや、鶯はまだ谷の戸さへもひらかぬ事よ、さきにほふ梅のみか、窓の中なるおのれさへ、初音する日のまたれ／＼て。

矢部すみ子

冬過ぎて今や春の初さなれり、皆々笑ましげに打集ふ春さなれり、早や咲きの梅は、白赤さほころびあかるゝ麗はしさ、ねも云はれぬ風情なるが。昔語の云ふ如く、梅に鷲さのたさへにて、多く滿開さいへごも、鷲なければなんさなく淋びしく、其上、鷲は翼さ云ひ、又毛色さ云ひ、猶聲は谷川の流れの如く、今や咲き匂ふ梅が枝にさごまり、いさきよく、法け經の一聲なさへつる時は、如何なる心勞なもうちわするゝ事往々あり、今此の咲き匂ふ梅さ、愛らしき鷲さ一對せば、いかなる事なもうちわするるな、なしい哉、梅は匂へごも鷲は來らず、鷲來らずんば愛らしき梅も興なく、早や早や來れ、鷲よ、早や／＼來れ、鷲よ。

佐野滿代子

明くる一夜もなしと思ひし去年の暮にひきかへ、昨日今日は、行きては又かへらぬいと尊き光陰と知りながら、なほ早かれされがふは、何ゆゑならんと、我ながら實にあやしくて、おほへす障子ひきあけ、庭の面を打見やれは、いにし手植ゑおきし一本の紅梅の梢は雪にうもれながらも、春待かれたる色に出でたり、これなん我と心を同しうして、一日も早く谷の戸出づる鶯の初音のきかまほしきなりける、心みに谷の古すをたづれんか、また雪深くして行く事能はす、さても待たるゝ者は鶯の初音にこそ。

横手こう子

新玉の年立ちかへりぬれは、昨日とかはりて空の氣色もいとうらゝかなるに、去年の殘雪もやゝ消ゆ初めて、いつしか霞もたなびきて庭の紅梅のけしきばみ山には樹の芽野には若草萠ゆ出てゝ、げに長閑なる日和とはなりぬ、都もひなも、皆共々に車をはせ。又は杖を曳きて、あなたこなたにたゞよふ時になりぬ。よし此の時、谷より音づるゝ鶯も、枝より枝にり、人の心を迷はすことあらば、又一入の慰みぞかし、よくこの癖をさとりてよ。

春山花子

北風なほさむく吹きすさび、雪さへをりをりはふりくめれど、さすがに梅のほゝゑみたるぞうれしく、谷より出づる聲なくとも、春の心地せらるかし、されど、なかぬ限はいとものたらぬ思ひせらるゝを、鶯はいかにしけむ、いまだ氷れる涙のとけぬにや、はた谷の戸の開けざるにや。

西村章子

文机の許に、吹き來る風のあやしくかぐはしければ、竹のあみ戸おしやりて立ちいづるに、空はのどかにうち霞みて、垣根の雪は僅に消ゆ殘りたれど、軒ばの梅の、はや氣色ばみて、こゝかしこ綻びたるに、世は春なれやと見れど、鳴かぬ限りはさぞ思はるゝ、枝ざしのかごかごしきにも、しろき匂ひの、いかで鶯をさそはざらん、はたわが宿をして見所なしとやすぎぬらん、かのなにがしのあやしき家の、見所もなき梅の木などには、花やかにぞなくといひけんも、折にあひていとたのまるれど、來なかぬうちは、いかゞあらん、おほつかなくて。

横山柳子

南よりさきはしむてふ諺もしろく、のき近き紅梅のほころひそめて、ひと日ひと日に匂ひそはり行くに、としごとなれきつるうくひすの、初音さへもらさぬは、まだ谷の戸をいでぬにや、はたまたいづくにかやさをうつしけむ、汝のために、寒さもいとはす培養ひ、なつの日もやしなひたてしゝろし見ゆて、うつくしうにほひつゝ、汝かやさりにとてさきいてにし梅の、人まちかほなるも、たれをかはまつへき。さるを、けふまても一こゑたに音つれぬつれなさよ、われもこゝろいられせらるゝを、まいて汝かためににほひ初めてし梅の、いかにほいなくおもひやせん、とく音づれて、わかうれたきこゝろをみたせかし、うつくしき梅か枝に匂をそへよかしと、せちにまちわぶれど、なほそのかひなしや。

香川頴子

初春の空うらうらと霞みわたり、吹き入る風の何となう打薫るまゝに、窓おし明けて見出せば、軒の梅ののどかに吹き出でたる、うれしさも嬉しきものから、例は鶯のこゑに始て知るならひなるを、いつまで冬籠りせるにかあらん、らうたき音のせぬは、いと物足らぬ心地そする、あはれとく知らせてしがな。風よ、このにならぬ香を吹き傳へて、とく谷の戸出でぬ鶯を誘ひ出してよかし。

梅か香を風のたよりにしるならは
　　とくとく來なけ谷のうくひす

藤田ます子

遠方の山々うちかすみ、門の小川の笑ふとき、園生の梅のほゝゑむを、少女は見つゝ云ひけらく、かをりゆかしき梅の花、なにをゑむらむうれしげに、よべの嵐をやはらげし天つ日かげのめぐみにか、むすべる氷ふきとさしやさしき東風のなさけにか、あらすと梅は聲たかく、朝

熊おろしあれすさみ、いさご吹きまく雪の日も、たゝく霰の音たかく、筧の水の氷る夜も、忍びたへにし我が操、鶯ならで誰か知る、來なけ鶯、やよきなけ、谷の古巣をたちいでゝ。千代の初音をうたへかし。

羽田夏子

うすがすみ眉の遠山うちこえて、めぐみあまねき春や來し、あわ雪のふるやの軒の梅がえも、南の方ゆさきそめぬ、來なけ鶯、やよきなけ、去年の古巣をたちいでゝ、初音ゆかしく音づれよ、なかぬかぎりはさらじさぞ、なれを忍ぶの人多き、はやこよ鶯、來なけ鶯、谷の戸ぼその氷れるか。

山崎美那子

古歌に、「あら玉の年立ちかへるあしたより待たるゝ物は鶯の聲」さ讀まれしが、今や早や新しき年立ち歸りて、のごけき春は來りぬ、一夜吹きすさひし風もなぎ、降りしきりし雨もやみければ、窓の戸推し開けて見出せば。軒端の梅花、春雨に咲き初めぬ、門邊の柳吹くさもなき風に、名殘の雨を拂ふなさ、いさ閑けきに、鶯の來らぬは、まだ知らざるにや、さらば、此方より鶯の初音を聲かんさて、霞ならねども、そゞろ浮き立ちて、心ある友たちをそゝのかし、語らひ合ひて、靜々さ行くは何處さ定めねど、足の歩のあゆみにまかせて、行けども鶯の聲は聞えず、妻こふる雉子の、あなた此方に、のし羽打ちつゝなきしきり、名もえ知らぬ白鳥の、己が樣々歌ひ囀るのみ、嗚呼美しき鶯は聲の爲に苦められて、世に合ふことを得ざるさは、さても浮世は儘ならぬかな。

目黒咲子

新たなる年を迎へて、只同じよろこびの詞繰りかへしつゝ暮らしぬる睦月も、夢の間に過ぎて、はや新暦は如月を迎れるに、今更驚かれぬるもおぞましや、されど、眞の春の姿は、此頃よりぞあらはれける。昨日今日、野山も里も、初霞棚引き渡り、むら消えの雪間より、萌え出でし若菜も見えつ、我宿の垣根の梅は、今を盛りさ匂へるに、うぐひすのみは如何にしけむ、まだ音づれぬぞ、もの足らぬ心地する。去年の日記さうでゝ見るに、初音きゝしは、けふさあるものを、よし同じ日ならずさも、仇に待つ日を重ねさすな。我のみか、幾千萬の人心、同し思ひに待ちぬらむを、やよ鶯、さく來てもらせ、只一聲をだに。

美濃君子

古人も、春やさき花やおそきさ聞きわかん鶯だにも鳴かずもあるかなさ詠しけり、實に春立ちて待るゝさものは鶯の初音にぞある、我や、新玉の年の初空、霞む計りに長閑にて、軒端の梅も三つ二つ笑み初めしより、心おのつから春めけは、あたさは知れさ、今日や來らん昨日や啼かんさ、只鶯のみ待たれて、いつさはなしに、三十日餘りを送りつゝ、やうやうこゝに春立つ日の來りぬれば、今日こそはさ思ふ心の、人にもまさりて、東雲の空のまたしらまぬに起き出てゝ、今かさばかり、ひた待ちに待つさ知らすや、鶯の其なつかしき聲は、かすかにだもゝらさで、只春の初風の送る梅が香に、日の暮しこそうたてけれ。アゝ鶯よ清少の物もさをかこたしめし汝なれは、今宵一夜はあへてもしのはん、若し我汝を待つ心の切なるを知らは、明日は疾く來て、初音を聞せよかし、我は只汝の一聲に心やりせん。

御味元以子

千歳へし松も若がへりたる心地せられ、高根をいづる朝日かげ、千代をうたふ雀の聲、いづれもゆたかなるに、籬のもさの紅梅の、一二輪綻びそめて、いさぎよくかをれるなど、たちかへりたる春のけしき、いひしらずのごかなり。あはれ、鶯來なかば、ひさしほのながめなるらん、谷の戸いづる一聲もがなさ、深山べをながむるに、春たゝぬさまみゆるこそ、いさゞたらはぬ心地せらるれ。

歳暮祝　山田瑋子

海陸のみいくさひさもいさまありて
おほみよやすきさしのくれかな

除夜　仝

身に積る月日さおもへはおろそかに

けふのひさ日もすくすへしやは　　山田璋子

元旦によめる

あらたまの年をむかへしうれしさに
身にそふおいもわすられにけり　　仝

二日たふりあたゝかに成けれは

たつさしはまた冬なからのさかにて
あめのおささへはるめきにけり　　仝

田家煙

榮ね行く御世のためしに立つものは
しつかゝまさのけふりなりけり　　稲原菫子

田家煙

君か代は田ふせのいほもにきはひて
たねすみそらにけふりたつなり　　吉岡歐子

名所子日

うちむれてひくや子の日のひめ松に
おいをわするゝかめの尾のやま

年暮　　羽後　谷口ふさ子

昨日さすぎ、今日さくらして、飛鳥川のはやくも月日の流れ行きて今年もはや夢の間に過ぎぬ、積れるちりごもかき拂ひ、門のかざりのいそぎをするなど、高きもいやしきも、行く年を送り、こん年を迎ふるいさなみのしげく、ゆきかふ人は近なり、空行く雲も、常よりはことなる心地ぞせらるゝ、さるを、我か身は、なに事もなしつる事はなくて、徒らに年のみつもり行けば、門の松竹の思はんこともはつかしく、いさもく、年の別ぞをしまるゝ。されど、一年なから事なく暮して、また來ん年を迎へんさするこそいさゝかうれしくは覺ねられけれ。

敎ふる心を以て學ぶべき說　　高松市　長谷川春子

師の敎を受くるは、ひたすら心をそこにそゝぎて一かごにてもなほざりにき聞ながすことあるべからず、されども人情の常として、あまたきくこさを貪りなば、あるは其中一二をば聞き落したる、あるはさころごころおぼろげなることなきにしもあらず、さておのれ人に敎へんさすには、いかにかすべき、其道のことはりをば十分に辨へ知りて、說く所いさ〳〵たしかに、敎を受くる者をして、なるべく面白く、十分に感ぜしむる様なさゞるべからず、若しおぼろげに會得したるばかりにして、はや人に敎へんさせんか、說く所まことにたど〳〵しく拙くて、聞く者をしてさまにかうさきに會得するに苦しましめん、かくてはいまだ其事を敎へたりさはいふべからず、されば人に敎へんには、其敎ふべき事柄をたしかに知らんはいふまでもなし。なほ進みては、十分に奥深くきはめさとりて、十がことを敎へんさならば、それにつきての十四五の智識をばそへおくべきなり、されども、こはおしなべたらん世の常のものには到底のぞむべきことにあらず、まづはさまれかくまれをしふべき事につきて、一つも暗き所なく一わたりわきまへ知らんさこそ心掛くべけれ、されば人につきて物學せんにも、今學ばんことは、後の日人にをしふる事なりさの心得にてあるべし、さあらんには、おのが心おのづさ一すぢにそこにあつまり、聞落したる筋も、おぼろげになるふしもなく、一より十まで殘る方なく覺ゆることを得ん、げにも大切なるは此の心得になんありける。

亡妹墓詣の記　　羽後　佐々歐子

飛鳥川のふちせ常ならぬ世にしあればこそ、彼の法師の言はれし言の葉の如く、今更に世のはかなきをかこつさにあられど、まのあたり憂き目を見ることあさましけれ。今年もはや名殘なうなりて、嵐ふきおふ木のはさへ、涙さ共に亂れ散りつゝ、かなしげなるに、我が妹が返らぬ旅にむかひてより、袖の涙ほさんすべもなければ、日毎に詣でつるに、父君の御墓の側に卒都婆の影のはかなげに立ちたるを見るにつけても、親さ子が草葉における露よりもはかなくうせゆきて、よべさいらへぬなげきのみなり、只ことなものは松風の聲のみあはれ同胞さもに手をたづさへて、花を賞するあしも月を翫ふ夕にも、打つどひたらんには、如何にうれしからん、かゝるさびしき所に、夕の嵐夜半の月を友にし、親さ子が住み

給ふらんさ、いまさらに胸せまりて、手向くる花も露おもくひさげの水もかさまさりぬあはれ浦回を遊びしも昔の夢なりけり、思へば胸のみせまりて、先立つものは涙なり、今年の春諸共にうつしゝ姿は、此世のかたみにて、朝夕に眺むれど物言ふこさもなければそもかひなし、松風すごく吹きまよひ、木の葉の散り亂るゝのみなり、何をかすつらんさ、多くのむらがらす飛び來りて我が悲みを受くるが如く、さびしげになきて、ひさきは哀れをまし忍びかだき心地せられてなん。

卒業の折亡き父を偲ひて　　越中　吉岡うた子

ちゝのみの、父のみことの、ましまさば、いかによろこびたまふらん、學のわざを今日をへてかへる古鄕のうれしさも、父なき宿は何させん、たへかれ落つる、一しづく、盡きぬ恨をふくむなり。今日きてかへる古里に、錦の袖をよそへども、父のみことのおほせれば、誰にかみせん、この證書つきぬ涙にむせぶなり。母のみことのましませさならびゐまさぬかなしさは、又中々にまさるなり。

田家煙

足ひきのやま田のささもあさゆふの
けふりゆたけき御代そたのしき　　出良露子

年ことにいやさかねゆくさよあしはら
しつかふせやのけふりにきあふ　　萩尾福愁子

君か代のゆたけさみねてしつかすむ
やま田のいほにけふりたちそふ　　仁保基子

立なひくかすみさみしはゆたかなる
たみのかまとのけふりなりけり　　德永萬壽子

けふり立やま田のいほもにきあひぬ
をさまる御代のきみかめぐみに　　千々波橋子

み空にもさかゆく御代はみねにけり
やま田のいほにけふりそひへて　　岡本美喜子

君か代は小田のゝきばもにぎあひて
たつけふりさへゆたかなりけり　　岡本仁子

にきあへるしろしをみせて賤かやも
けふりたちそふ小やま田のささ　　吉弘岡子

ひらけゆく御代のみつきのしろき哉
田なかのささにたねぬけふりは　　吉里常子

おち穗拾ふ小さりこさもにたちのぼる
けふりにきあふ小やま田のささ　　長野孝子

天のしたかきりもみねぬしつかやに
さしのはしめのけふりのさけき　　野田勝子

ゆたかなる御代のめくみのほさみねて
たみのかまさにたつけふりかな　　黑田美津子

みわたせば民のかまさにあさなゆふな
のさかにたつるけふりゆたけき　　藤由竹子

あたらしき朝日のひかりのさかなる
やま田のささにけふりたなひく　　佐々小琴子

おしなへて山田のいほにたつけふり
ゆたけき御代のあきみゆるかな　　佐々有鄰子

新たまのさしたつ今朝はにきはしく
たみのかまさにけふりたなひく　　澤田春子

うちわたす田中のいほのけふりこそ
さしたちそへていやまさりけれ　　右田藤子

明治三十二年女鑑歌文月並兼題

二月廿日	歌　霞隔行船 文　同返事（五日兼題文の返事）	二月十日〆切
三月五日	歌　閑居春雨 文　某高等女學校入學の手續を問合する文	二月廿五日〆切
三月廿日	歌　曉歸雁 文　落第せし人を慰むる文	三月十日〆切
四月五日	歌　花滿山 文　花下に月を賞す	三月廿五日〆切
四月廿日	歌　汐干狩 文　遲咲の櫻を見て	四月十日〆切

〆切期日に遲れたるは總て採用せず。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題

…………………

…………………

住所 姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

……、……、……。……、……、……。……、……、……。……、……、……。……、……、……。

住所 姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○書式に違ひたるは總て沒書とす。

○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得

孝明天皇御遺徳

先帝御製御歌挿入　全壹册　●實價廿五錢郵稅四錢●

恭く按するに先帝孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟聖徳**尚湮晦に屬し未だ外に露れず是頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷**談に依り以て汎く**事蹟逸聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖徳の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず今試みに本書の一班を示せむ左の如し

御一代の章を掲げ編年体を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し

聰明の章に於て先皇の英明絶倫なるを概説し

夙成の章は御幼時の御言行を示し

慷慨の上編は醜夷掃攘の事其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し

孤憤の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す

撫御は識見卓出の實際を明らかにし

豁達は言路洞開の聖徳を輝かし

忍耐は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し

仁愛は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす

前數章に配置する能はざりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て**先帝の聖徳を頌し奉る**

國民たるものゝ必讀すべき良書なり

東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）

發行所　國光社

肝付海軍大佐題辭　小笠原海軍大尉序文及作歌
伊東海軍中將手翰　木村海軍大尉校閲

●西主一
●野口衞佐美合著

訂正三版

新案海軍遊戲法

菊版美本
詳圖入
全一冊
定價金二十錢
郵稅金四錢

本書は我海國男子を養成するに最も適切なる良書にして其の要旨を海戰に擬したる兒童の遊戲法を至極面白く簡易にしつ明瞭に解きたるものなり世の父兄たるもの宜しく一本を繙て以て家庭の資とすべき有益の書なり

●學校用としては殊に妙なり●

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

大日本體育會々長陸軍大將野津伯爵題字
副會長貴族院議員丸山作樂君序文
陸軍憲兵大尉隈元實道先生著

全
三
版

體育演武必携

全壹冊

定價貳拾錢郵稅貳錢郵劵代用一割增

編中には左圖の如く一々圖解を附け又至極讀み易き文字を以て說き明したれば學校生徒にても其外誰も之を讀まむ劍術と柔術の奥意を詳く飲み込むこと容易なり



本書は劍術柔術の基本に加ふるに兵式號令を以てし先生が日常門生に訓練せらるゝ所のものを懇切に說明せられたるものなり故に本書を熟讀する時は場裡十年の苦行は僅々數句にして卒り速に豁達自在の域に至ることを得べし

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 靜思舘

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事

○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十二年一月廿四日印刷
同年一月廿五日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衞
印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木頁雄
發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷部）